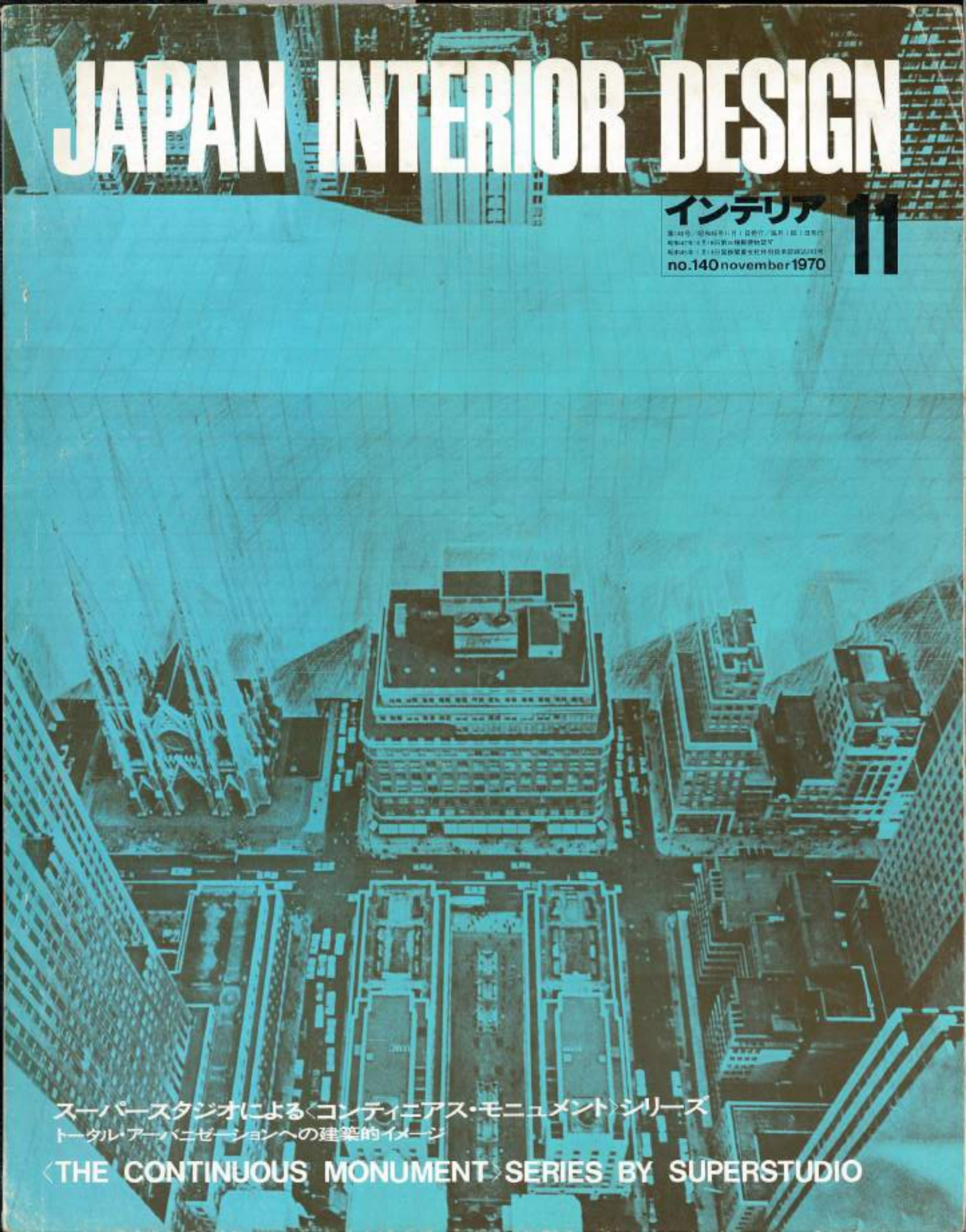
JAPAN INTERIOR DESIGN

インテリア 11
no.140 november 1970



スーパースタジオによる〈コンティニアス・モニュメント〉シリーズ
トータル・アーバニゼーションへの建築的イメージ

〈THE CONTINUOUS MONUMENT〉SERIES BY SUPERSTUDIO

JAPAN INTERIOR DESIGN

インテリア

no.140 november 1970

目　次

〈コンティニアス・モニュメント〉シリーズ・スーパースタジオ　21

トータル・アーバニゼーションへの建築的イメージ

映画製作のためのスケッチボード〈コンティニアス・モニュメント〉の発想　29

見本市展示館のためのプロジェクト　36

化学薬品会社館〈スタンド・ヘキスト〉　設計計画　ジョエ C　コロンボ

[illegible]

ヴァーチャインデザイン展〈ドッグオブ・ファイブ70〉　46

主催　日本デザインコミッティ　コミッショナー　鬼頭雄策

アスコ社の新作家具　50

アルフレックス・ジャパンの新作家具　52

シルクホテル・コーヒーショップ　設計　坂倉建築研究所　54

グランド・ハブ〈サンシャイン・ビル〉　設計監理　東孝光建築研究所　56

世界のインテリア　フィリップスイ（オランダ）　62

瓦林陸生の作品　文・小倉志夫　70

新聞社屋公園第2回現代彫刻展　72

主催　神戸市　朝日新聞社　日本美術協会神戸支部　文　赤根和生

表紙　コンティニアス・モニュメント　都市シリーズ　ニューヨーク・ロックフェラーセンター

[illegible]

未知の感覚をデザインする月星印ステンレスパイプ
室内装飾のテーマ素材としていま注目されています

長年ステンレスパイプの特徴は、ステンレス本来の機能性をベースにシャープな美しさ、マッシヤリ一貫生産による日産ッと、インテリアのテーマ素材へと注目は高まり、室内装飾エクステリアとしての可能性は無限です。いま、未来へのイメージの創造の意欲を大いにかきたてています。

世界一の技術と生産を誇るステンレス鋼板メーカー――「日新製鋼」の「月星印ステンレスパイプ」は、最新の設備と高度の技術によって一貫生産、室内装飾用として十分に満足いただける、最高級の製品です。

くらしと鉄を結ぶ月星印――――

日新製鋼株式會社

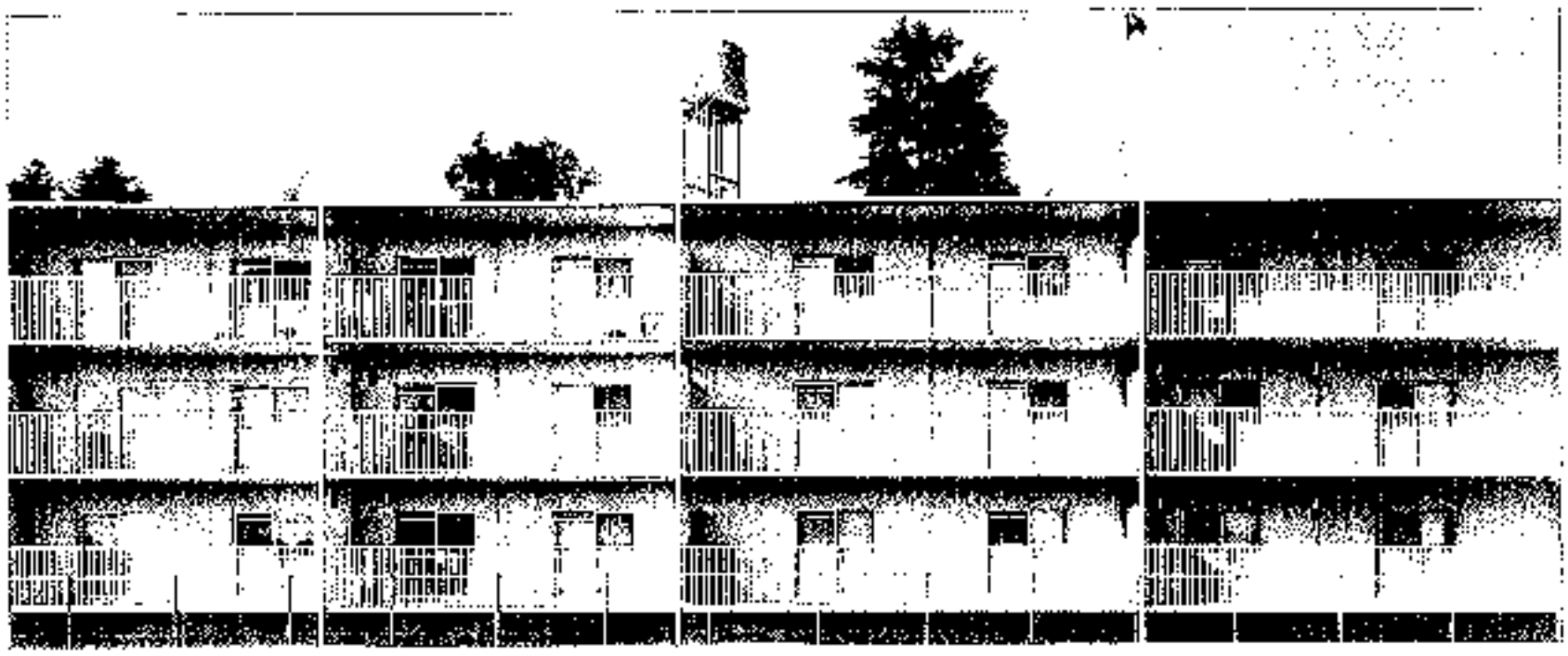
東京都千代田区丸の内3-4 日新国際ビル TEL 03(216)5511

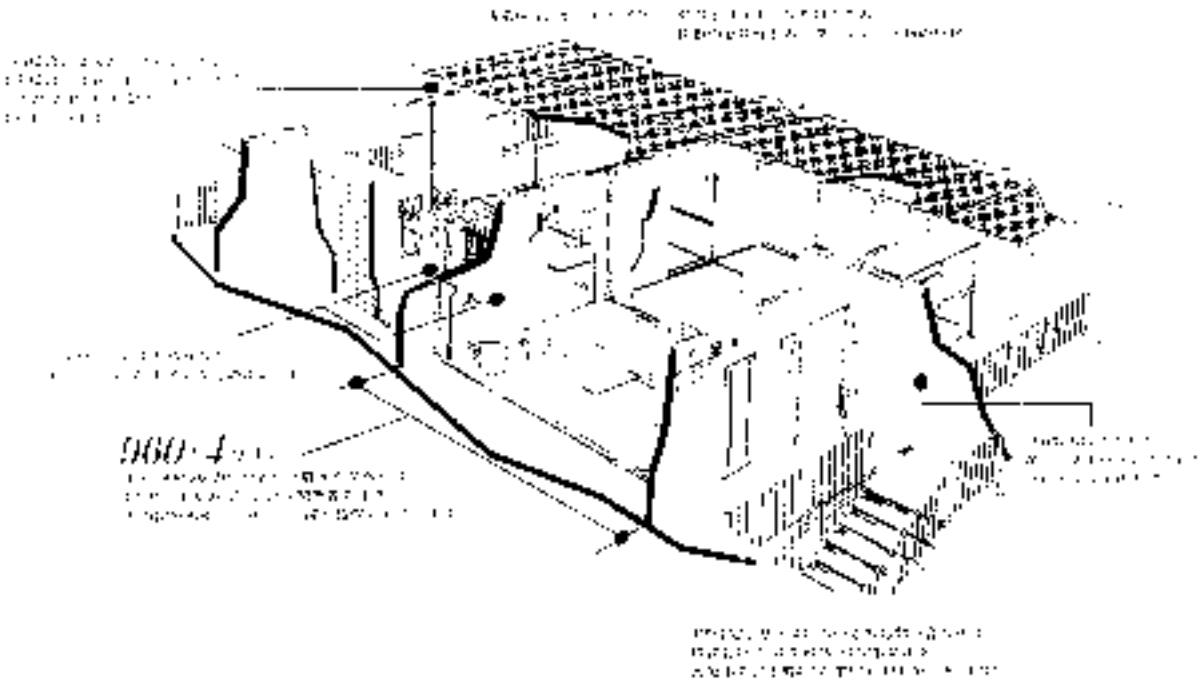
TAKENAKA

ICS AA

竹中工務店はICS:Integrated Construction System＝統合生産システムによって
豊かな社会環境づくりを目指しています
ICS＝AA「中層アパート」はICS住宅シリーズの
サブシステムです

ICS＝AAは竹中工務店が長年の住宅建設のノウハウを生かしつつ、宅地開発、住宅計画、設計、管理までを総合的にシステム化してコストパフォーマンスはもちろんのこと、快適な居住性を、一つ一生涯トラブルのない住宅を提供する事を目的としたICS系シリーズのタイプ。機能的な住戸に入ってみて、ゆったりとくつろぎ、ゆとりある部屋数をご提案いたします。





株式会社竹中工務店

"自分だけの"が創れる家具です

[illegible]

使い方、お値段に限定がありません

[illegible]

良い製品は結局おトクです

オカムラ

[illegible]

● [illegible] 551 6021

〈コンティニアス・モニュメント〉シリーズ

トータル・アーバニゼーションへの建築的イメージ

スーパースタジオ

地球の未来に対する建築的イメージ〈コンティニアス・モニュメント〉

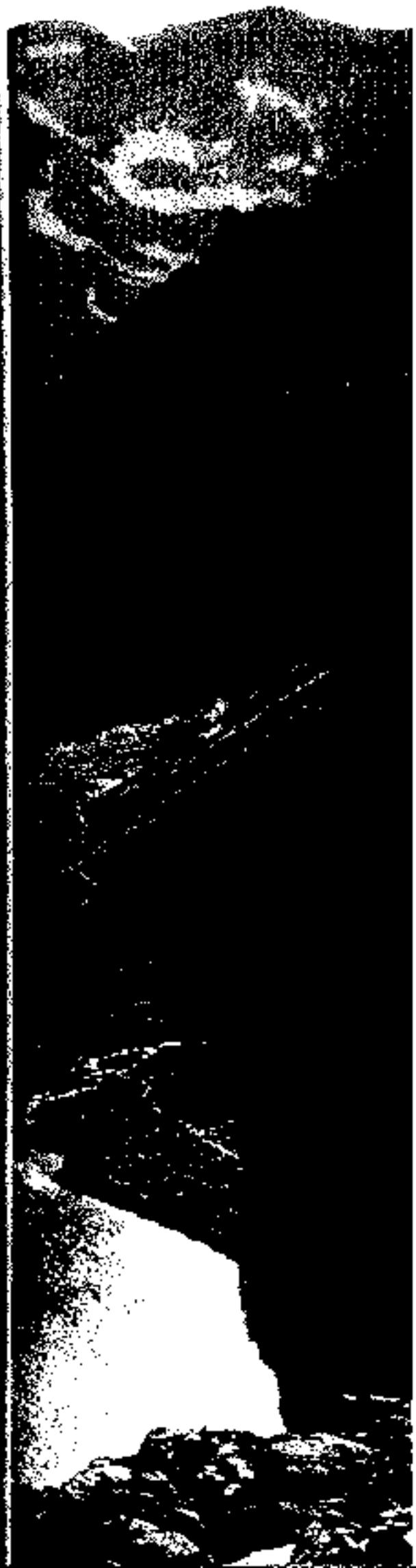
スーパースタジオ

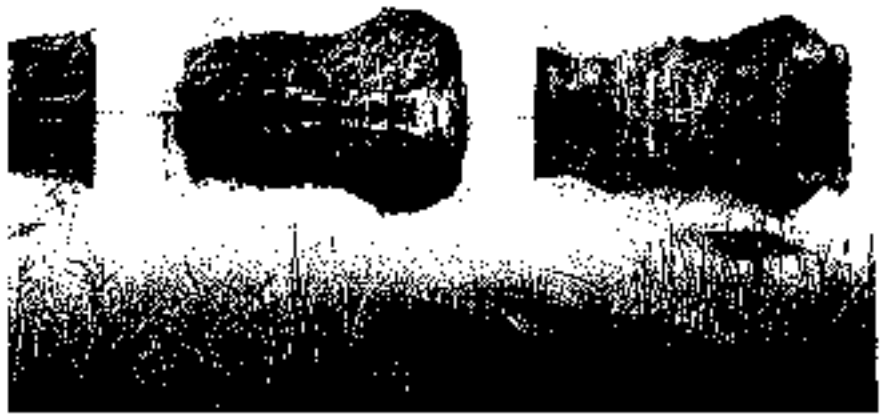
シングル・デザインの発想

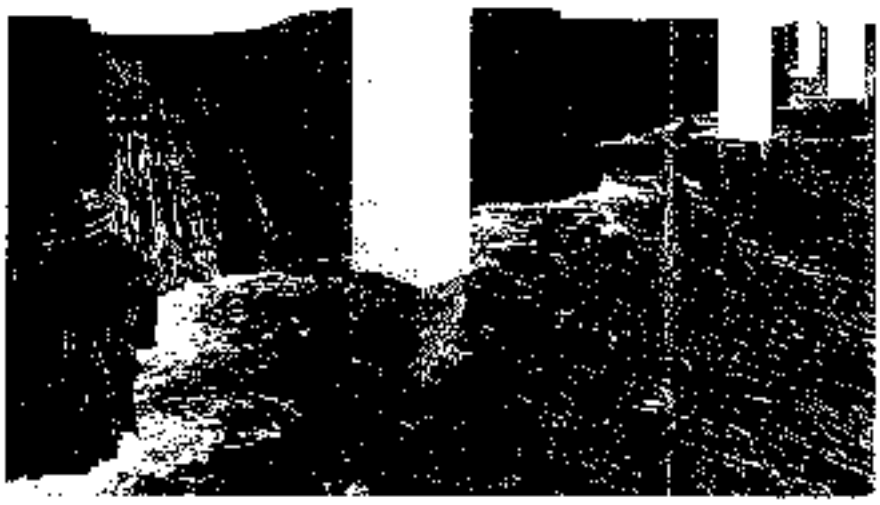
[illegible]

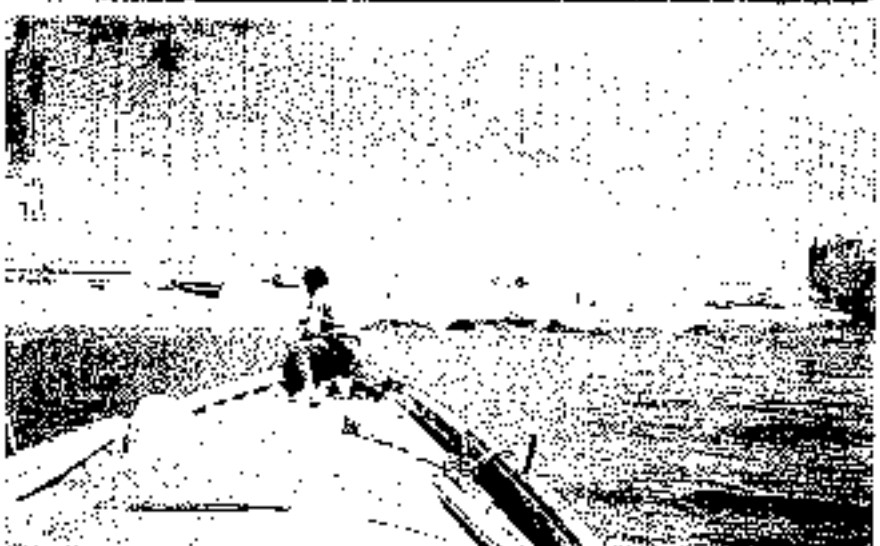
トータル・アーバニゼーションへの建築的イメージ

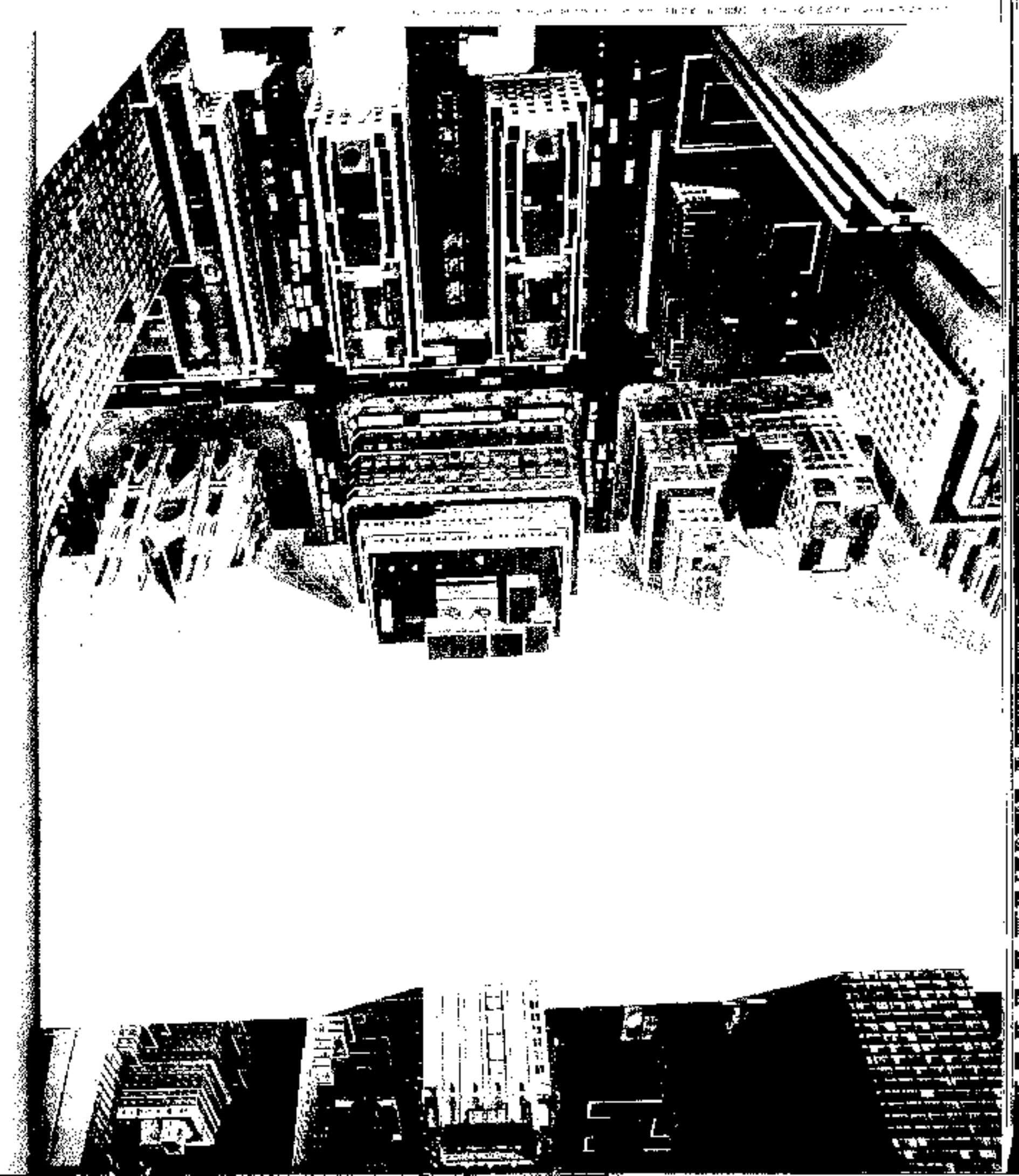
[illegible]











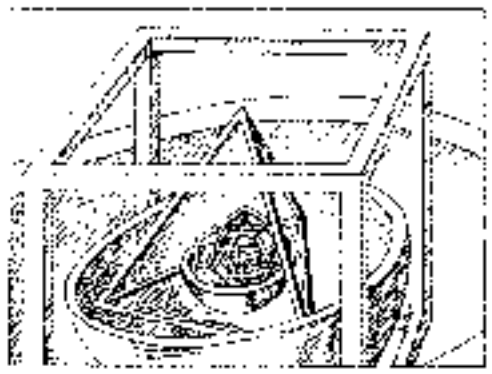
映画製作のためのスケッチ・ボード〈コンティニアス・モニュメント〉の発想

スーパースタジオ

FILM SCRIPT 〈CONTINUOUS MONUMENT〉

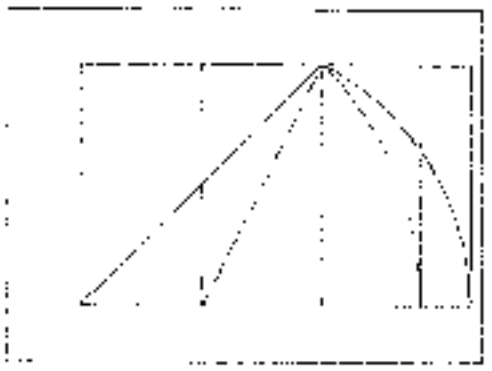
by SUPERSTUDIO

1

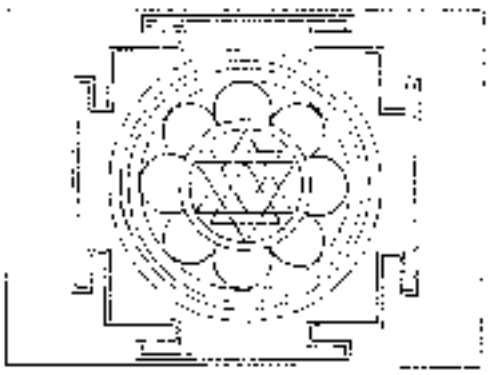


2

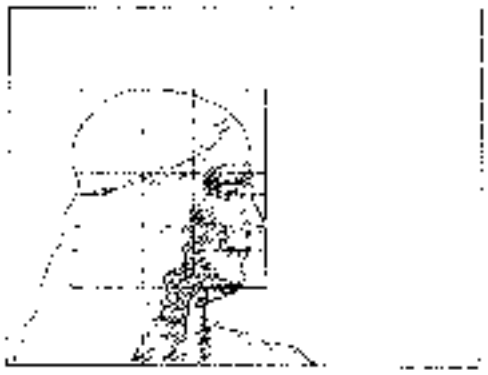
3



4



5

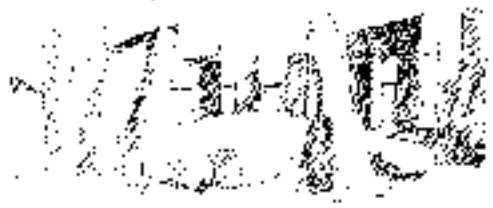


6

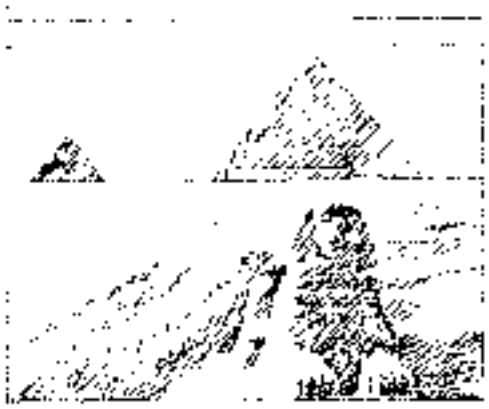
7

8

9

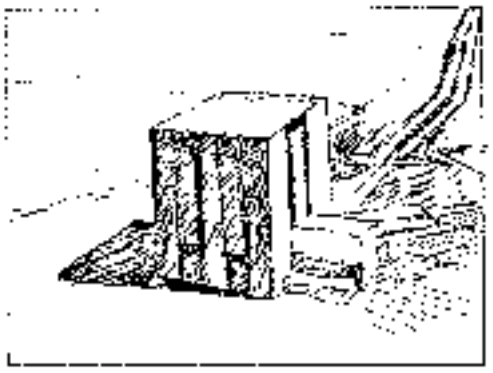


10

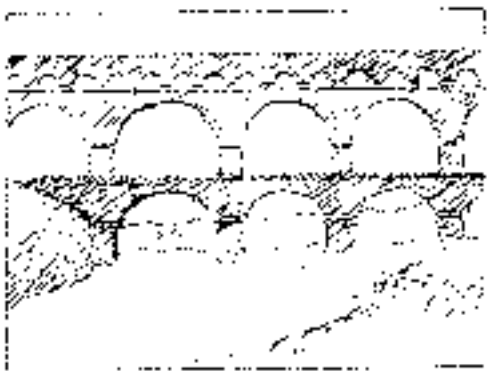


11

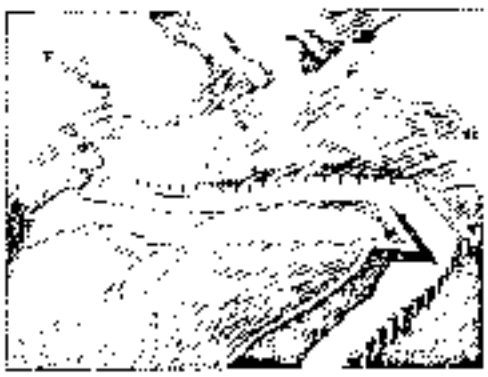
12



13



14



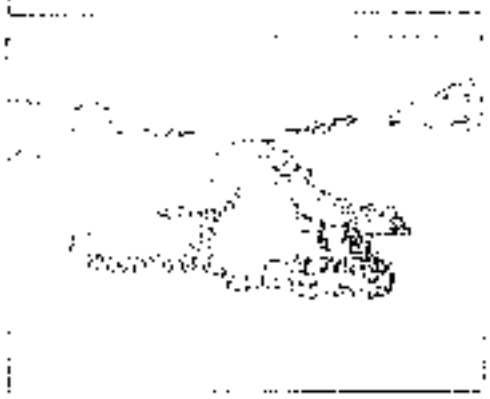
15

16

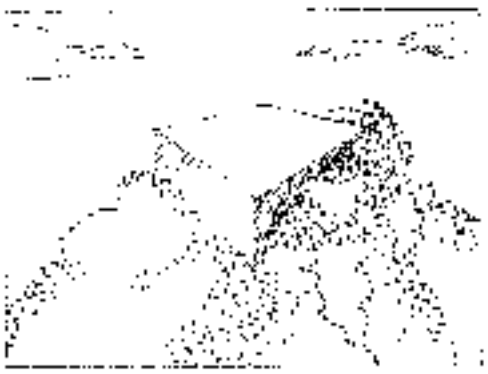
17

18

19

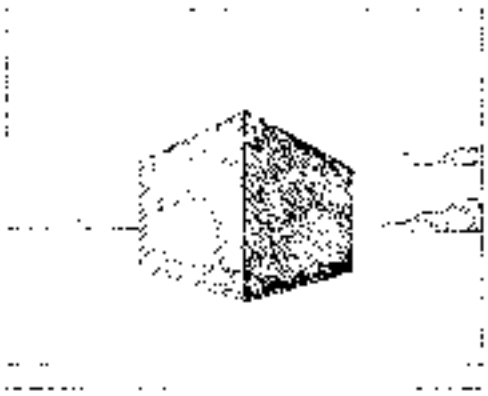


20

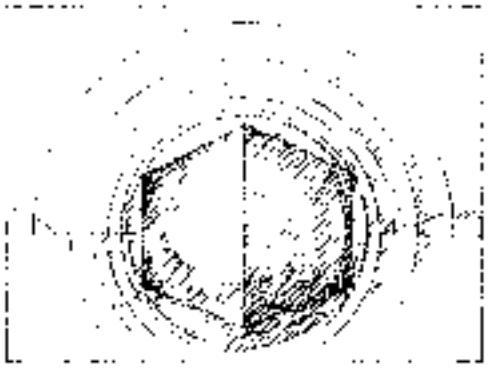


21

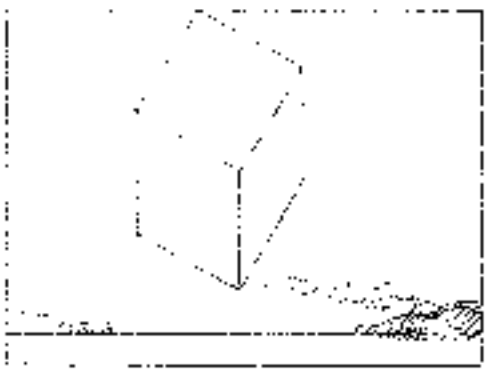
22



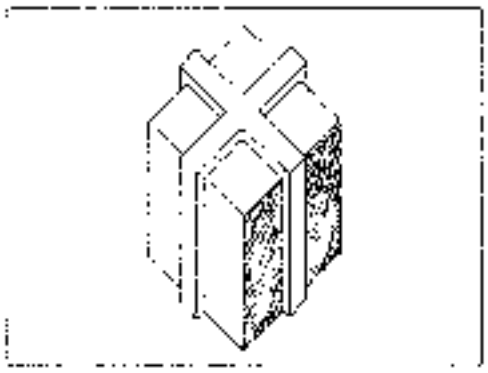
23



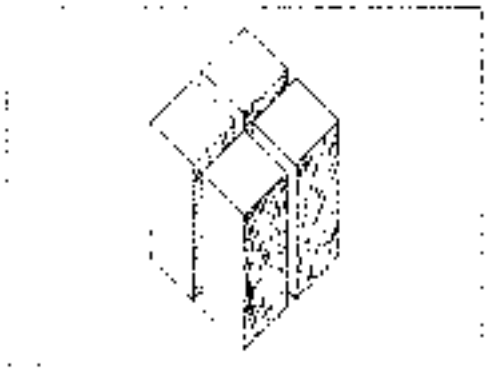
24



25

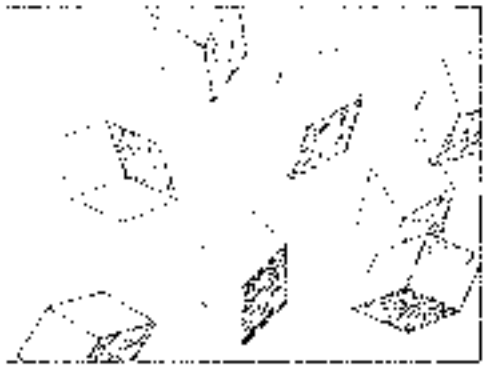


26

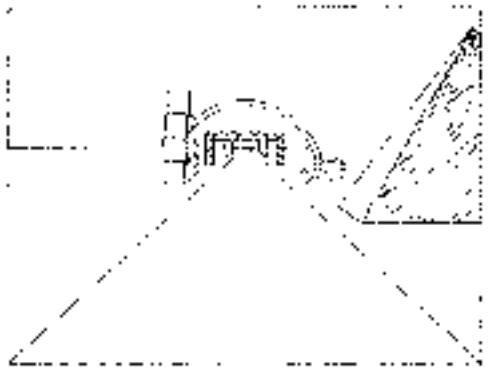


27

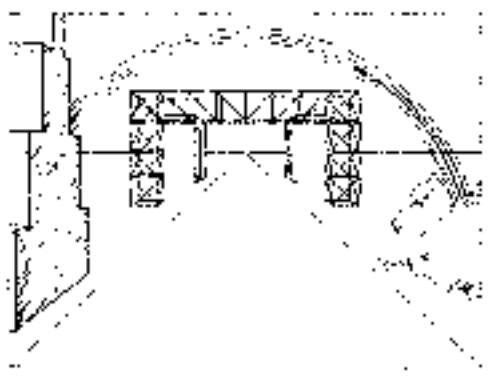
28



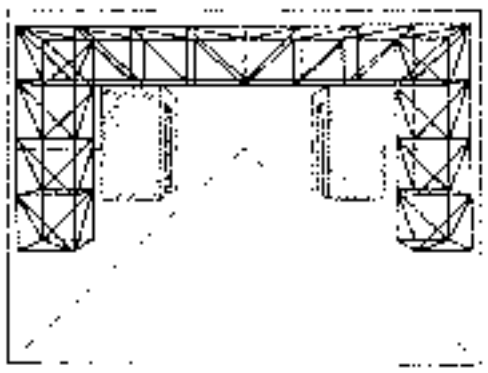
29



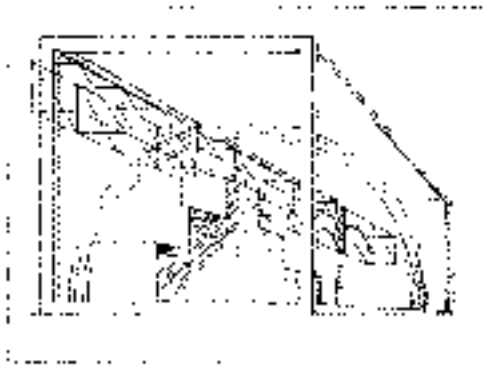
30



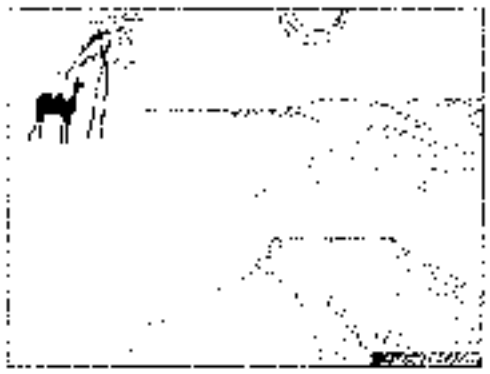
31



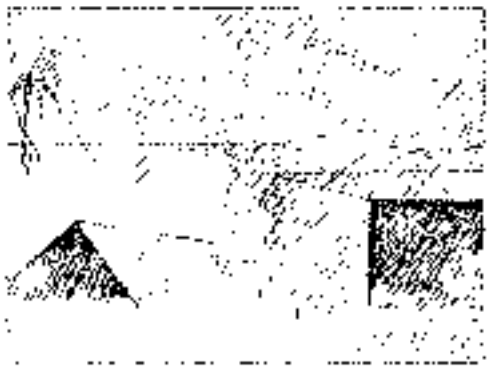
32



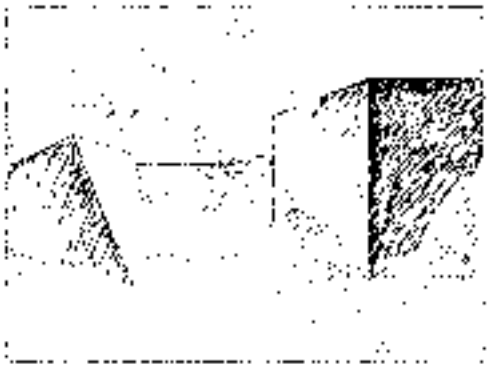
33



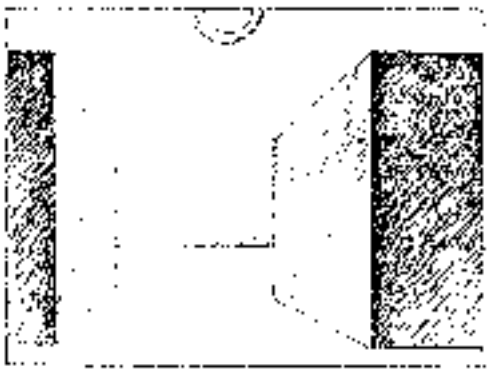
34



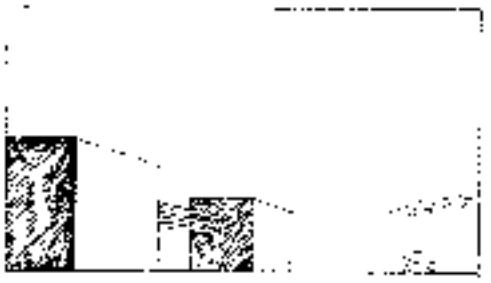
35



36



37

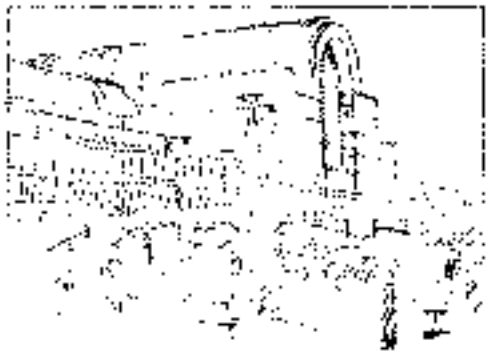


38

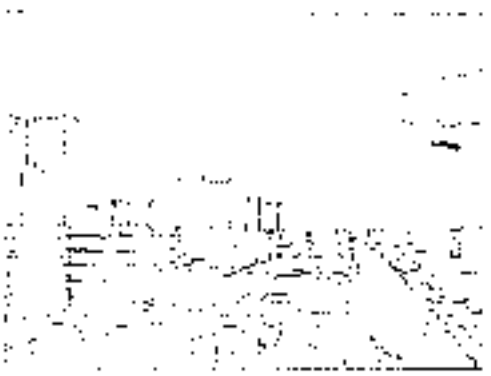
39

40

41

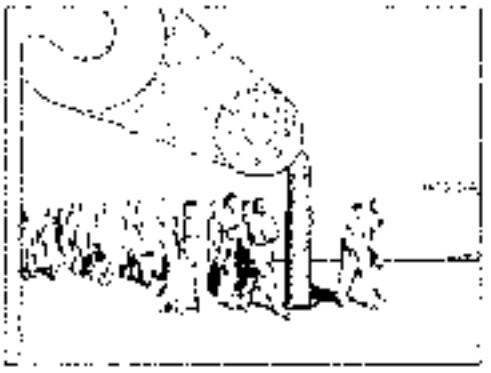


42

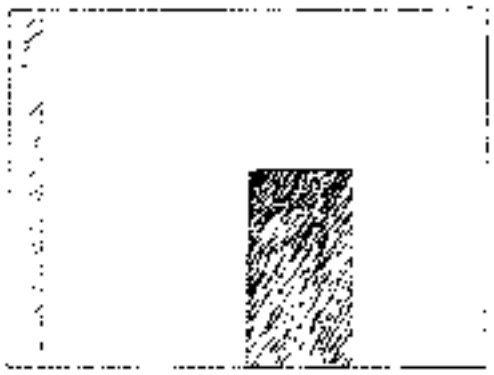


43

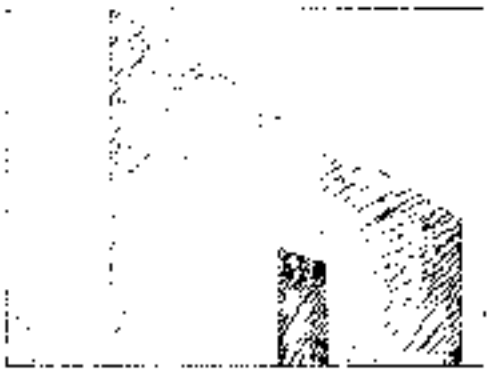
44



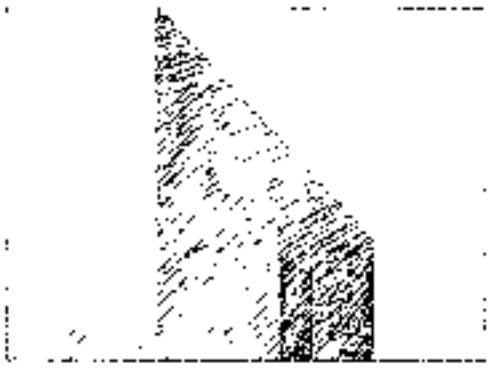
45



46

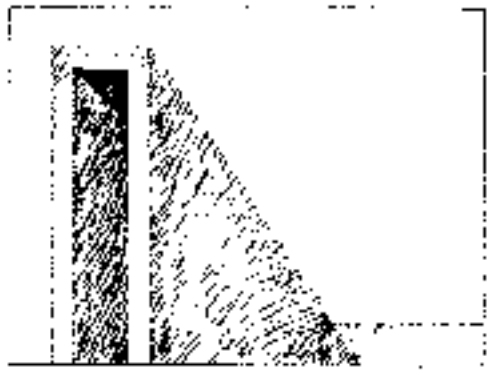


47

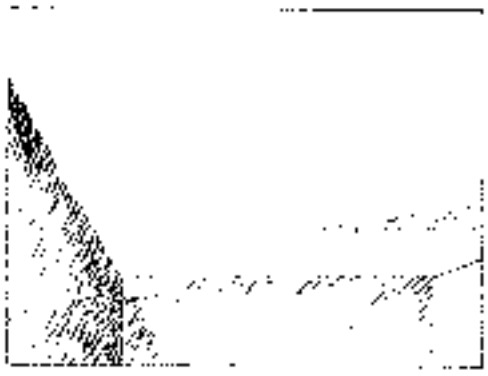


48

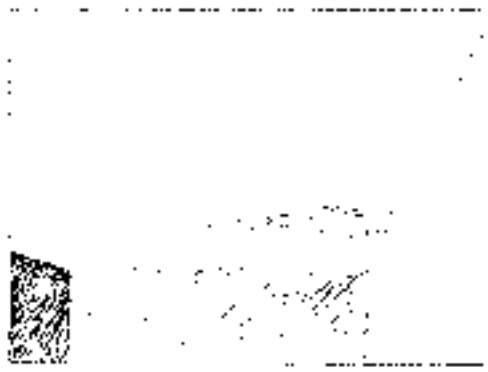
49



50

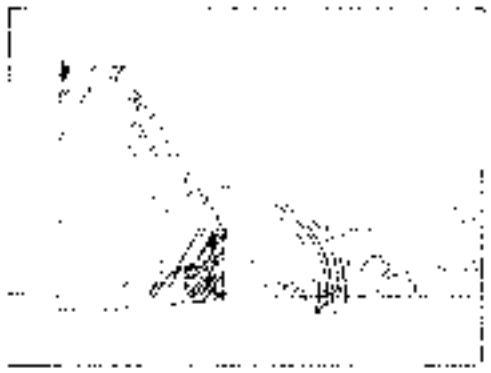


51

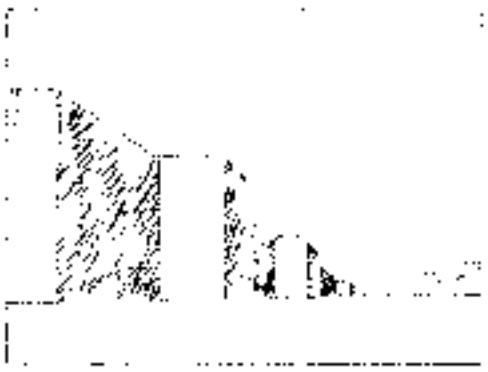


52

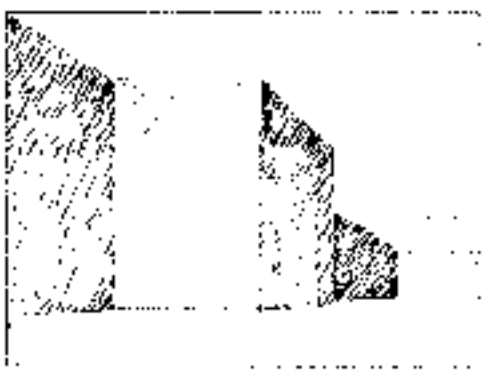
53



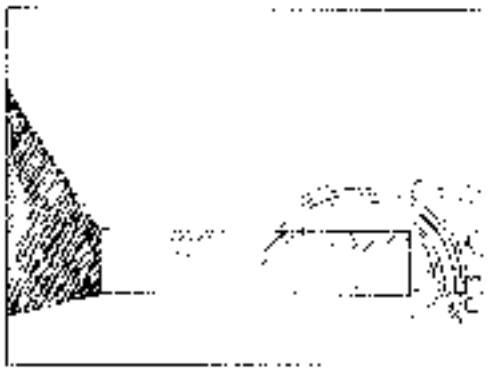
54



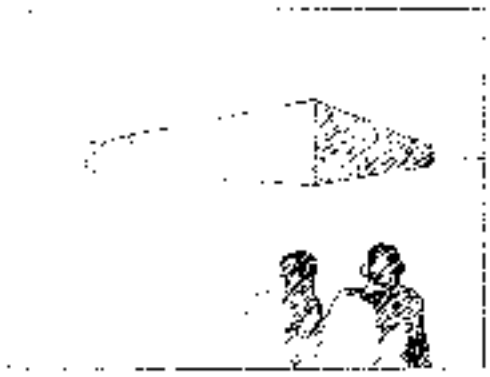
55



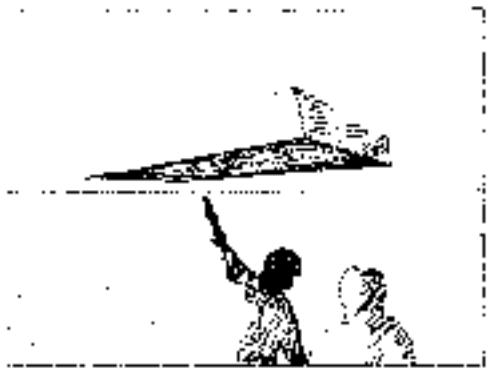
56



57

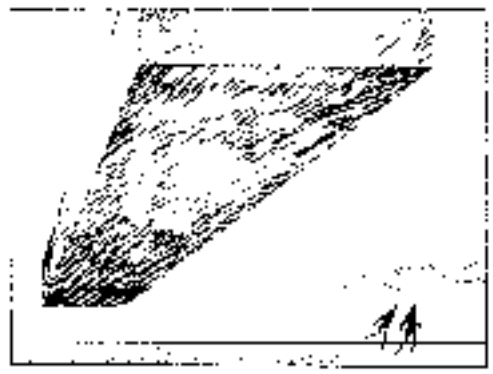


58



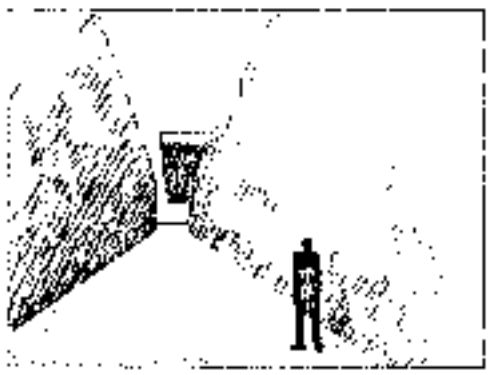
59

60

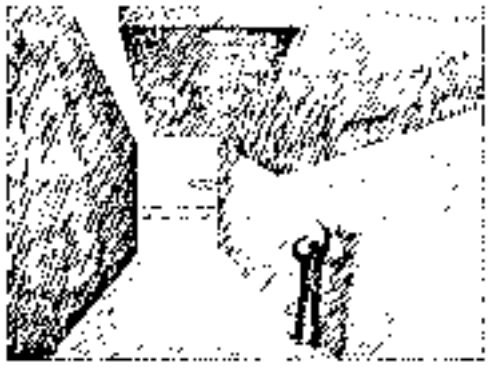


61

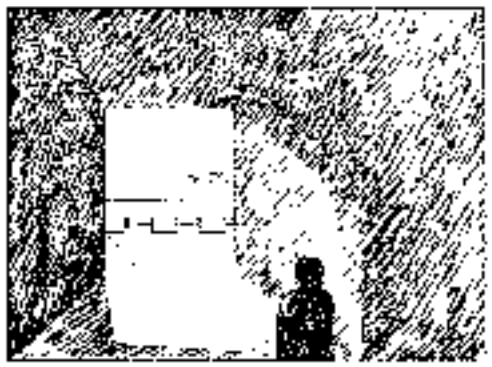
62



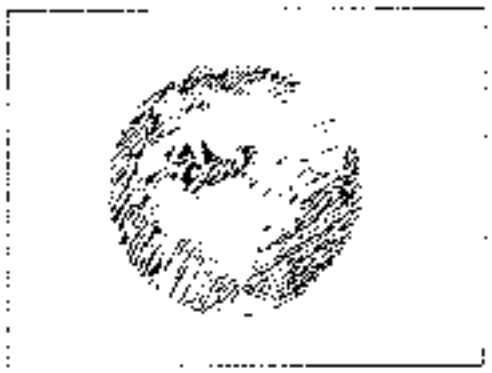
63



64

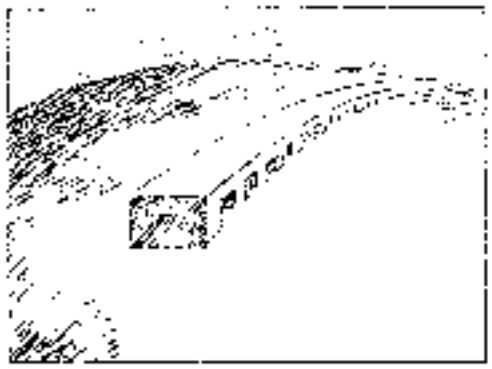


65

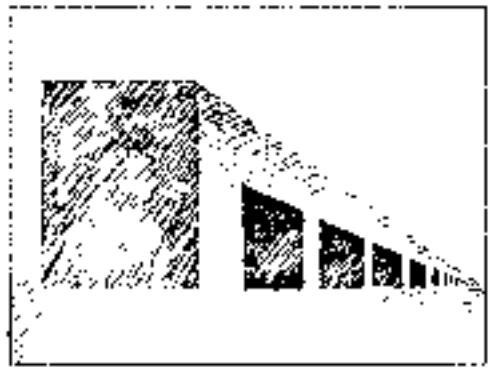


66

67



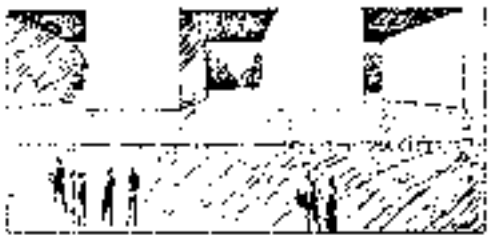
68



69

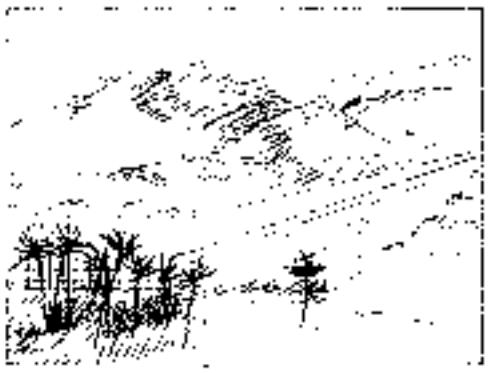
70

71



72

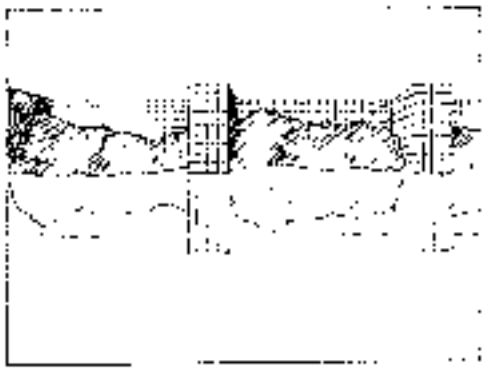
73



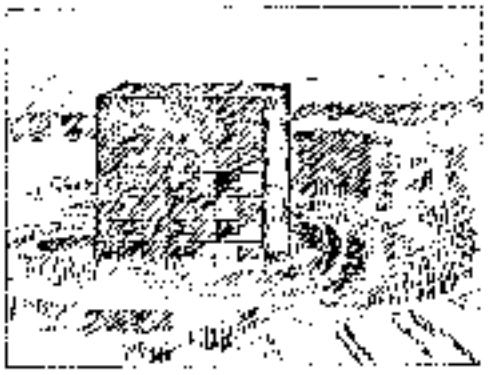
74

75

76

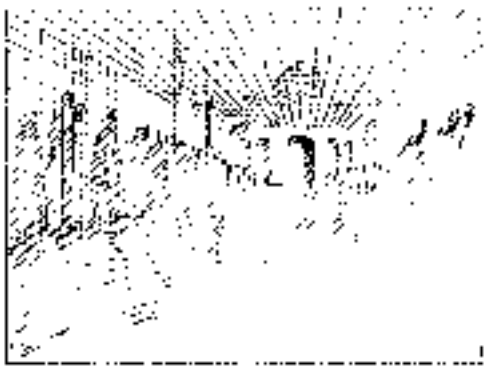


77



78

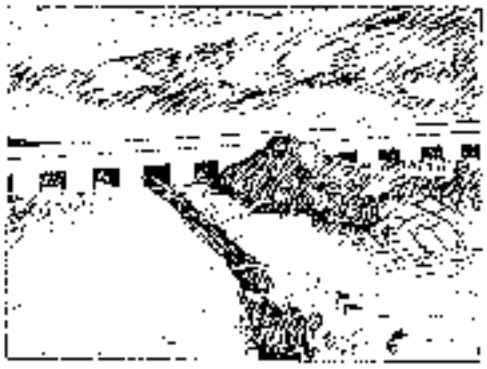
79



80

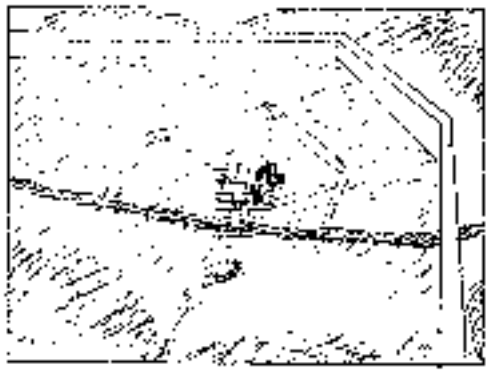
81

82



83

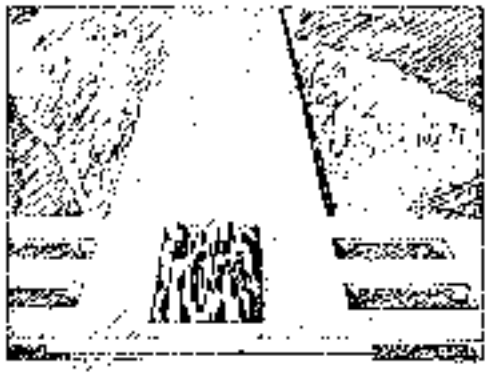
84



85

86

87

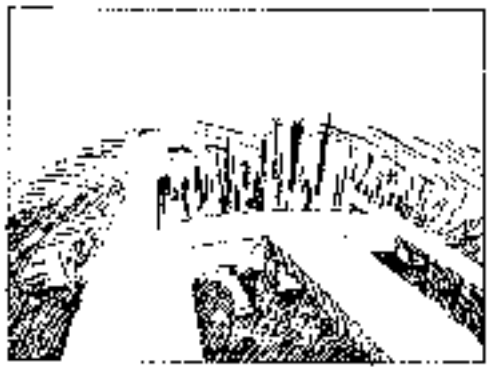


88

89

90

91



見本市展示館のためのプロジェクト
化学薬品会社館〈スタンド・ヘキスト〉

設計者 ジョエ C コロンボ

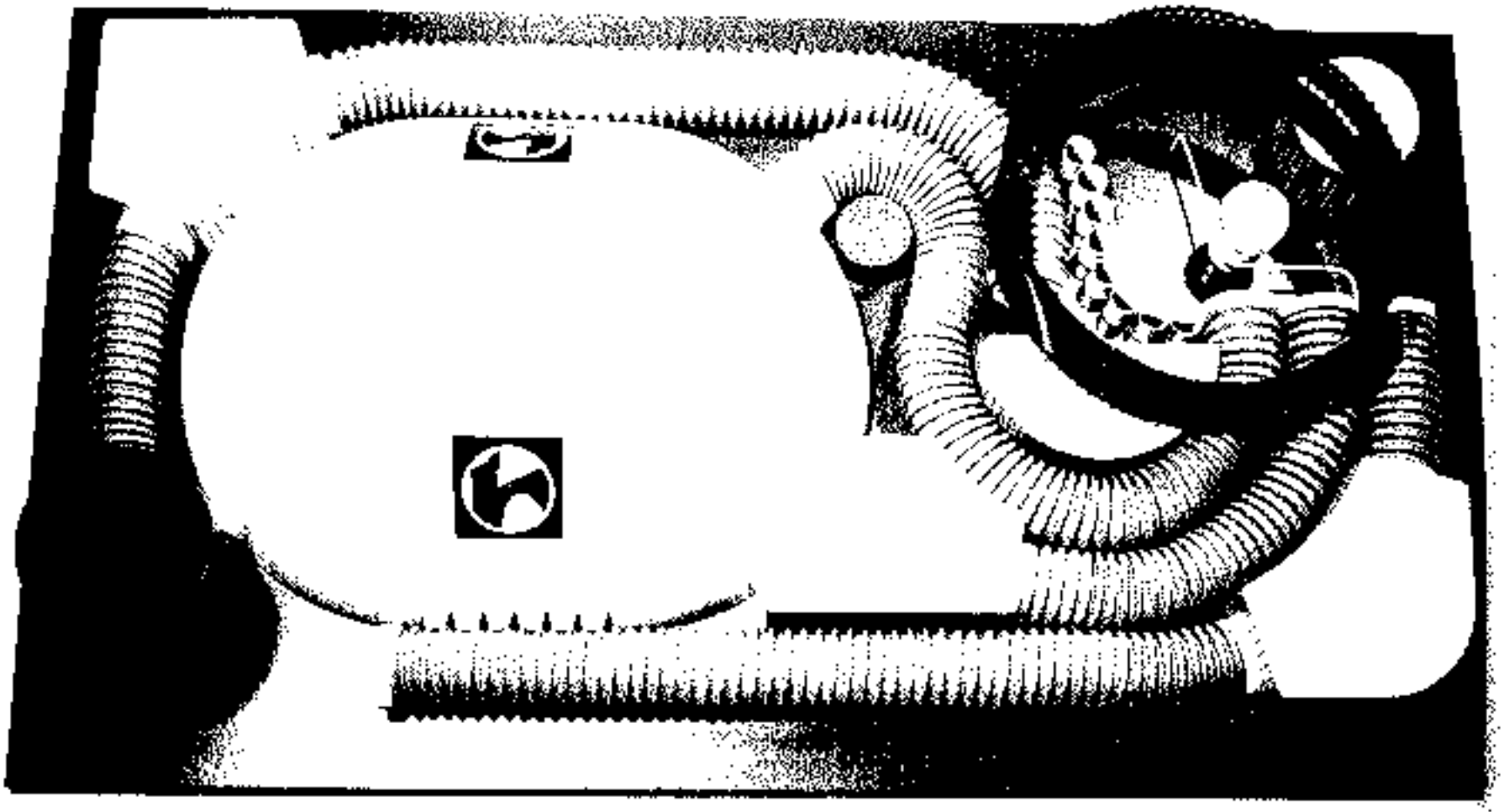
PROJECT FOR SYSTEMATIZED EXHIBITION PAVILION
EXHIBITION PAVILION OF PHARMACOLOGICAL FIRM〈HOECHST〉

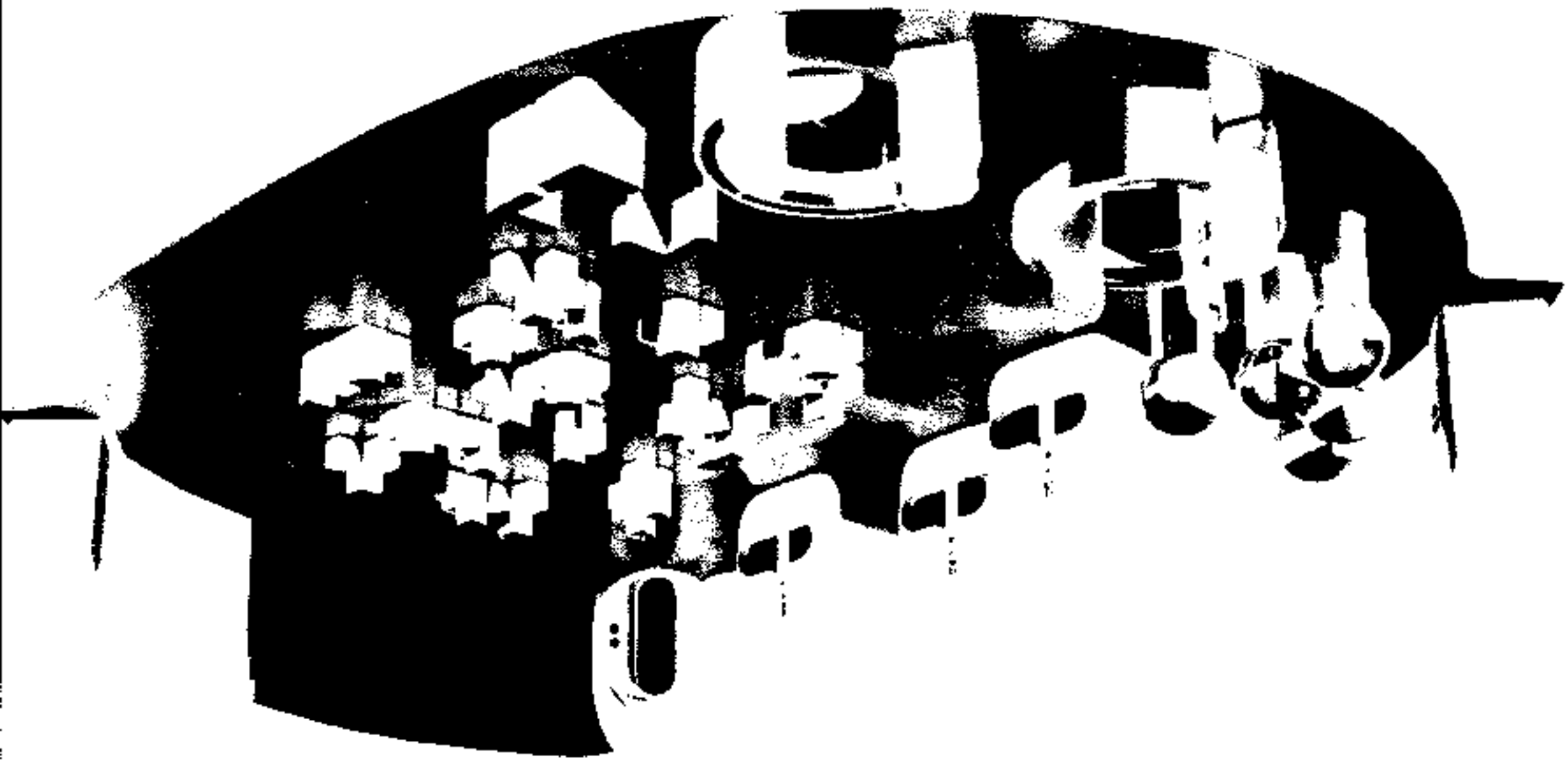
design Joe C Colombo

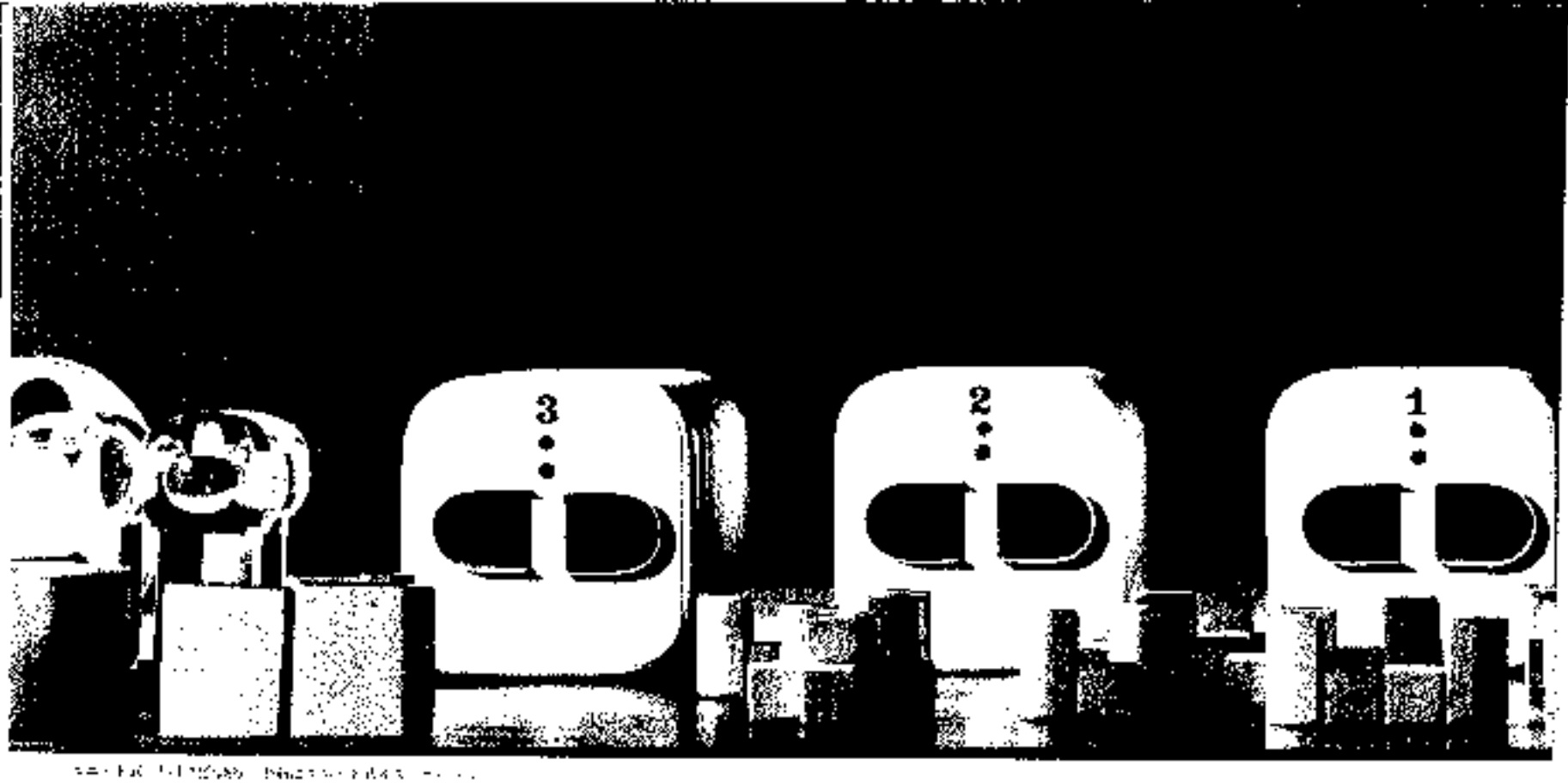
このプロジェクトは西ドイツの化学薬品会社〈ヘキスト〉の見本市のための総合展示館として、1970年のコンペティションに発表されたものである。この計画案は、〈個からマッスへ〉アプローチ…、生産面における機能のシステム化をねらってきたジョエC.コロンボが、さまざまな機能をふくませた総合展示館において設備のユニット化と機能の装置化をさらに発展させたものとして注目したい。ここに発表されたパラパラなユニット化された設備は、当然のことながらこの展示館のためだけでなく、さらにさまざまな場所に応用されるべく検討されたものである。

● 平面及び透視見取図

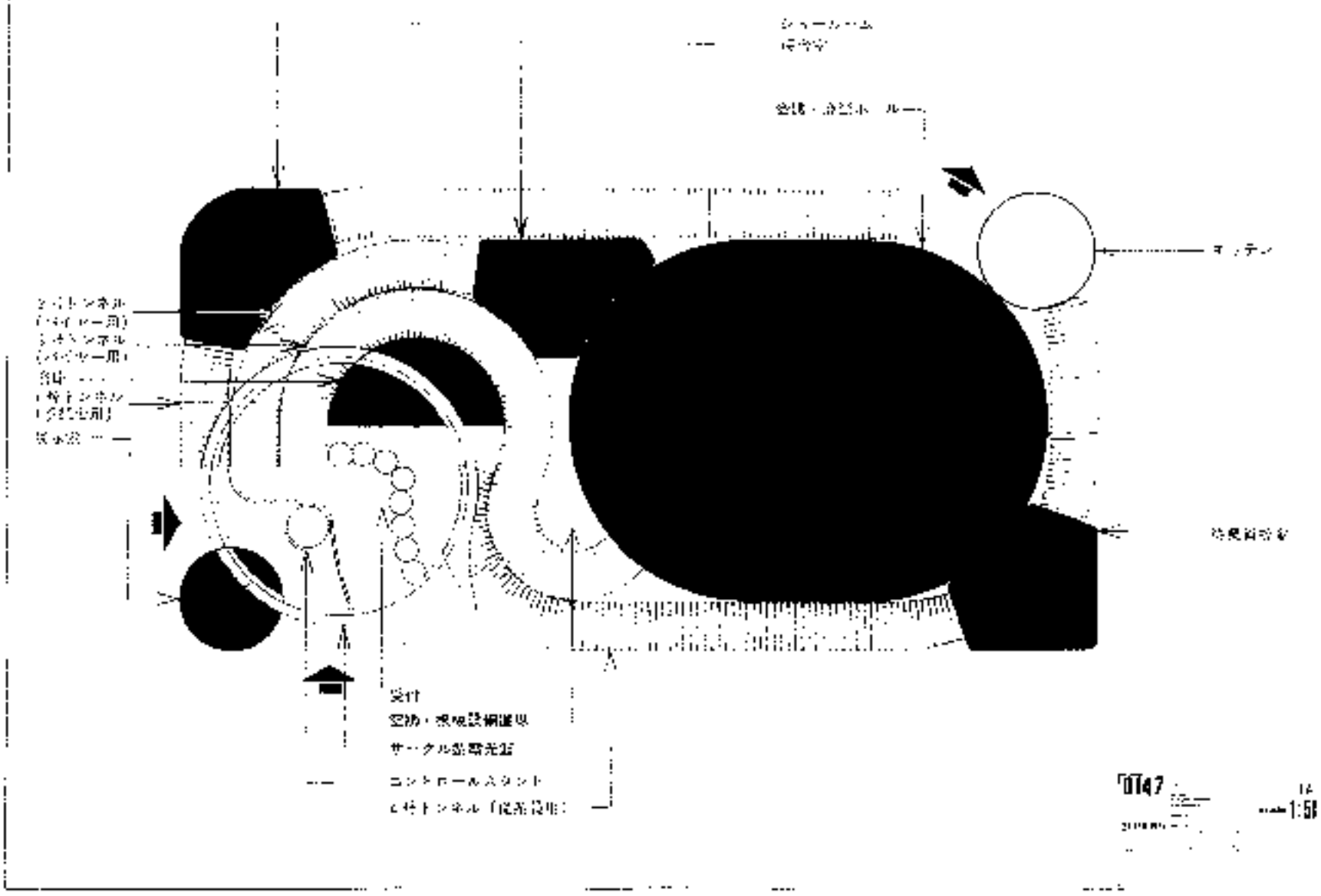
A ニュートランス用シャールーム
B 来場者の流れを調節するコントロールスタンド
C セレクション及びインフォメーションスタンド
D トンネルの出入口（空気幕による自動開閉式）
E ユニット式ドア（つまり使用ニューパーティメント）
F スタンド式電話ボックス
G ロビー（軽い休憩）
H スタンド式バ
（壁一面ホール用の自動式ユニット）
I ストリーム
J 会社員の憩いのための自動式ユニット






3
2
1

●[illegible]


キッチン
受付
空調・換気設備室
サークル照明光源
コントロールスタンド
1:50

展示館における装置化の提案

── ジョエ C.コロンボ

設計意図

●計画の立案にあたって、われわれは研究や発想の基礎を、もっぱら動的機能あるいは全体の雰囲気の演出に求めておこなった。したがって当初に書かれた建築図面は、まるで舞台図面のようになってしまった。その個々の部品は、来観者、バイヤー、従業員のどの立場から利用するにしても、あるいは楽しむという点からしても、最適化されているというよう

これはみたところ、明快に様々な人間におきかえが大きなプリンター、インリウムパネルが想定されるだろう。巨大なプリンターのようなメカニックな光景は、一方では代表的産業の巨大な工場空間がもつ典型的な雰囲気をもたらし、他方では見本市の特色そのものが要求する情緒さをひきつける過程の表現をかもし出している。

結論としてのことが言えるだろう。

1．会期により発表された最適な機能システムによる、バイヤーとの商談、来観者のウォッチおよび従業員の活動の容易になる

2．場内にいる関係者が1人でなく、外からのしそうに参観する人々のいる光景は、会期全体を生き生きとしたものにする。

3．来観者の心をひきつけるような印象的な風景をとることにより、良い雰囲気の表示を成功する。

機能と応用―発展的な創造のために

先にのべた設計構想は、多くの機能をもつフレキシブルなトンネルシステムで結ばれた、2つの大きな部分、すなわちエントランス部分と中央ホールからなるスタンドに具体化された。エントランス部分にはほとんどオープン形式の構造である。上部にＡＢＳ樹脂のサークル型電光表示板があり、さまざまなアトラクションや効果サービスがおこなえる。この空間の一隅に反射性の金属箔でおおわれた円柱の構造物がある。これは来観者、バイヤー、業界人、専門家など誰もが関係の代表的な製品を展示するためのショールームである。この円柱をとりまいて、来観者用の1号トンネルに通じるパイプでしきられたゾーンがある。反対側には受付・行先案内、カタログ、ニュース、印刷物配布などのための8つの受付ボックスがある。訪ずれた顧客の要望に応じて、コントロール・スタンドのテーブルをとり、2号3号のトンネルを通ってバイヤーを商談・会議ホールに誘導する。トンネルは入口広場からはじまり、合計4つあり、1号は来観者用、2号・3号はバイヤー用、4号は従業員用である。1、2、3号のトンネルには、コントロールスタンドと信号装置により自動的に開閉されるコアー式開閉装置がついている。これはポリエチレン製の2つの袋からなり、空気を入れて2つの袋を接触させると通路に開き、空気を抜くと袋はトンネルの壁にぴったりついて閉じる。このような開閉装置には加圧した空気を保存することが不可欠の要素となる。

1号トンネルには、内部全体にグラフや統計、説明文、写真のパネルが貼りつけてあり、出口付近で会議・商談ホールのようすが見えるような窓がついている。さらにこのトンネルの中間に、ヘキスト社の原料で作られた製品のための広い展示場がある。

2号トンネルには、係員と相談する必要があるバイヤーのための待合室が設けられている。

3号トンネルに、直接会議・商談ホールに通じていて、しかもバイヤーの通路にもなっている。

4号トンネルは、実験所の裏側からはじまって、従業員用の更衣・休息のためのサービスエリア、ホール、キッチンを連絡している。

これらのトンネルは、スパイラル状に押出成形されたＰＶＣでできており、内側はアスベスト（耐火材）でライニングされている。

トンネルの途中にある受付は、押出成形のＰＶＣ板で周囲をおおった構造物で、多くの機能性をもっている。すでに説明したが具体的に言うと、1号トンネルを区切っているのは展示部、案内所の裏側のトンネルに囲まれた部分は倉庫、2号トンネルを切断しているのは待合室、4号トンネルにあるのは従業員の更衣室である。同様の構造で、弾力性のある、一つで作られた気密式カーテンを介して大ホールに接続した、天井のない（排気発散のための）キッチン用のクワーがある。

3号トンネルとホールの間にある、もう1つの天井のない空間は、電気、照明、冷暖房設備のための機器として役立つであろう。

商談・会議ホールは密閉圧力をかけてしゃくれた巨大なバルーンであり、バイヤー、ジャーナリスト、業界人のための会議、商談によりかかる。この、バルーンはプラスチック製で内部に空気圧をかけることによって型を保っている。このホールには、2、3号トンネルよりバイヤーが、4号より従業員が出入する。もちろん、もう1つの通路口、ただしそれは壁に入れて世に映るだけのものだが、1号トンネルの出口付近にあるのを忘れてはならない。この大ホールには、あらゆる必要に応じられる、ユニット式のさまざまな設備が備えられている。自由な配置と自分性により、商談用にも会議用にも使えるコーナー式のイスとテーブル、羽根形式で高さ調節の背もたれ、左右押しつきイスとテーブル、電話を要する商談のためのドアーや壁のついた小部屋、スタンドバー、電話ボックス、電子掲示および保証書電話など情報サービスのためのスタンド、そしてプロジェクター、やビデオカセット装置をそなえた、専門のエキスパート制作による映画型のシネマがスクリーン。これは、ヘキスト社の原料で作られた製品、統計、グラフなどの資料を彼女たちあるいは組合せて写しだすことができる。

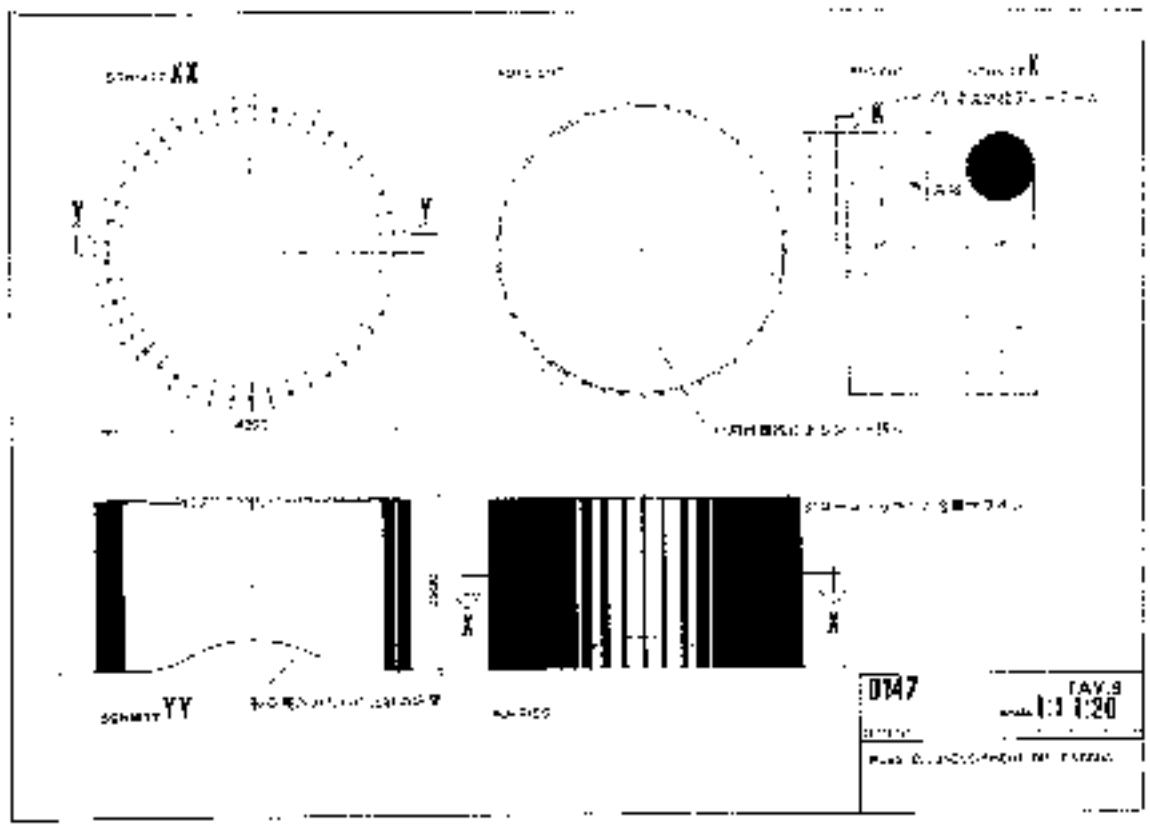
これらの装置は固定化した機能としてだけでなく、創造性のいかんにより、さまざまな場所に応じた発展的な利用法が生み出されるであろう。たとえば、エントランスにある受付ボックスにチケット売場、新聞ラック、ドリンクスタンドなどに。

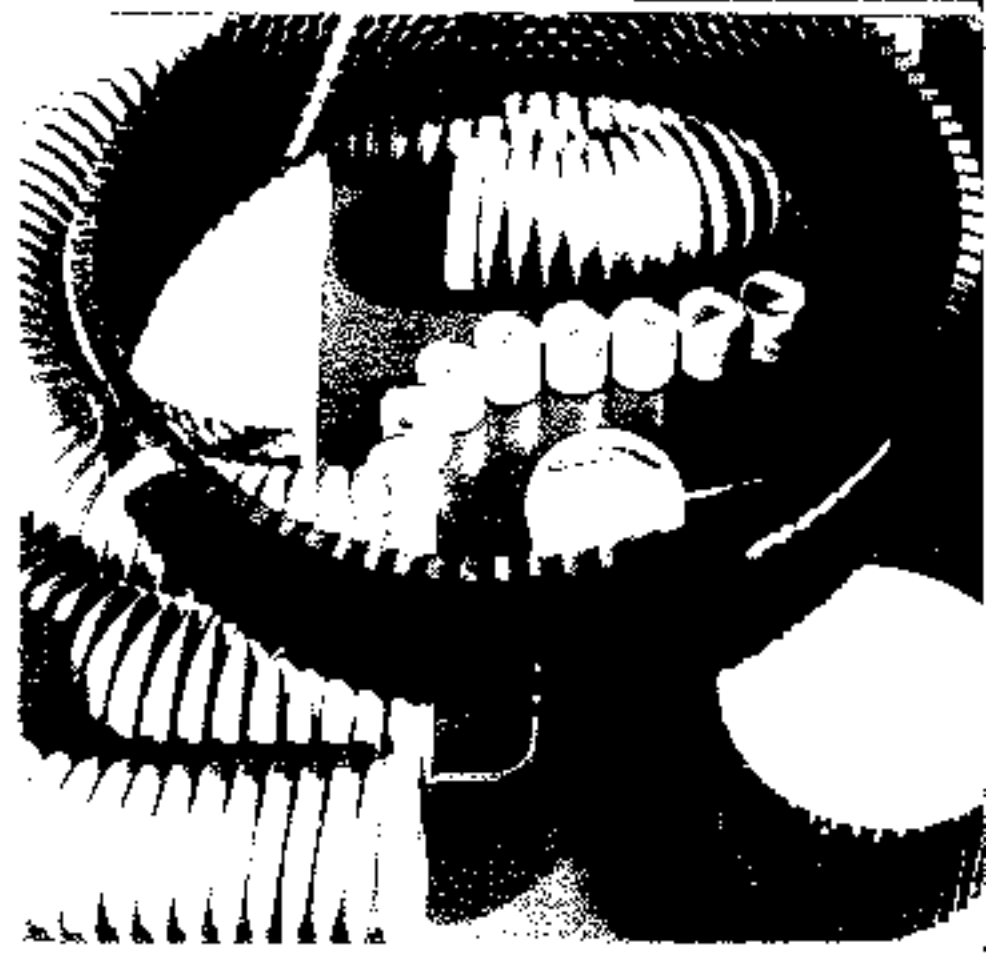
コントロールスタンドは都内の交通整理用に場所柄の応接室はないレストランの給仕や人数に応じてあろう。

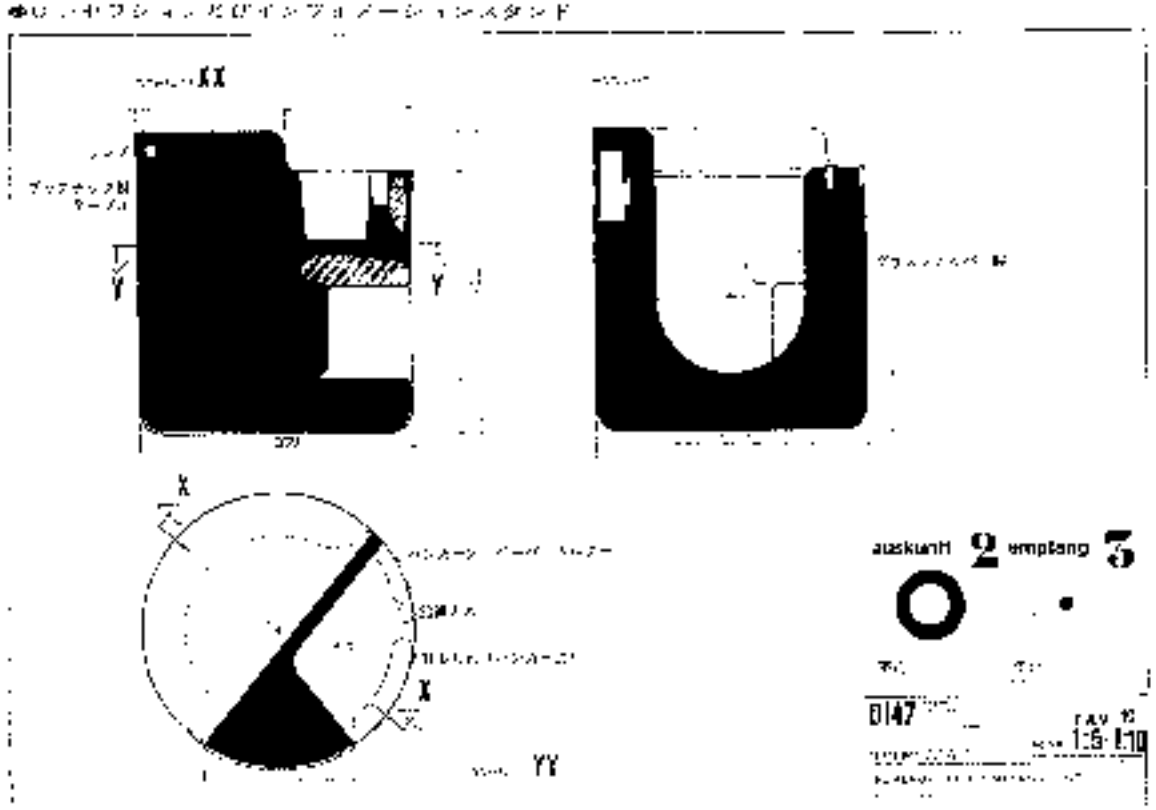
電話ボックスは空港やプラットホームにも置くであろう。

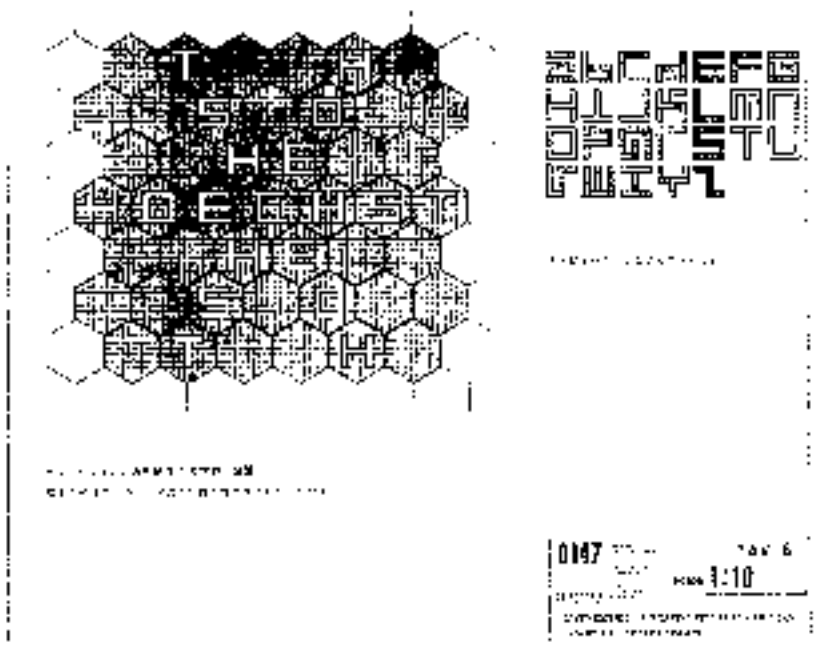
情報サービスのためのスタンドはオフィスの受付ボックスに最適であろう。

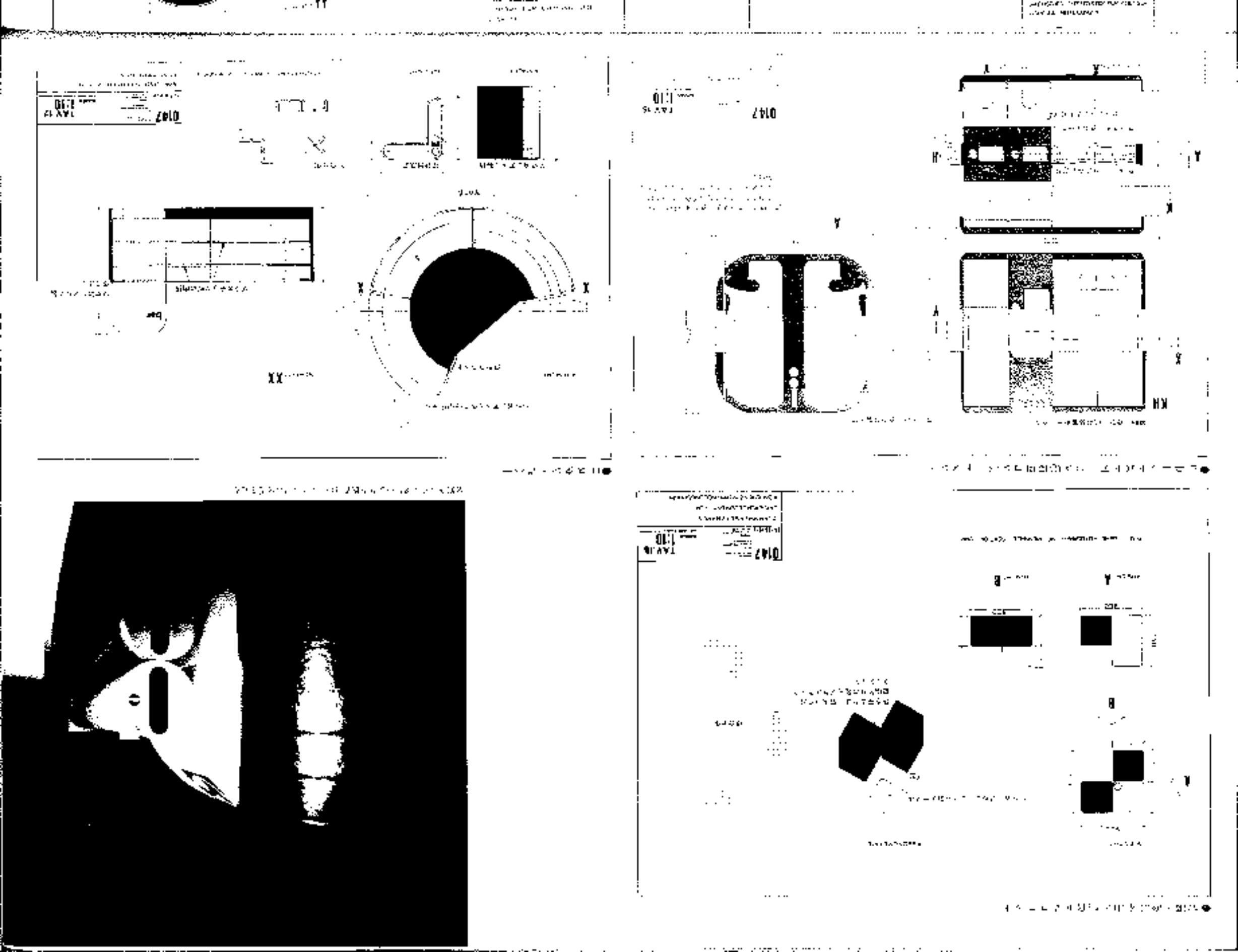
結論として、われわれのこの企画はすべて独自的なものであり、しかも実用性をもち、多くのケースにさまざまな時に応用されるものであることを明かにしようとしたのである。したがって来場者がこの提案に刺激されて、独自のアイデアをもったまたは専門にたくさん、メーカーに対して、新たな提案をしてくれることを望むのである。

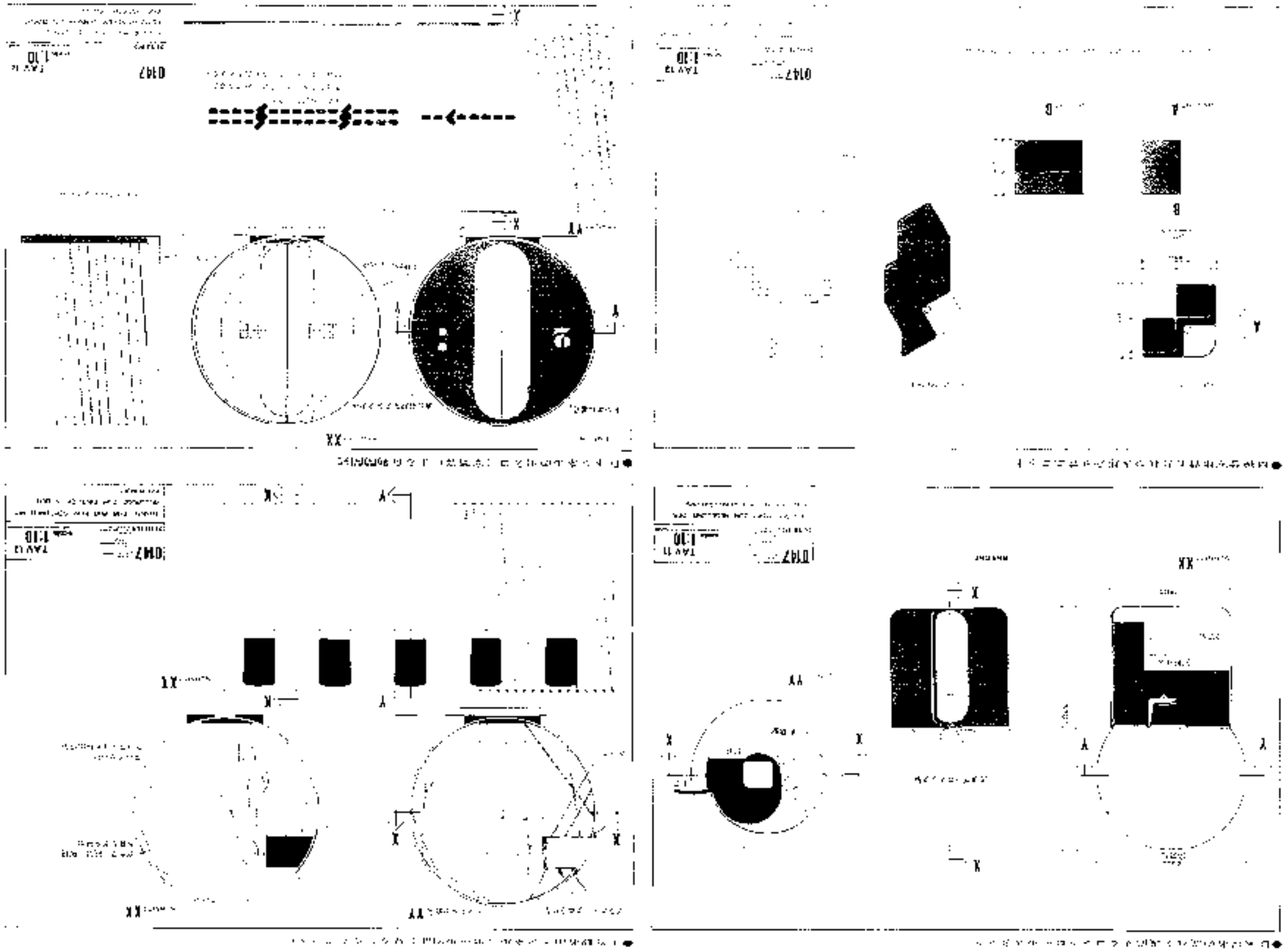

XX
YY
0147
1:1 1:20

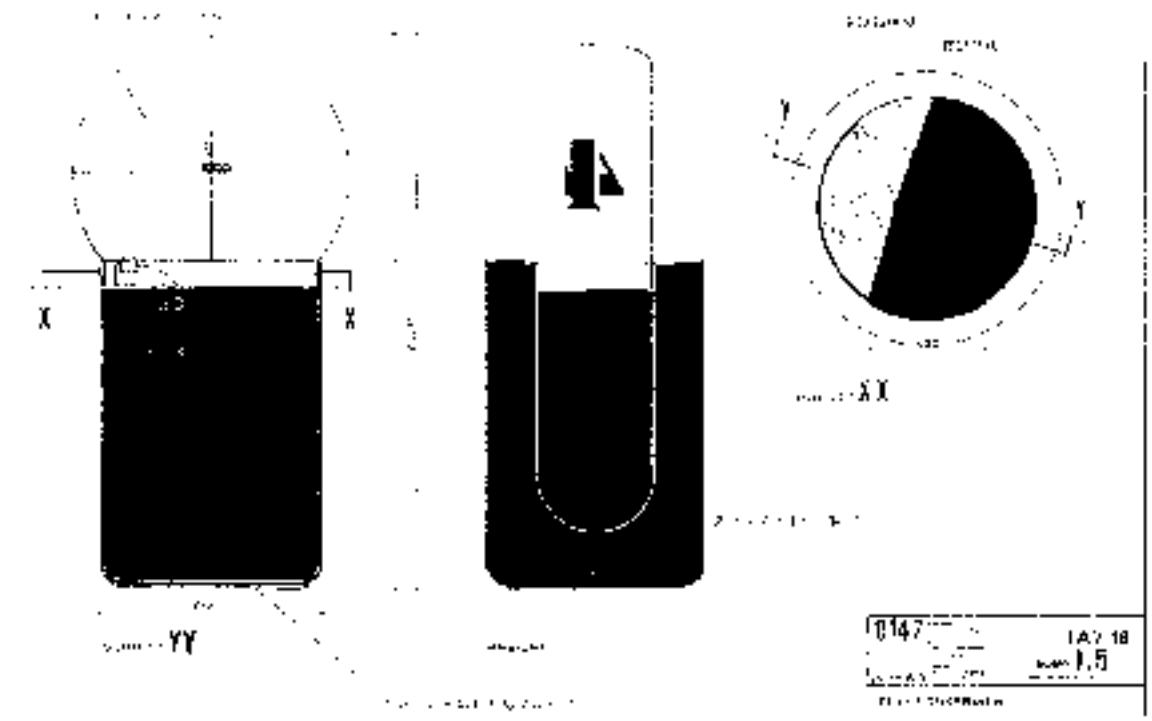


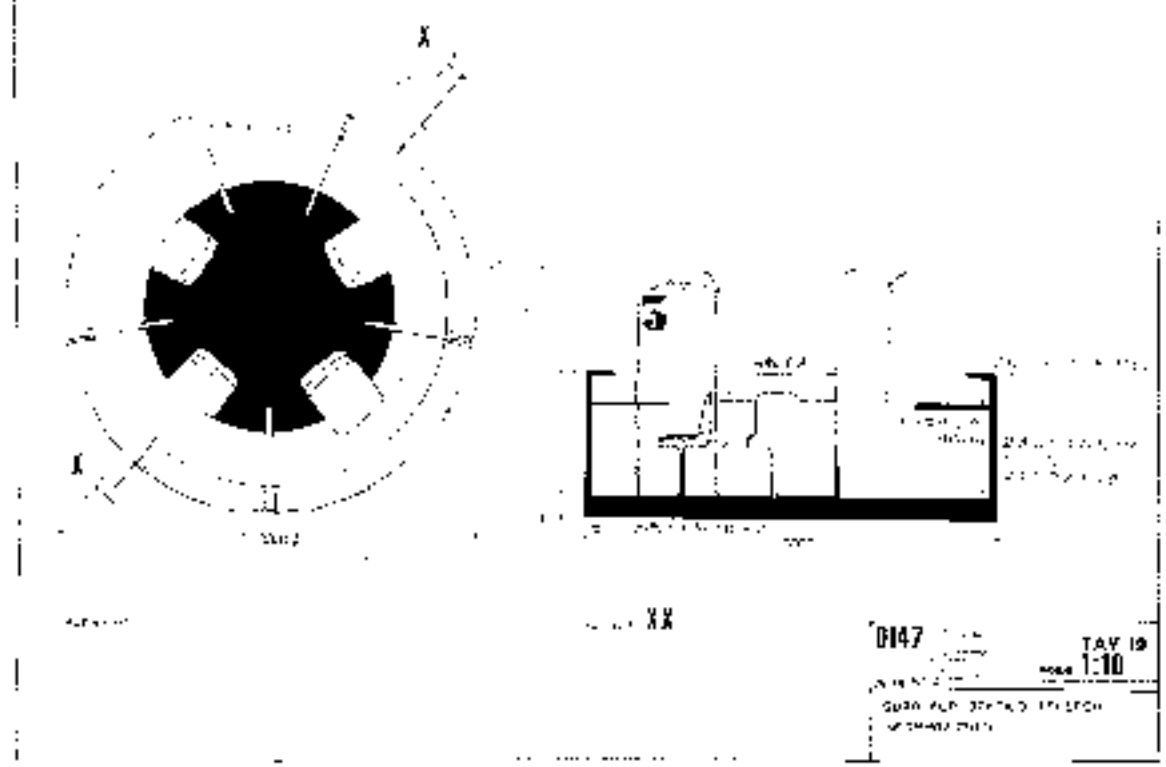

XX
YY
auskunft 2 empfang 3
0147
1:5 1:10

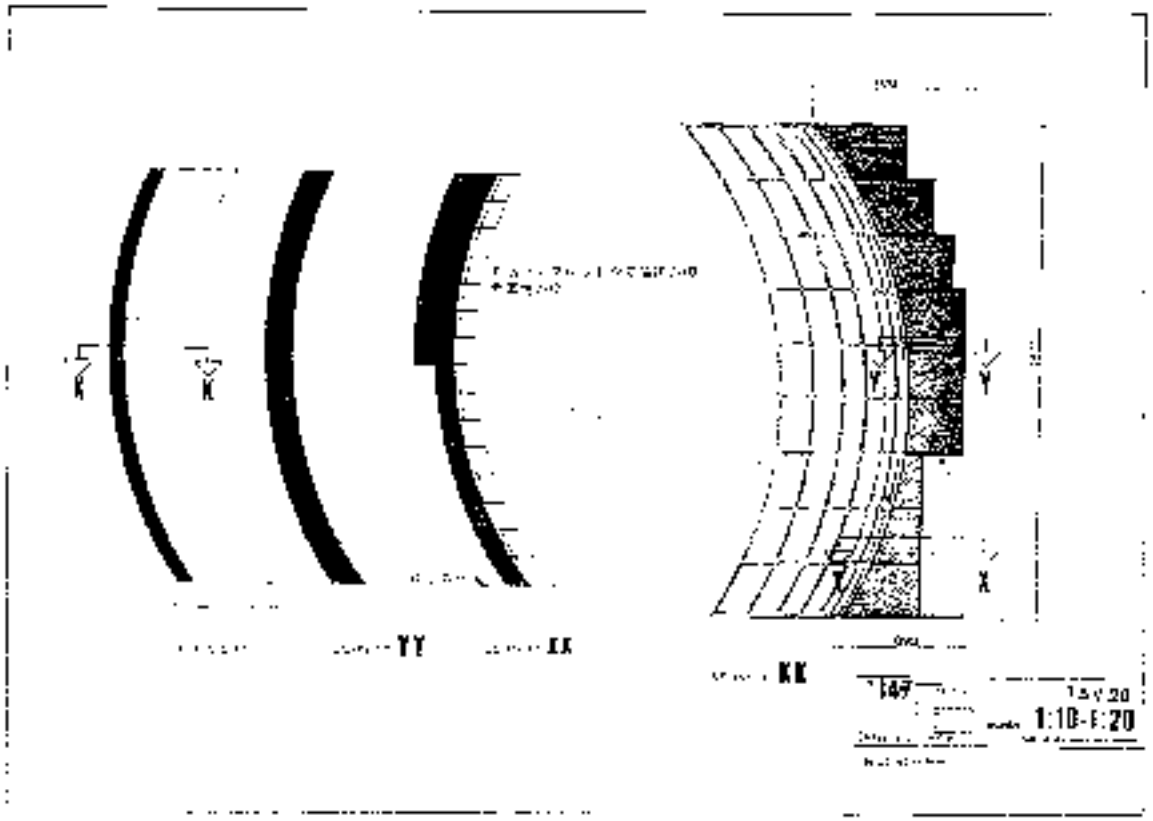

0147
1:10

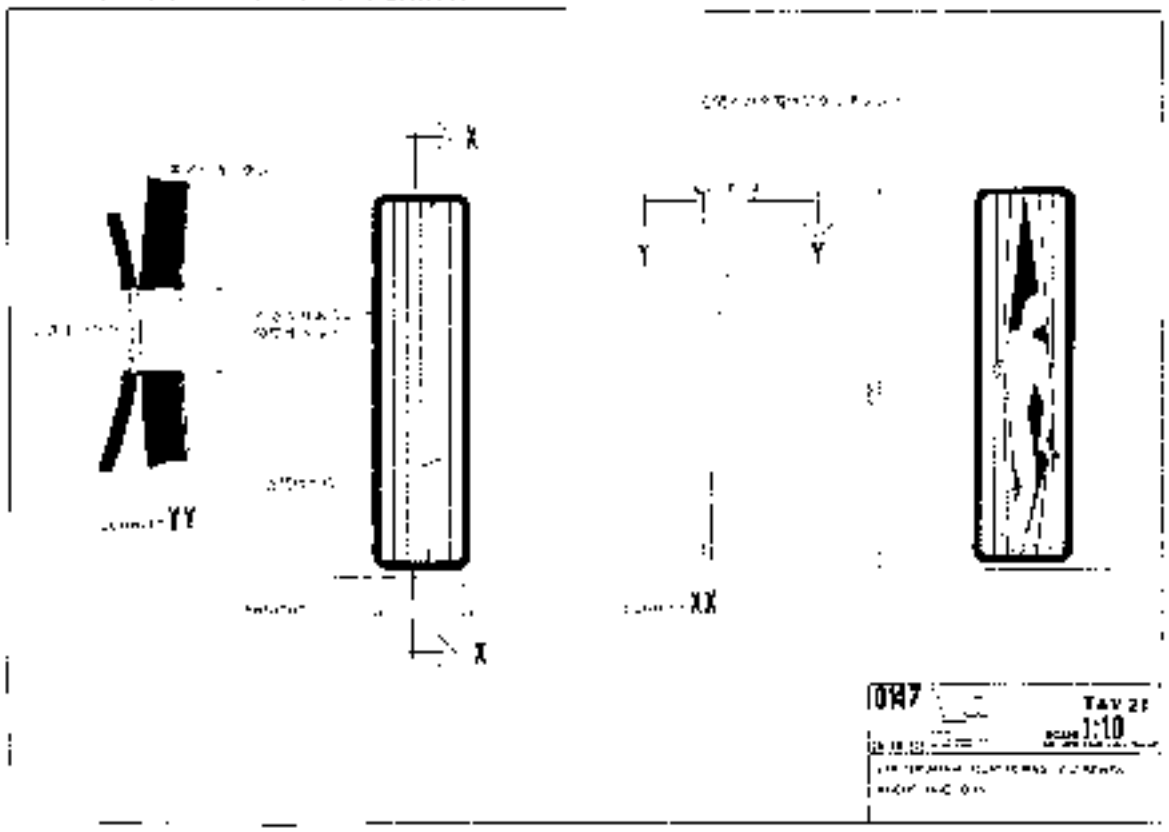


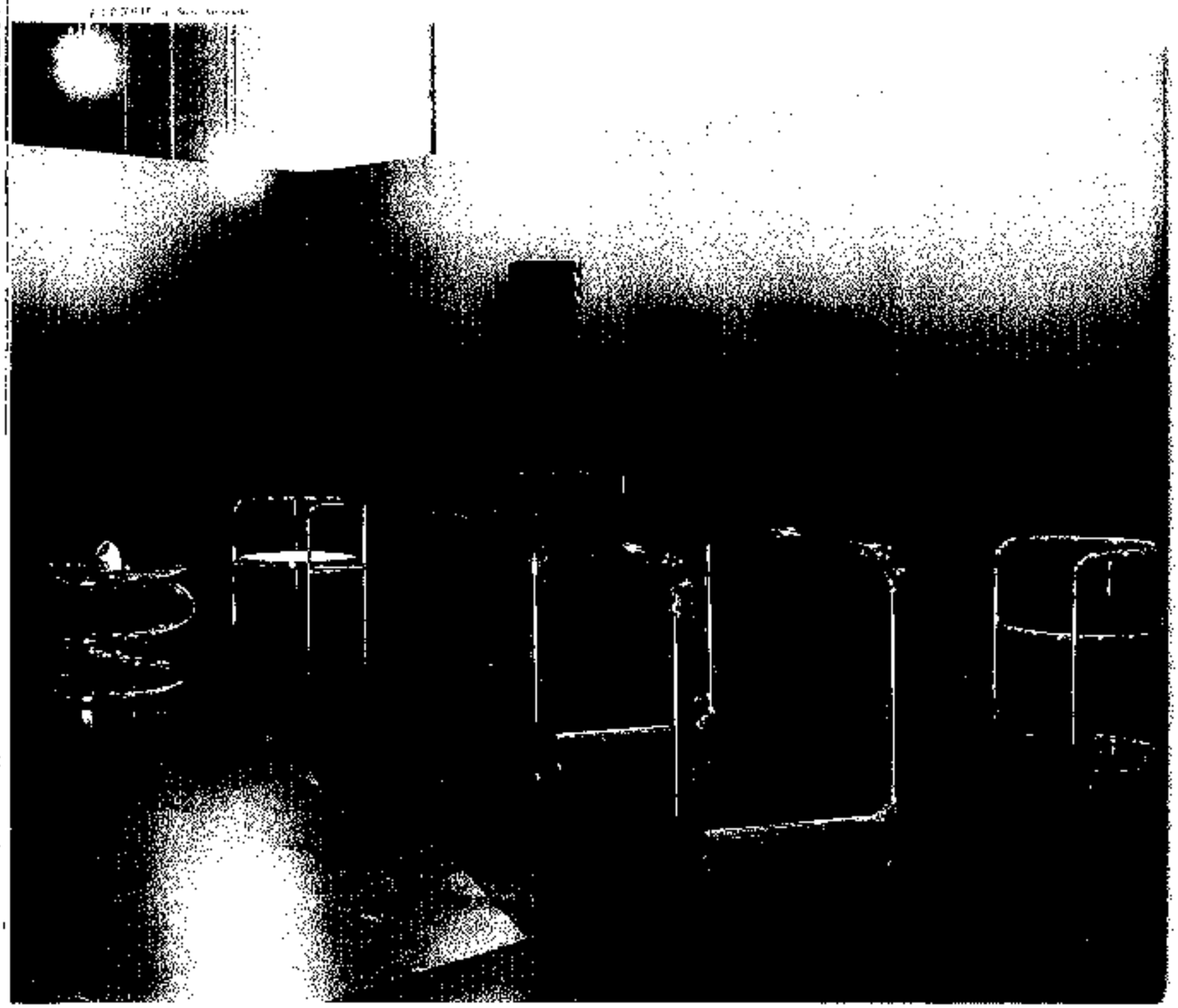



X
X
YY
XX
0147
TAV 18
1:5


X
X
XX
0147
TAV 19
1:10


X
X
YY
XX
Y
Y
X
X
KK
0147
TAV 20
1:10-1:20


X
X
YY
Y
Y
XX
0147
TAV 21
1:10



グッドデザイン展〈トップオフィス '70〉

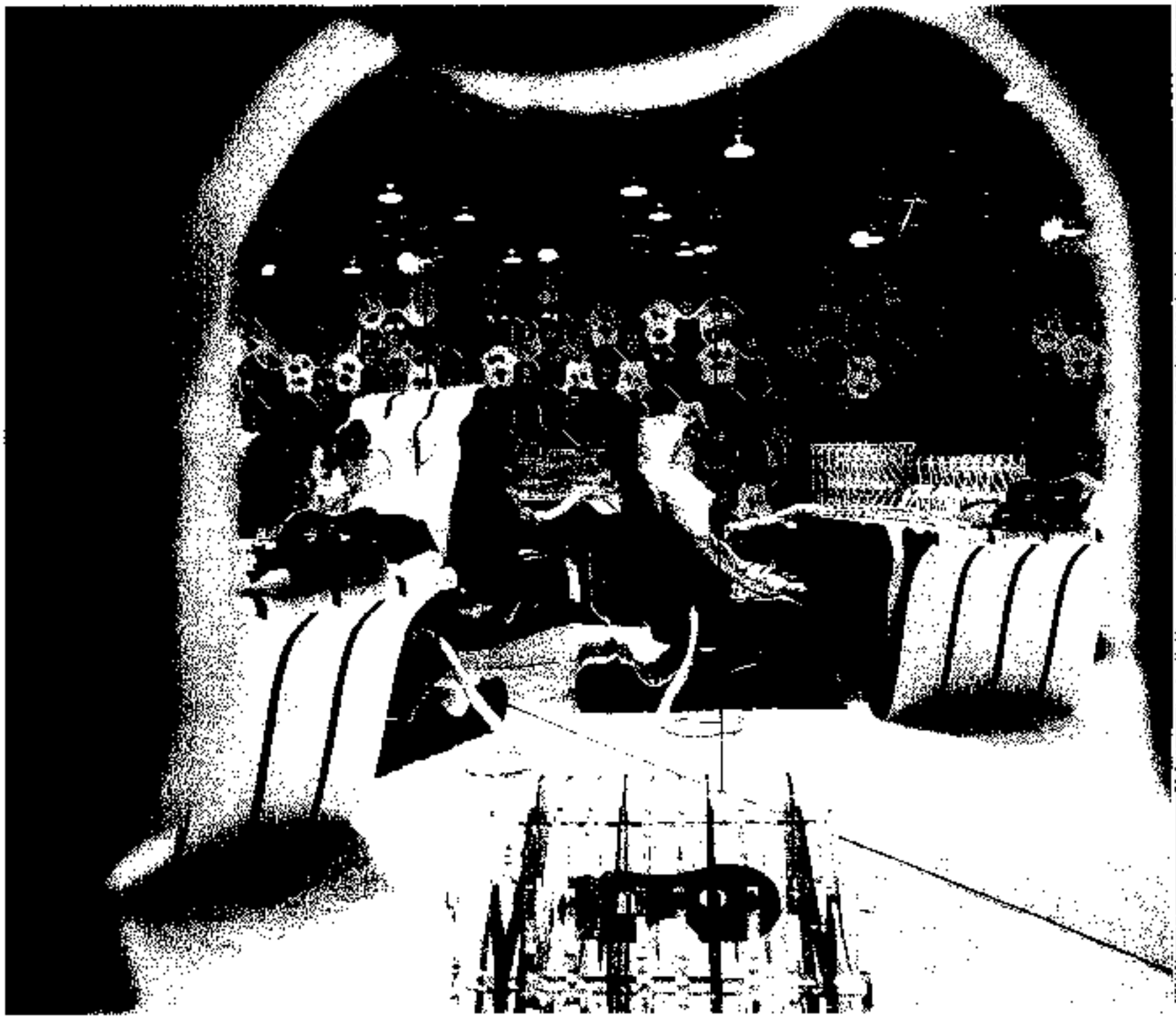
銀座・松屋 特設

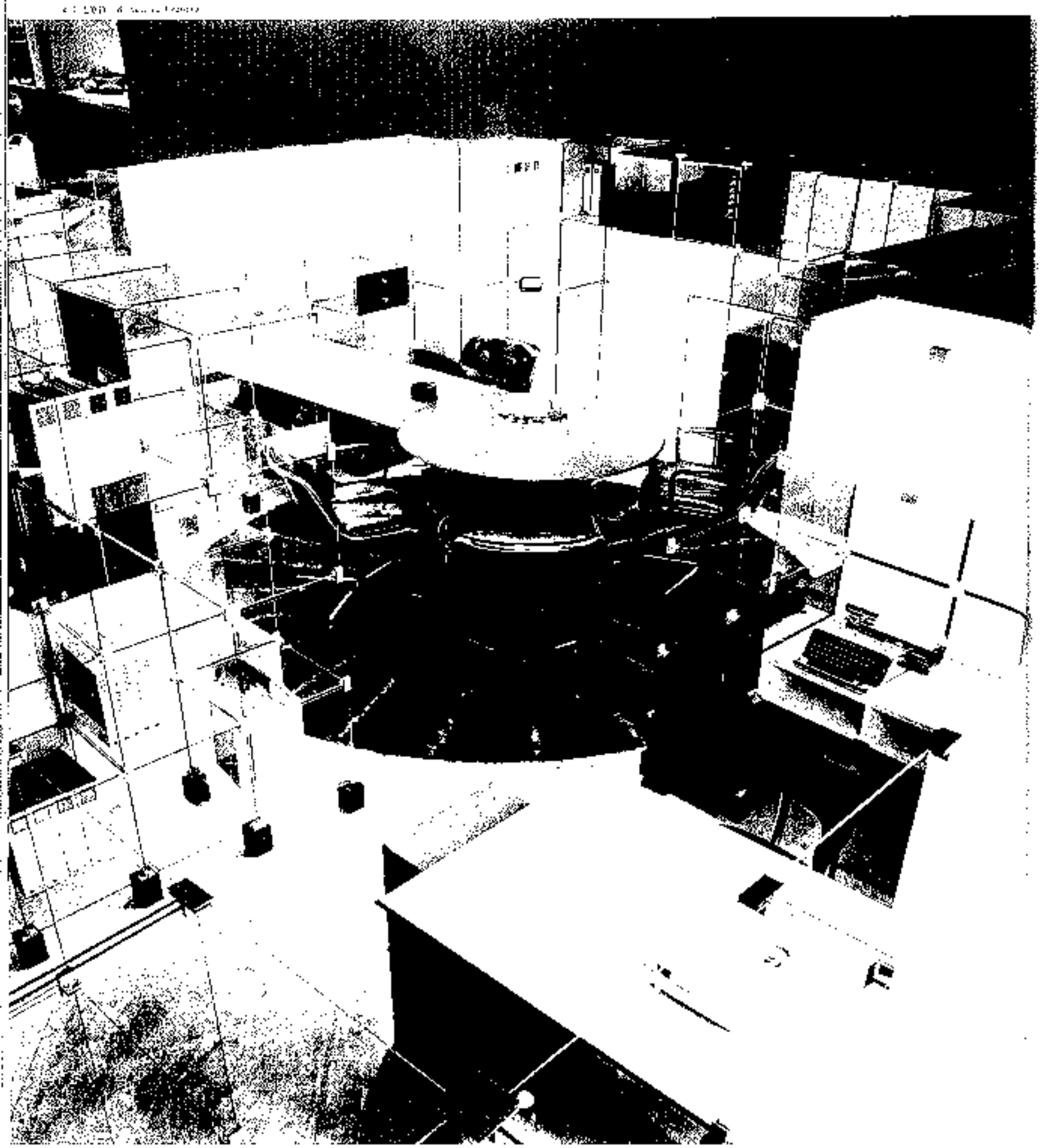
主催：日本デザインコミッティー
コミッショナー　亀倉雄策
出品：[illegible]
出品デザイナー　[illegible]

OFFICE DESIGN EXHIBIT FOR THE EXECUTIVE '70

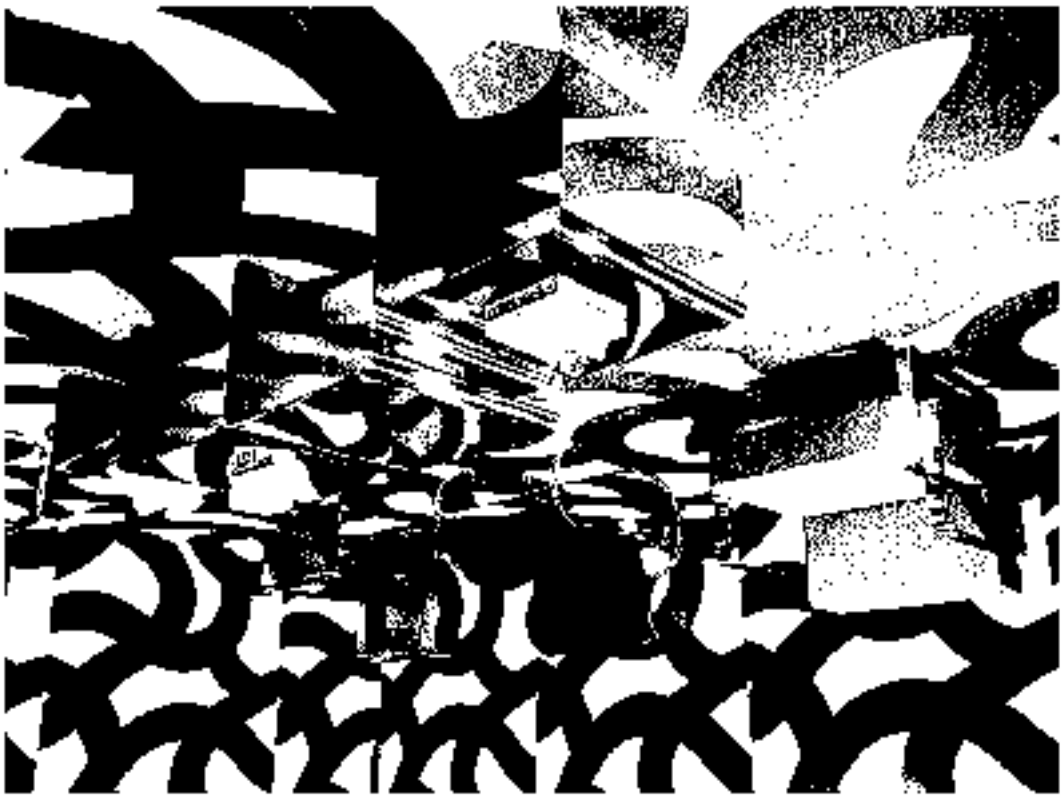
Ginza Matsuya, Tokyo

sponsor Japan Design Committee
commissioner Yusaku Kamekura

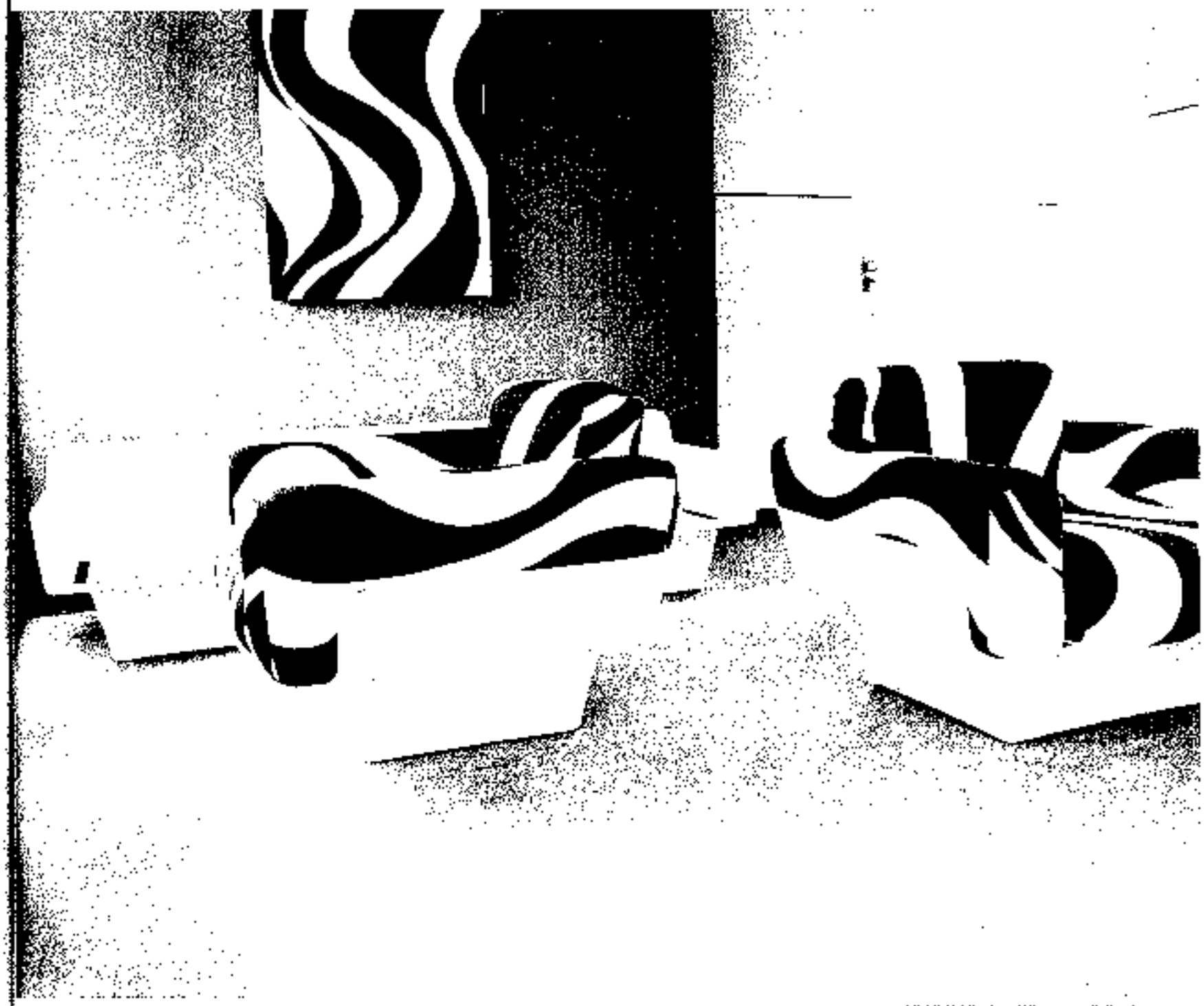




●協力メーカー



アスコ社の新作家具　FURNITURE BY ASKO



Water Cells　ウォーターセル　PVC フィルム　ドイツ　¥195,000　d: Merkle Kusmer　ケッテルハウス（ドイツ）

写真：中谷誠介　photo: Shinsuke Nakatani

●ウィンフリート・アスコ社の新作発表会が、昨秋に日本アスコ社ショールームで開かれた。ノックダウン（K.D.）により輸入されているものを中心に、アスコ社の約500品目ある全商品の約20%が展示された。

K.D.輸入の家具は「ドイツ」の深みがほとんどなく変化の多い日本の気候に適しているといえる。また K.D. 輸入品は運搬、製品などのコストダウンを計り、ヨーロッパ家具も比較的手軽に手に入りやすくなったといえる。

アスコ社の家具は色彩豊かでモダンなデザインのものもあるが、天然木使用のダイニング・セットなどに見られる無垢な感じのものが多い。自社による染色に綿プリント地を採用しているのは新鮮かつ派手やかで、伝統的北欧のフィルムの上に、材質とモダンさがうまく調和していて、若い世代にも好んで使用されるだろう。

またウィンフリートのK.D.輸入家具に、日本のデザイナーによるテキスタイルを採用しているのは、K.D.輸入家具の魅力をさらに高めており注目に値する。しかし、そのプリント・デザインにいまだフィンランド調のものが目立ち、そのトレンドが乏しいように思える。この K.D.輸入の機会に日本のプリント・デザインはもっと個性的になればいいものだろうか。

アルフレックス・ジャパンの新作家具

FURNITURE BY ARFLEX JAPAN

〈MEETING〉

●アルフレックス・ジャパンは設立1周年を迎えたこの10月に6種類の新製品を発表した。今までのモデルはリビング・ルームの家具に限られていたが、今回はホテル、レストランなどのパブリック・スペースにも使えるモデルが加えられている。ここに紹介したのはそのうちの〈MEETING〉、〈BOBOLUNGO〉、〈SINTRA〉、〈LIVING ALTA〉の4種である。

〈MEETING〉はアームとシートの2部より構成され、スチール・フレーム、合板、ウレタンが使用されている。名称の示すごとく会議室、その他レストラン、酒場、事務室に適している。シート・バックの低いこのモデルにおいてハイバックが用意される予定である。

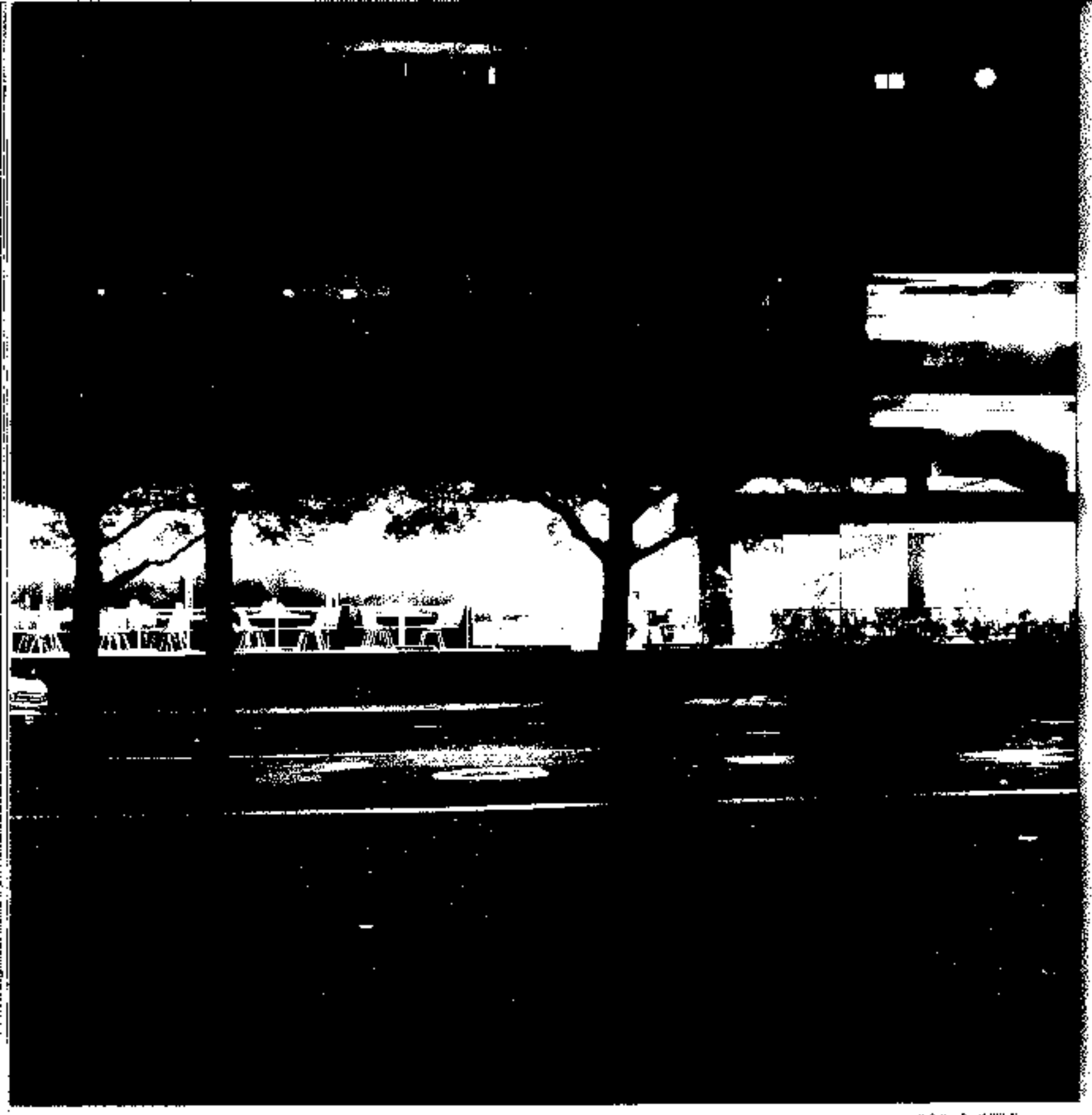
〈BOBOLUNGO〉は〈BOBO〉シリーズの1つで〈BOBO〉と同様、ウレタン・ブロックにエラスチック・ジャージーを張ったもので、硬い部分がまったくなく非常に軽量な椅子である。アームチェアと椅子の中間の雰囲気をもち、読書やTV視聴などに気楽にくつろげる。床とイスの差を感じさせない自由な感覚は若い人に好まれるだろう。

〈SINTRA〉は〈MODEL 7〉シリーズと同じウレタン・モールド製法（成型発泡ウレタン）によるモデルで、内部にはスモール・フレーム、ナイロン・ネットがインサートされている。本体は左右のアームおよびシートの3部分からなり、これらを組合せることにより、1～3人掛けが構成される。やわらかいオール・ウレタン・モールド（日本では始めて）なので身体に密着するフィットし、流れるような自由な曲線が美しいフォームを生みだしている。

〈LIVING ALTA〉は従来のオーソドックスで落着いたモデル〈LIVING〉のハイバックである。

〈アルフレックス・ジャパン　資料室〉

〈BOBOLUNGO〉



シルクセンター外観

横浜シルクホテル・コーヒーショップ

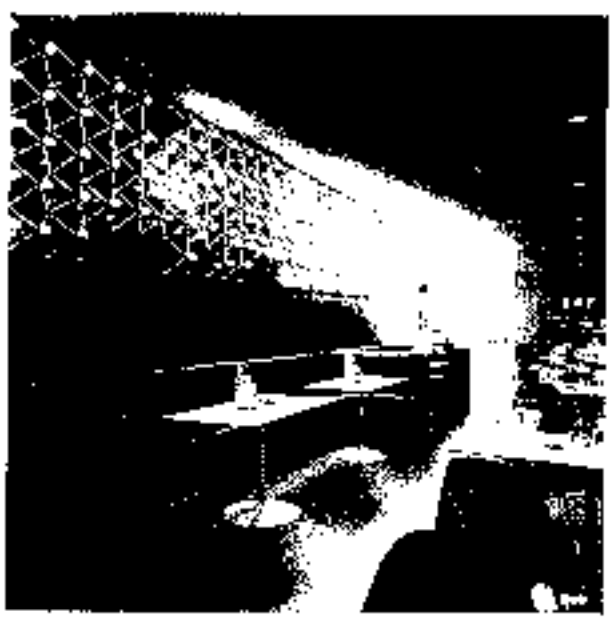
横浜・山下町

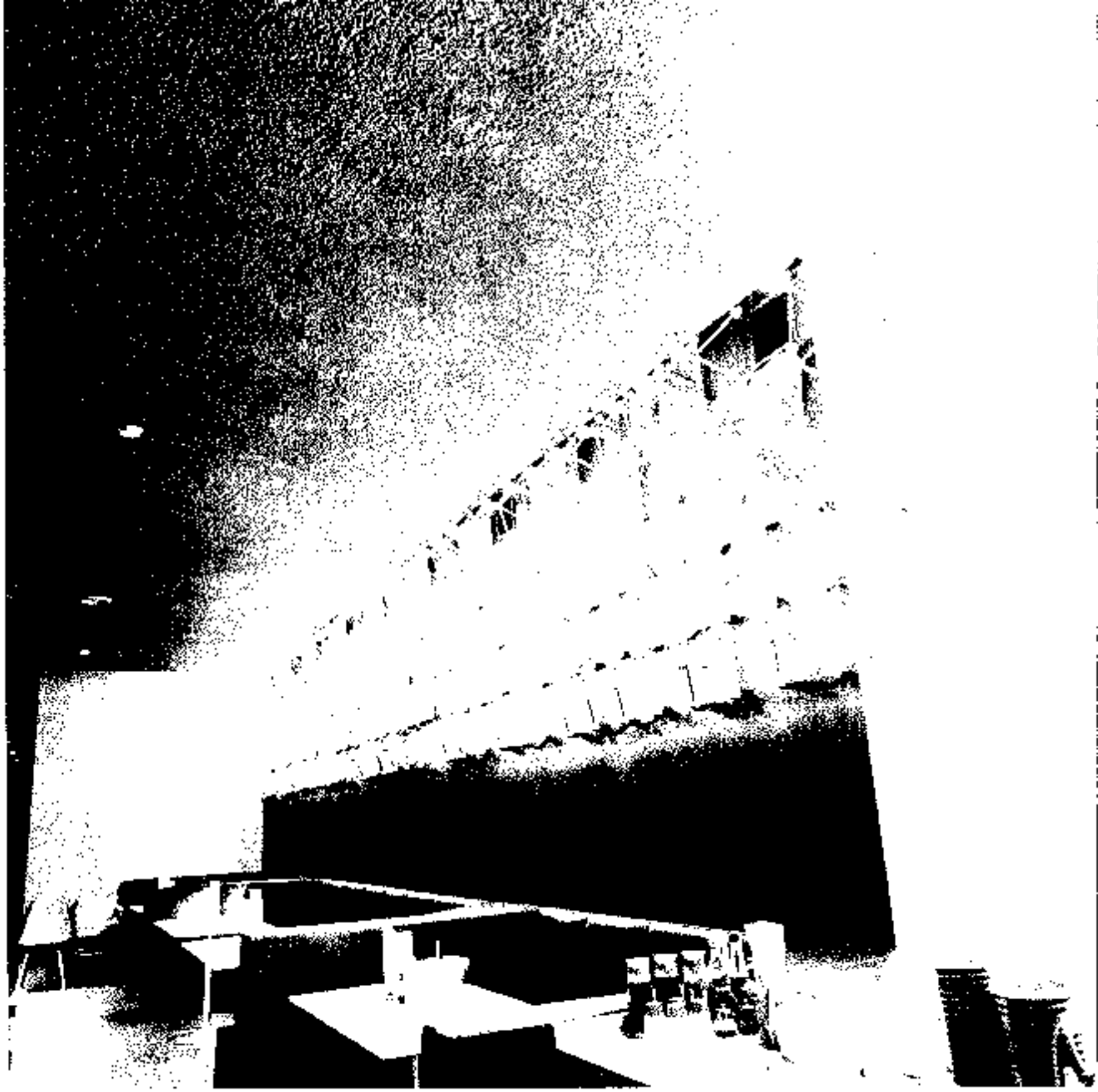
設計：佐藤総合研究所
施工：鹿島建設
壁面照明デザイン：石井幹子デザイン事務所

YOKOHAMA SILK HOTEL・COFFEE SHOP

Yamishita-cho, Yokohama

design:Sakakura Associates Architects & Engineers
construction:Kashima Kensetsu Co., Ltd
wall lighting design:Motoko Ishii Design Office





●シルクホテルの「コーヒーショップ」について説明するのには、まずシルクセンター（国際観光貿易会館）のことから話を始めねばならない。

横浜では一般に「シルクセンター」と呼ばれているが、大佛塔の一つ山根の一等地に建つこの建物は当研究所が10年以上前に設計したもので、4階までの低層部は貿易事務所や展示場、商店街、生糸の取引所、「絹の博物館」などがあり、5階以上の高層部はシルクホテルが占めている複合建築である。

シルクセンターは3方が道路に接しているが、一方は山下公園に接する「通り」に面し、その面に2階の「絹の博物館」に上がる外階段があった。しかし、10年余の月日のもたらす需要と供給のバランスの変化は、その外階段の改造も含めて、「シルクセンター別館」新築の企画を生み、その一部にシルクホテルがテナントとなって本館内部にあったコーヒーショップを移したのである。

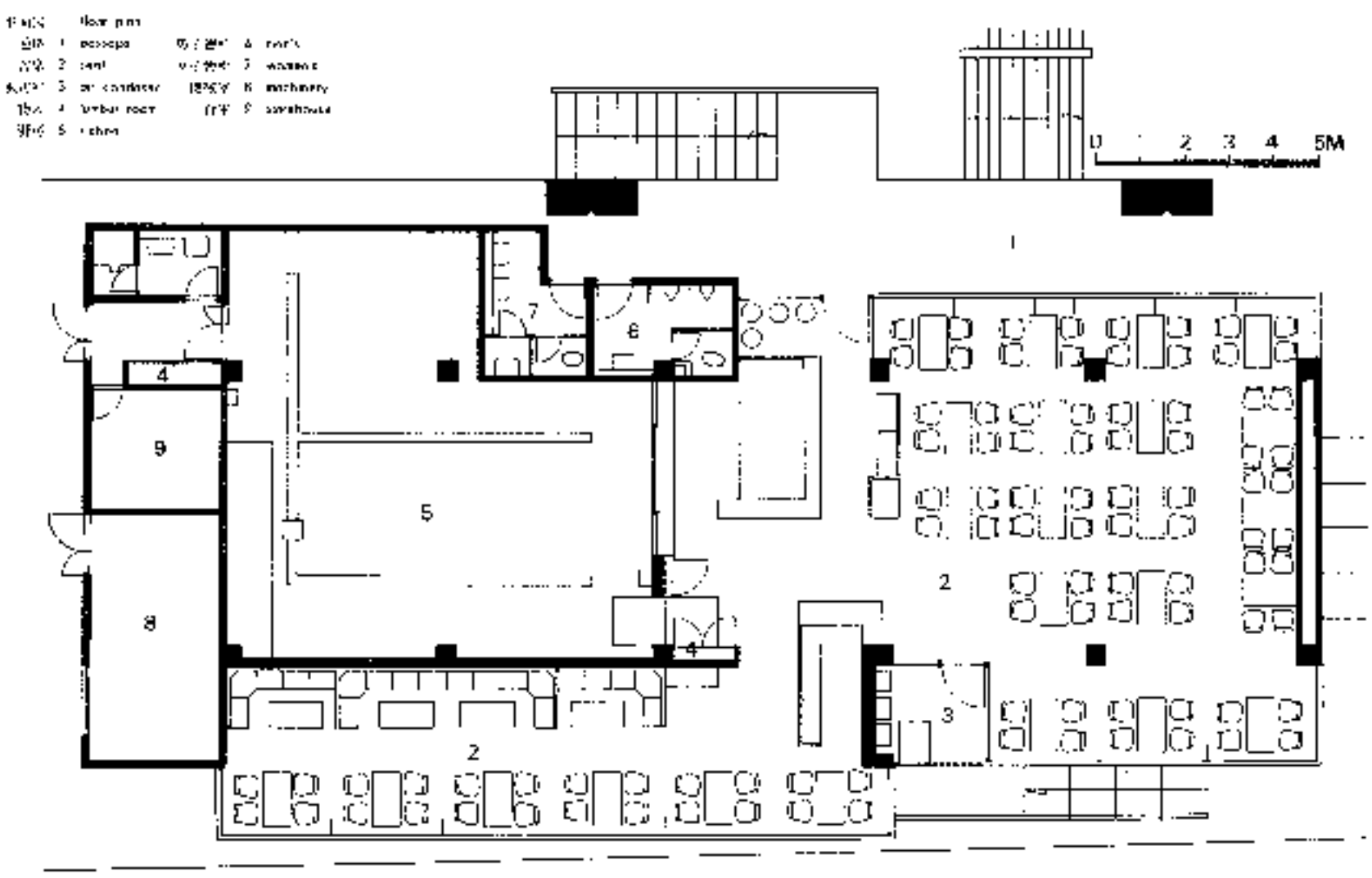
「別館」の前面道路である「通り」は典型的観光客が歩くすばらしい歩道で、片側は毎日、船が出入りする大桟橋、港に臨む山下公園、片側には国際船や外国籍貨物の商社、銀行、そのほかホテル、マリンタワー、ボーリング場、ナイトクラブなどが立ち並び、さらに洋風ショッピングストリートの元町につながるミナト・ヨコハマの代表的プロムナードである。春になれば桜の枝に新芽がふき、夏になれば葉は青々と茂って日陰をつくり、秋になれば実をつけて香り、冬になれば黄色く枯れた葉をかすかにコスト音を立てて路上を走らす。O・ヘンリーの作品の舞台さながらの「通り」である。

「別館」はこの「通り」に沿って観光関係の事務所とコーヒーショップの2棟に対で配置し、2棟の間は自由に通れる外部の空間として「通り」から本館へのアプローチに解放し、さらに2棟の屋上を南北の「絹の博物館」へのアプローチに計画した。そのため博物館への上り易さを考慮し、屋上を大きなにいって階段状にしたので、上り易の事務所は半地階の形式をとり、陸屋根のついたコーヒーショップの屋根がそのまま外部の形態となっている。すなわち外部と内部とが、屋根はポイドスラブ、外壁はサッシュレスのスイフト工法のガラスという、ハリボテでない、出来るだけうすい外皮で区切られ、現場には外部が仕上った段階で、インテリアも終づくりされている建築を狙いとしたのである。そして、それはこの「コーヒーショップ」の雰囲気を、銀座の松坂屋の「カフェ・ド・パリ」や、青山の「ル・ドルメン」もおそらく同じ線を期待したのであろうと思うが、パリのシャンゼリゼやローマのヴィア・ヴェネトにある、歩道に面が張り出ているカフェと彼との一体感——現実には「サンデー毎日（10/10）」も指摘しているように、歩道の公共性や場の制限で、歩行者天国など臨時の場合にはともかく、常設は無理であろうが——に求めて「通り」を歩いている人々に何もかも内部が見えるオープンな感じが共感を呼び、自分も中に入って今度は中からそれを見たくなる衝動を起こさせる雰囲気の建築化に結びついている。

さらに、そういう雰囲気の夜の顔の演出を担当しているのが、石井修子さんデザインの壁面の照明で、これはクロームメッキのパイプで組んだスペースフレームに、8Wの電球とガラスとハーフミラーを使用し、夜間、室内から見るとハーフミラーの状態になったガラス面に反射する光は、あたかも「通り」の空間に光のスペースフレームが浮かぶかのように見え、そのうえ洗光された光が点々かのように、沈みかける夜の空間を飾り、外部と内部とが結合した空間をつくり出すのである。もちろん、それは「通り」を歩く人々を魅了するにはおかないし、夜の「通り」を疾走する車に対しても強くかつ注意を引きつけるサインの役割も果たしている。

聞くところによると、ゴーゴーパーティーの会場に使ってほしいという申込みもあるそうだが、「通り」の雰囲気を壊さないようにとストレートな雰囲気を投入でき、営業的にも順調なスタートを切っていることは、設計に携った者のとして嬉しいかぎりである。コロンボプレスクーイの新店ではないが、「ビューティフル・ミナト・ヨコハマ」と歌いたい感じである。

（神奈川　加藤道雄）



グランド・パブ〈サントリープラザ〉

東京・新宿

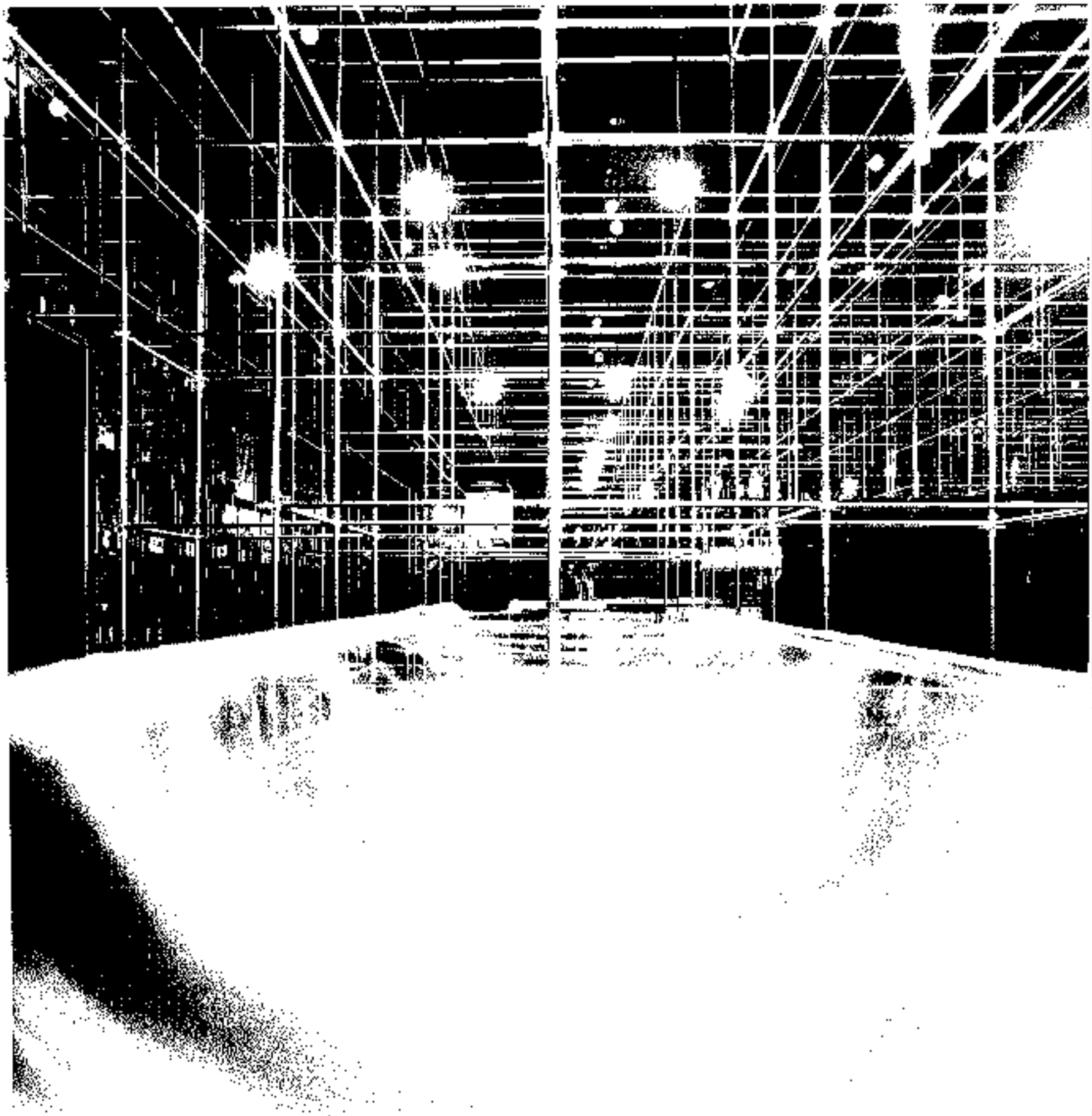
設計監理：東孝光建築研究所
担当：井上清紀
施工：興和商事株式会社

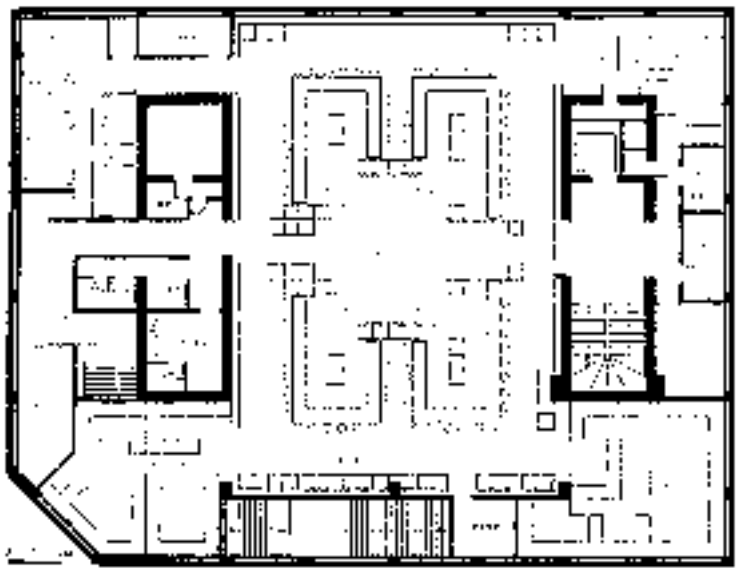
GRAND PUB〈SUNTORY PLAZA〉

Shinjuku, Tokyo

design: Takamitsu Azuma Architectural Associates
construction: Kowa Shoji Co., Ltd.

YA 11A 5 photo Yasuhiro Shirasori





●新橋駅烏森口周辺は、最近活気を失びてきた。もともと、新橋や虎ノ門のような盛り場で中心の商業施設をとり囲んで旅館やホテルができると、[illegible]完成されたといえるのだが、最近の傾向は、その周囲の旅館街を徐々に侵蝕しているということができる。

経済成長の中ほどから、世代の交代などのため、最近サラリーマンは歌舞伎町界わいの、いわゆる怪しげなバー街をふりとこの盛り場を敬遠しはじめている。そこで、この新しい成長部分では今までの新橋にはなかった、やや上品な商店街が育ちはじめている。

われわれが、この通りに面したビルの地下にインモスバーの一店を依頼されたとき、まずこのような過渡期の傾向を明瞭に表わしているどこかにくつろぎに残っているホテル、それに歌舞伎町の雑踏などを考えて、この変化しつつある町に

ンな性格が定着するのか興味もあって、考え込んでしまったものだった。

地下1階の130坪のフロアを持つ、このサントリー・プラザは、大きく4つの部分に分かれている。まず、ステンレス・フレームによる空間格子とステンレスカウンターによるMAIN HALL、次に、天井を交互に上下させて1色に仕上げたブルーの空間のGREEN ZONE、RED ZONE、そして、プラスター塗のアーチ天井で床は成形ドのLITTLE CLUBの4つである。

ステンレスフレームによるジャングルジムは、壁から天井まで、壁や天井をソリッドにつくらずに空間を提示してみたいという意図から計画したものであるが、各種の制約もあって、最高したものにはならず、後面のガラス、ポリカーボネートのアクリルと相まって、一種のメリー・ゴーラウンドの世界へと移行してしまったが、それはそれで良い。金属、ガラスと黒ペンキによって、新宿のアンチモバーとしては、上品で落着いた雰囲気をつくり出しているのは予期したとおりだから。

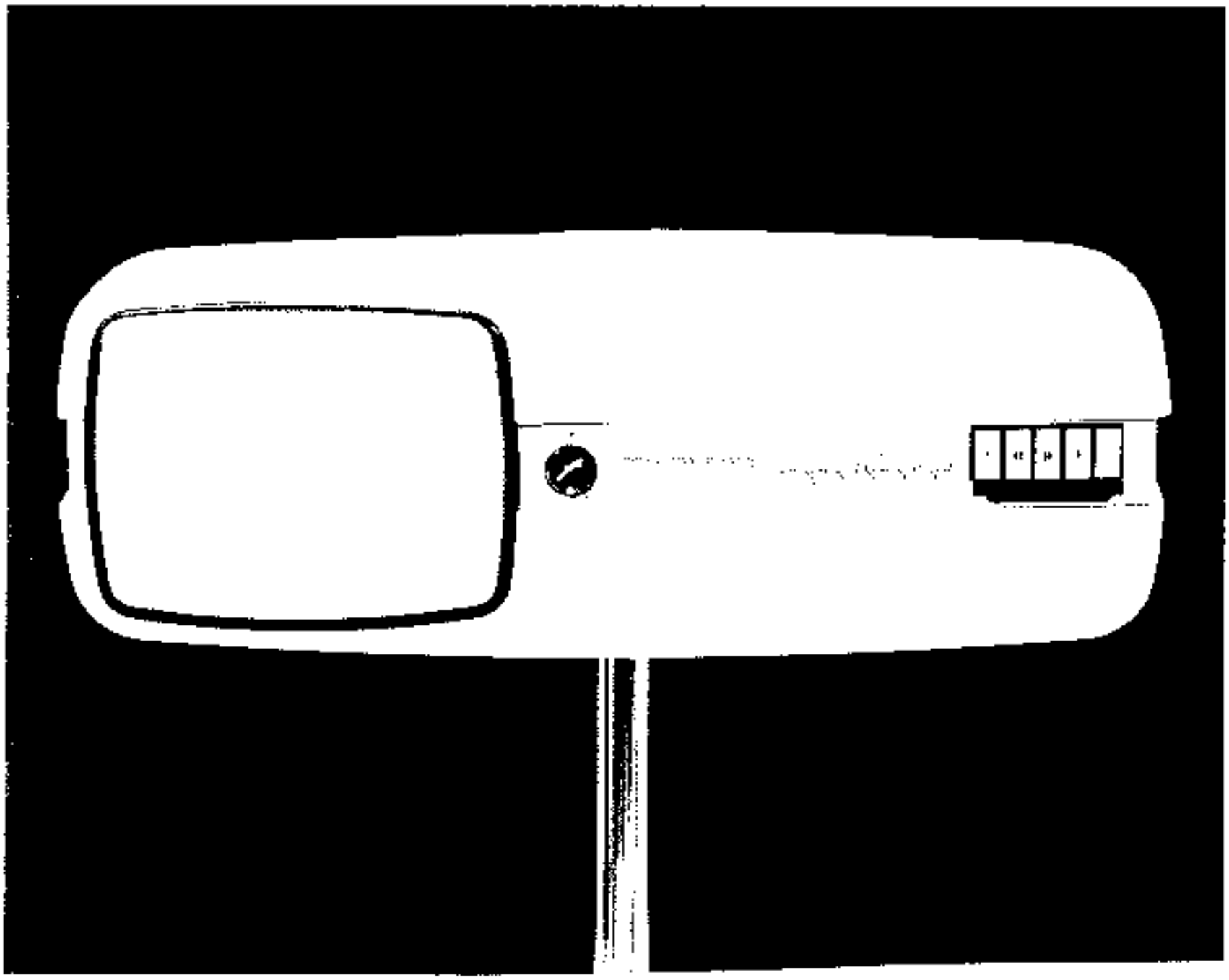
RED ZONE、GREEN ZONEに関しては、人間の流線関係だけを規定しようとしたわれわれの意図どおりとなったし、来客にとっては、モダンな神秘的な空間や、ワンダーランドのような幻想的空間をつくり出している。LITTLE CLUBは、神殿の壁とプラスター木ごて押しのアーチ天井だけの簡単なスペースに、ハーフシェーター、ディスコボールの装置が、結構おきまりであるのは、何かほほえましい雰囲気ではなかろうか。

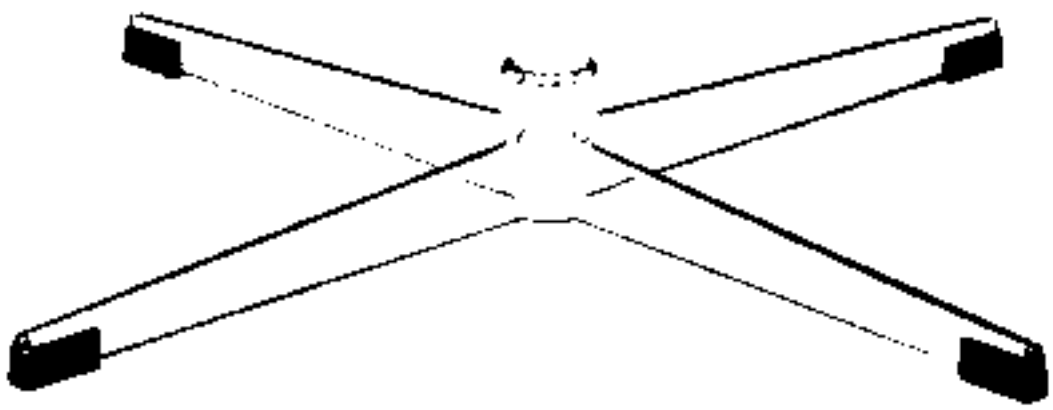
技術的にはたいしてほうこうとるないが、ステンレスの空間格子のために特につくったポリカーボネイトの幼型成形によるハメ込み式透明ジョイントに関しては、一応成功したと思っている。色々使えそうなので、今後開発してゆきたい。フレームの施工精度に難はあったが、これは鉄工製から言って無理からぬことだろう。

この店舗の設計に関しては、前述のように成長過程にある不確定な流動性、130坪ということのような大スペースを楽しんでもらう店舗にすることなどが問題点であった。同じ理由から、施主側の要望も、設計と工事の途中で色々の回答となった。特に前金工事であったこともあって、完成までには多くの変更がつきまとった。

しかし結局は、そのような諸条件の制約が、出来上った店を、上品すぎもせず、平凡でもない、まさにこのあたりにふさわしいものに、ビシリとおさめてしまったのではないかと、われわれ自身でも驚いている次第である。

東京都渋谷区神宮前 井上博昭

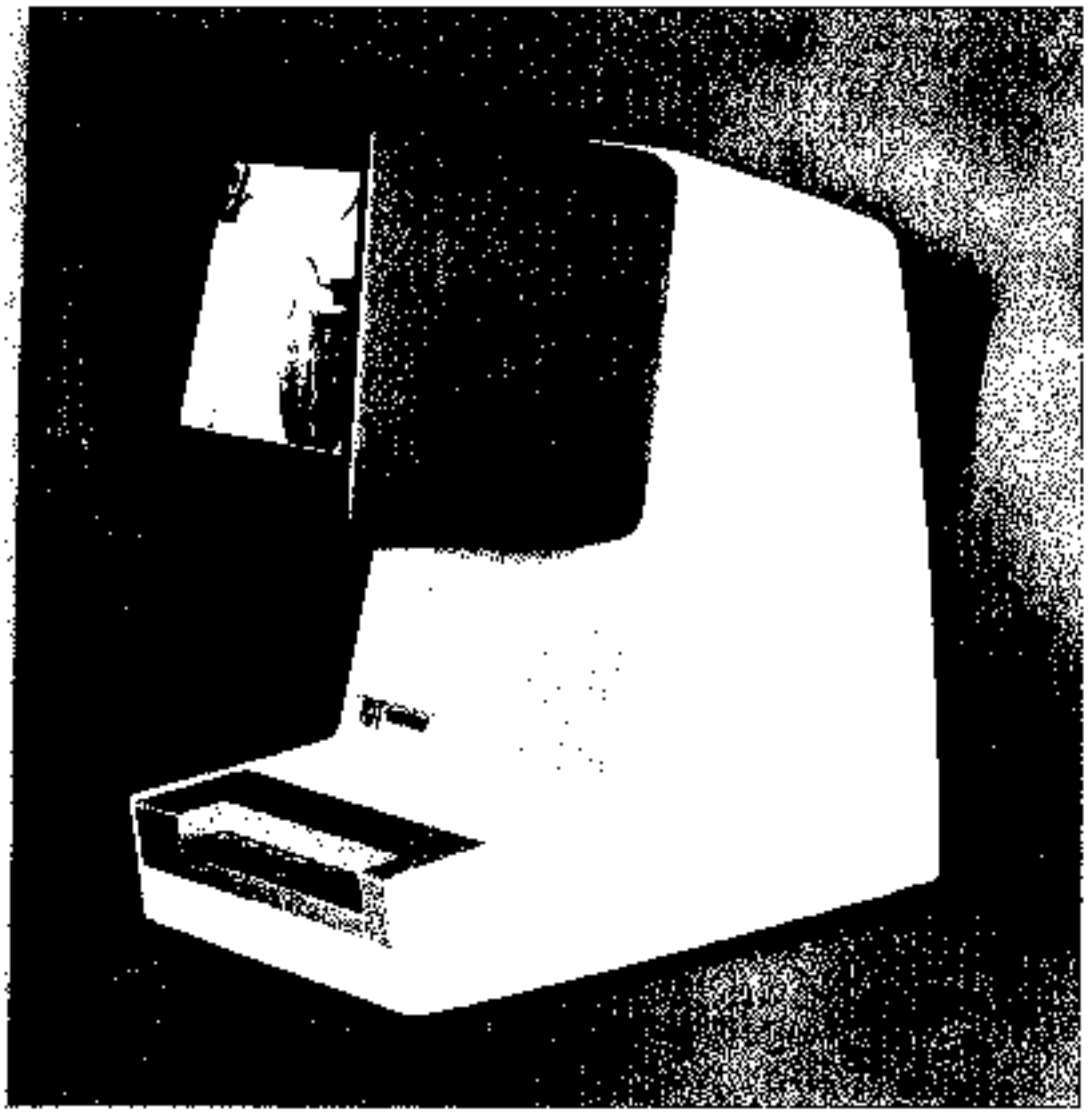


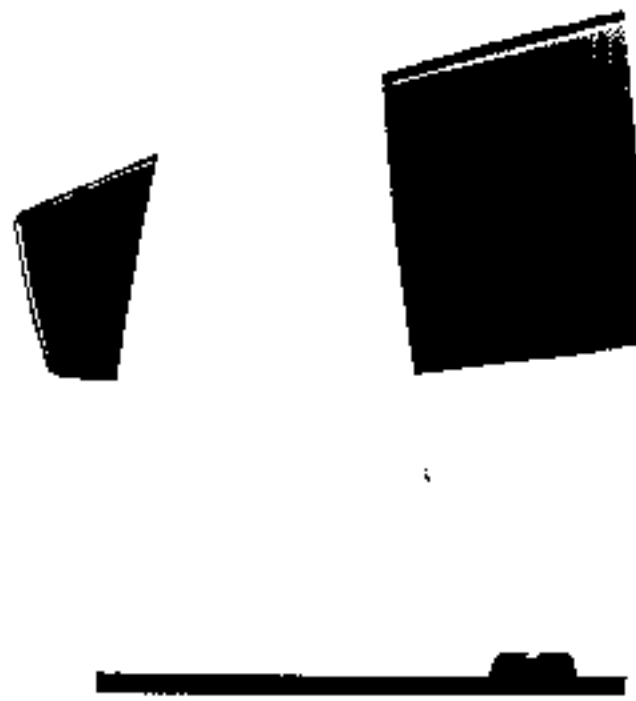


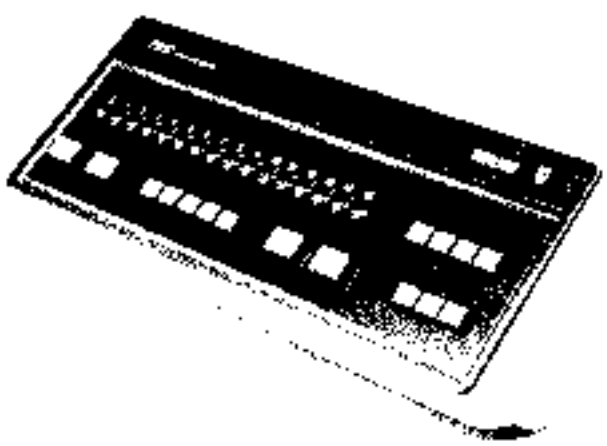
ホーム・ビデオ・レコーダー・コンソール　中央部コントロール・パネル上のカバーを開けるとテープ・デッキとでる

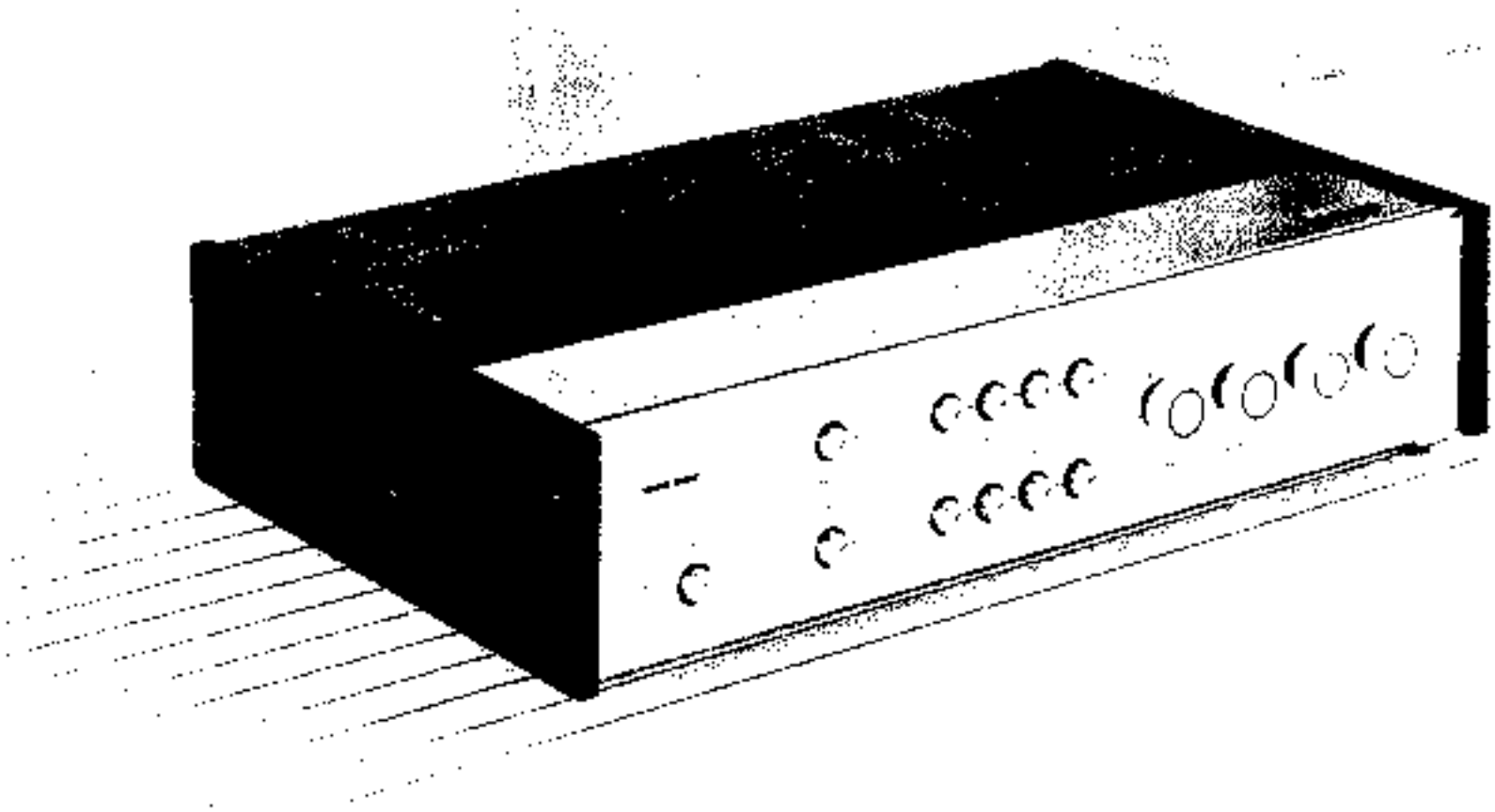
INDUSTRIAL DESIGN OF THE WORLD－6(NETHERLANDS)

N.V. PHILIPS' GLOEILAMPENFABRIEKEN

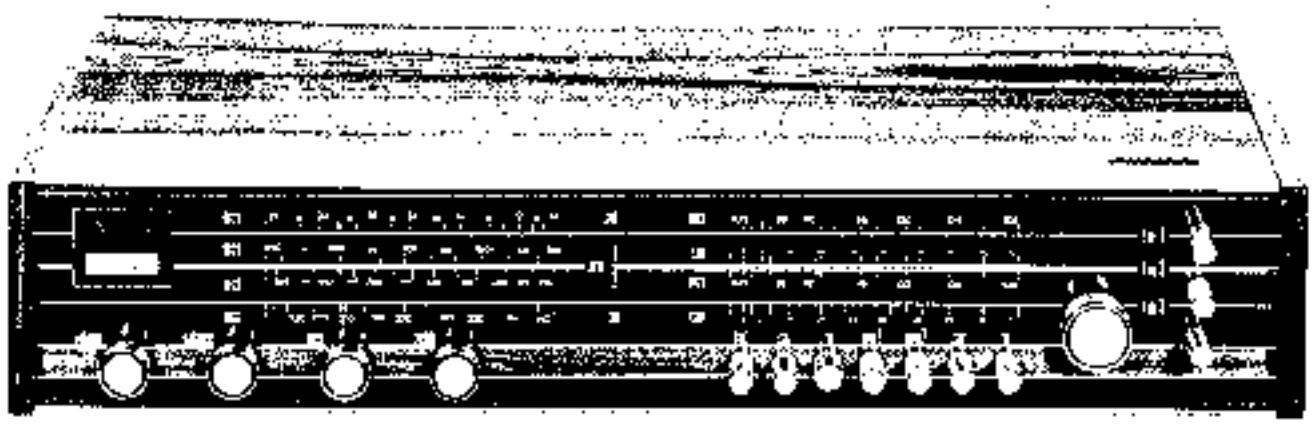




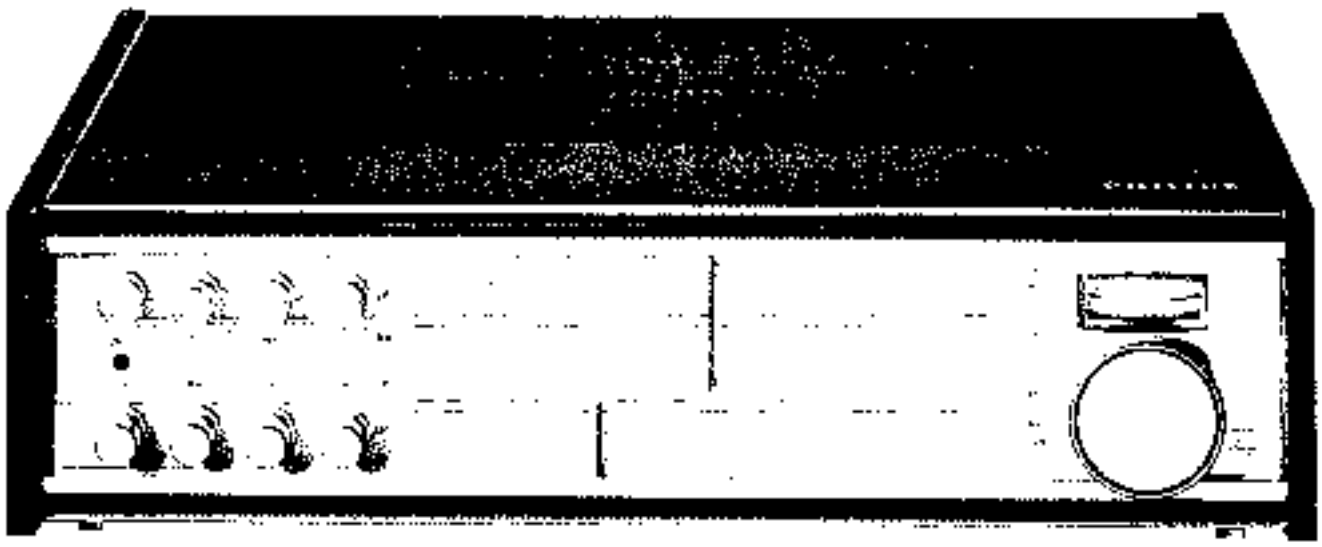




Hi-Fiステレオ アンプ 22RH551

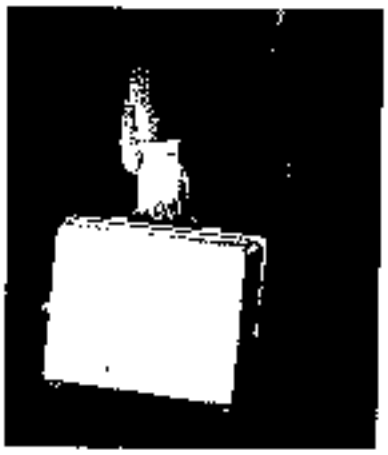


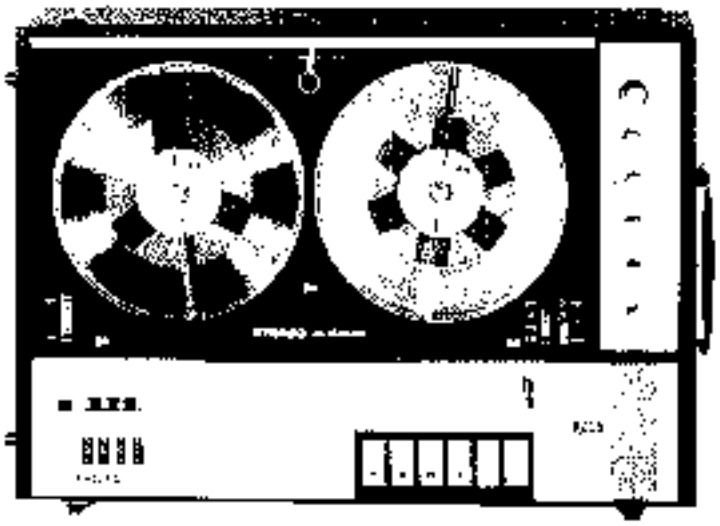
AM・FMステレオ・チューナー・アンプリファイア 22RH381

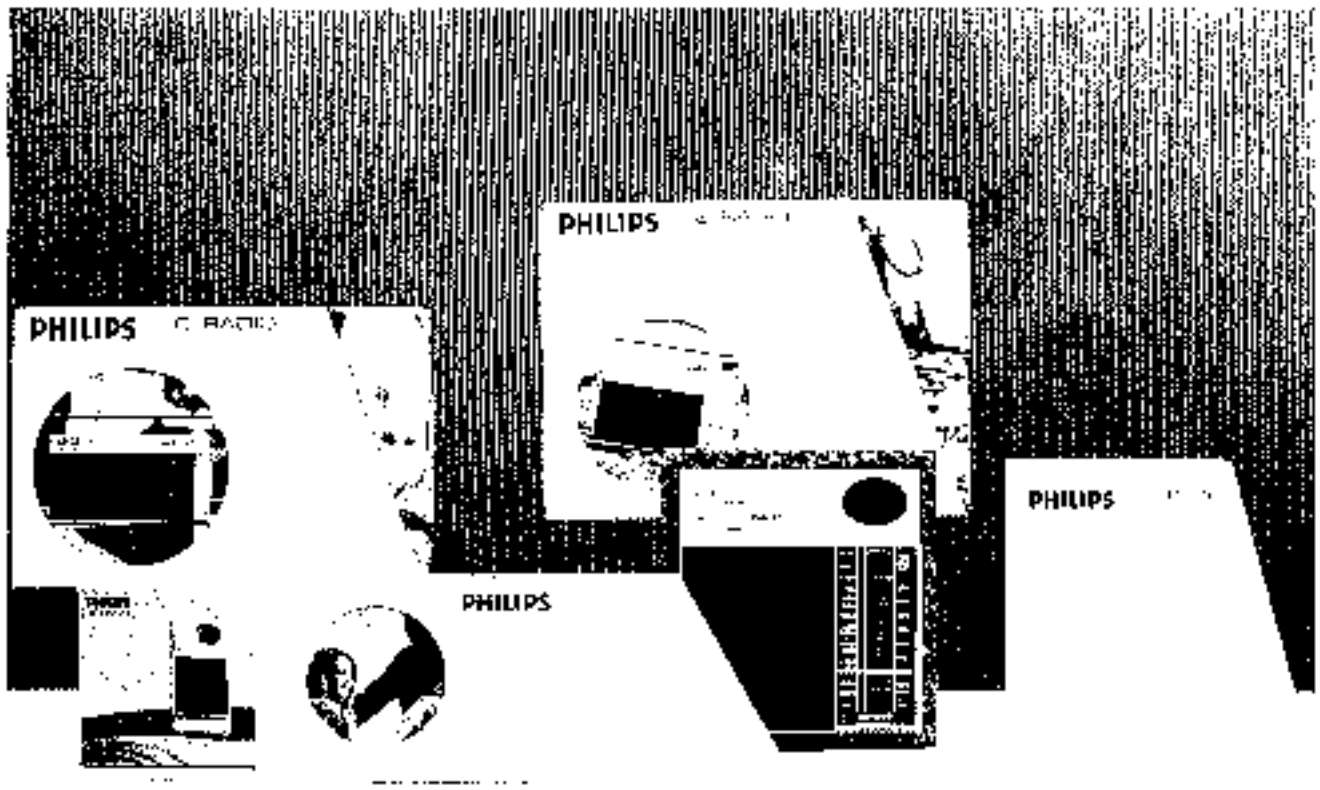


ターンテーブル・システム 22RH591

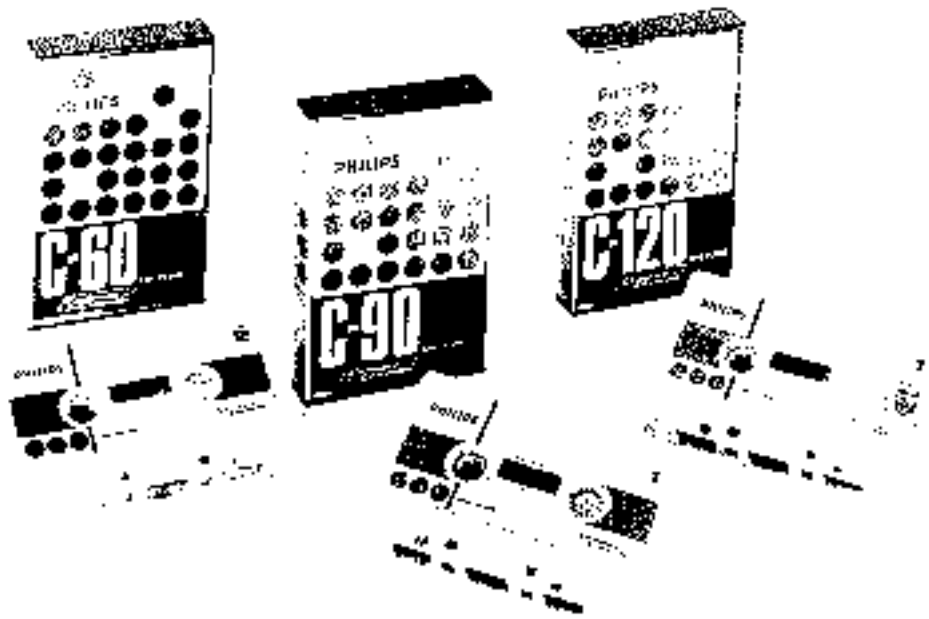
PHILIPS

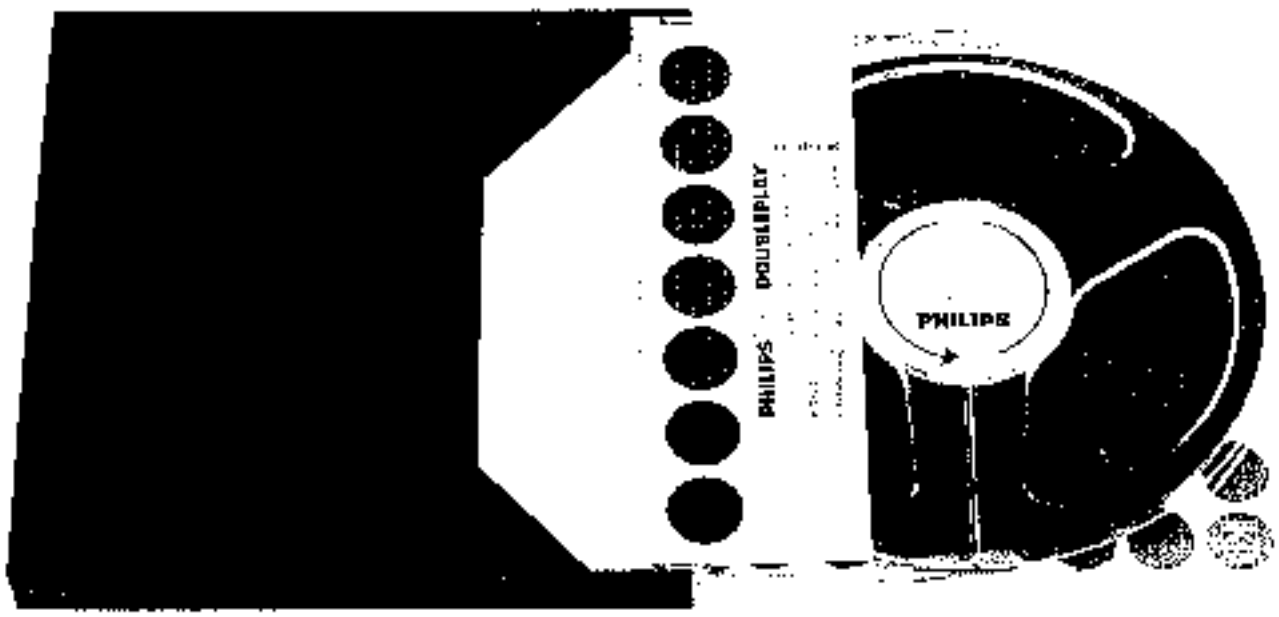


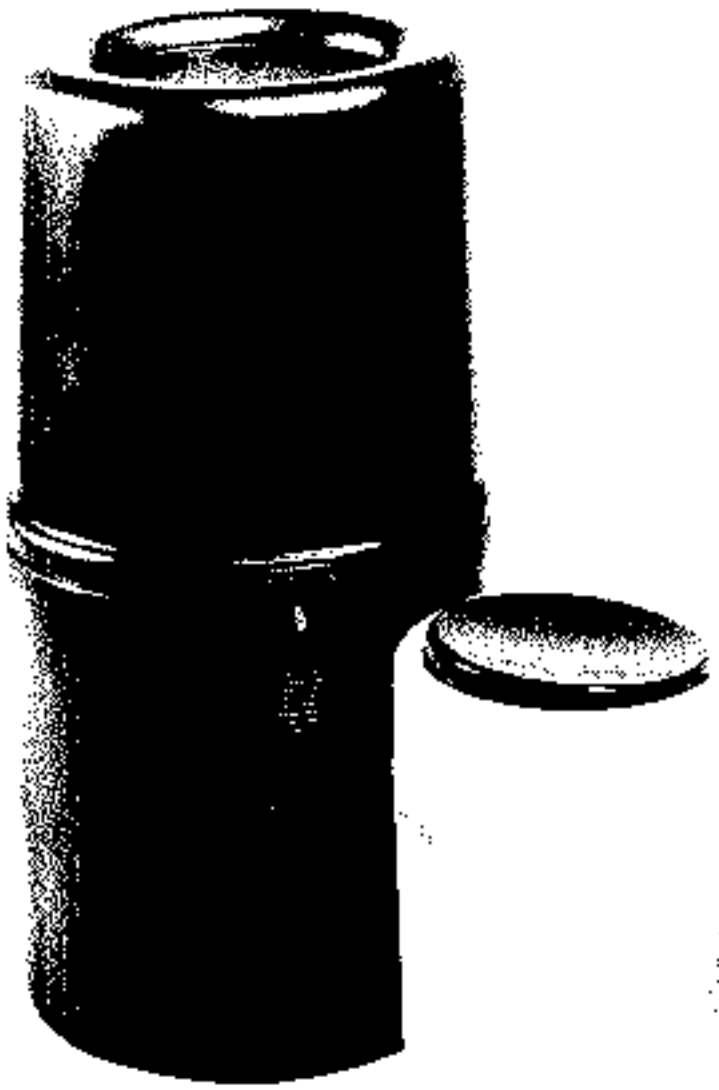


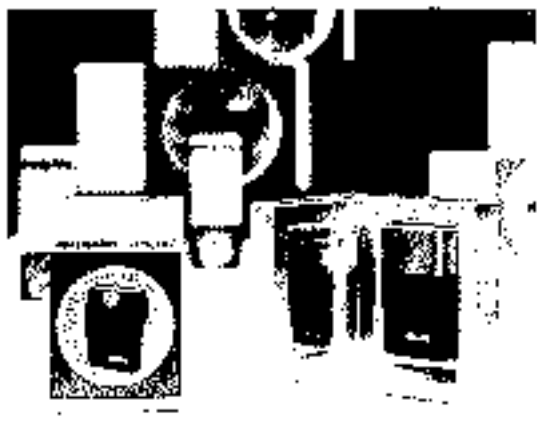

PHILIPS
PHILIPS
PHILIPS
PHILIPS

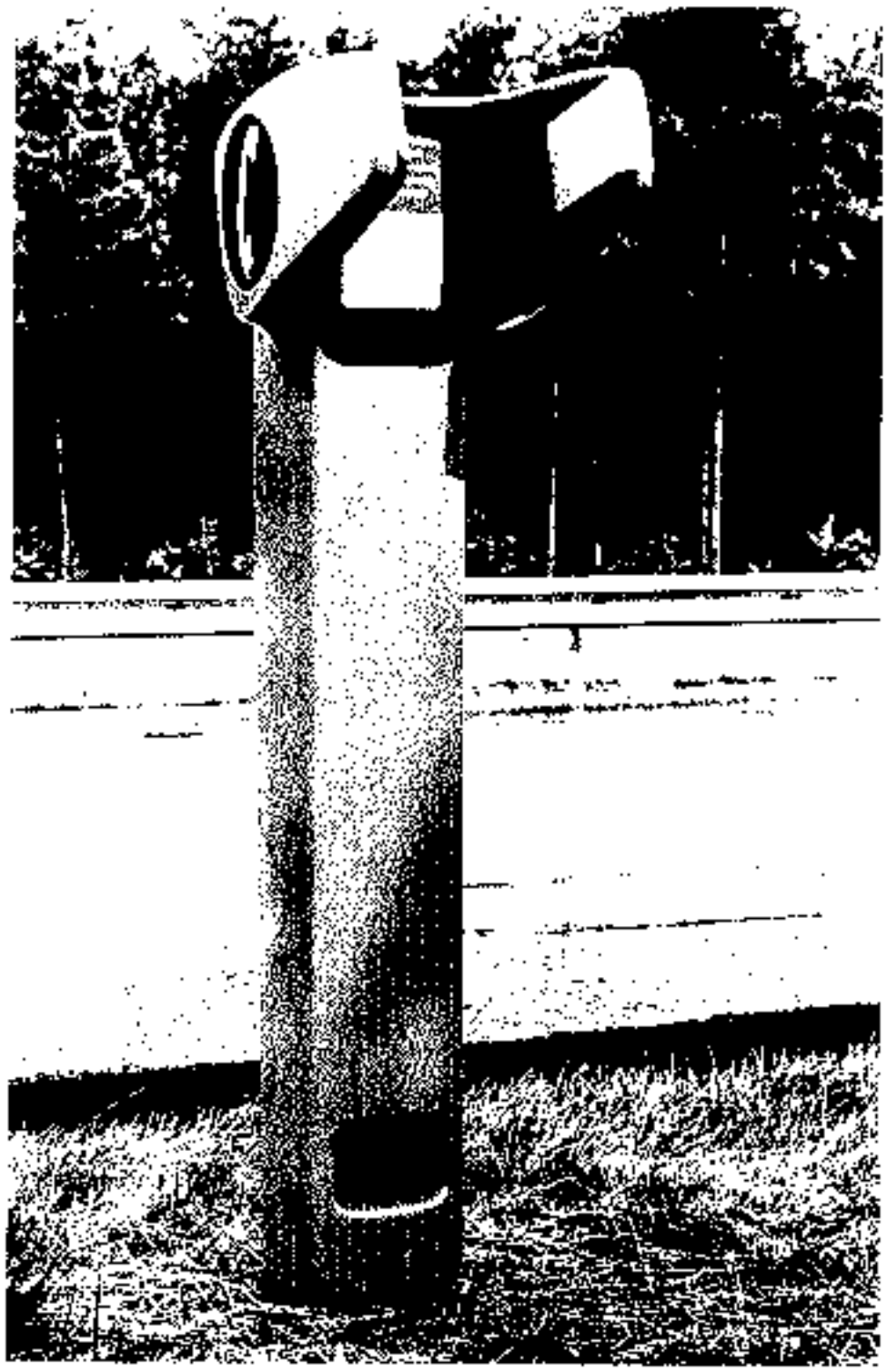
PHILIPS

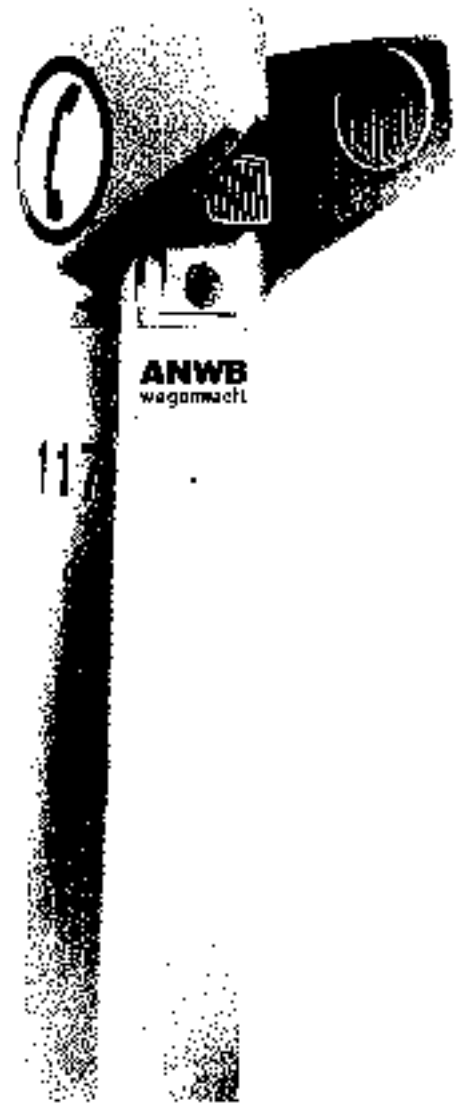

C-60
PHILIPS
C-90
C-120

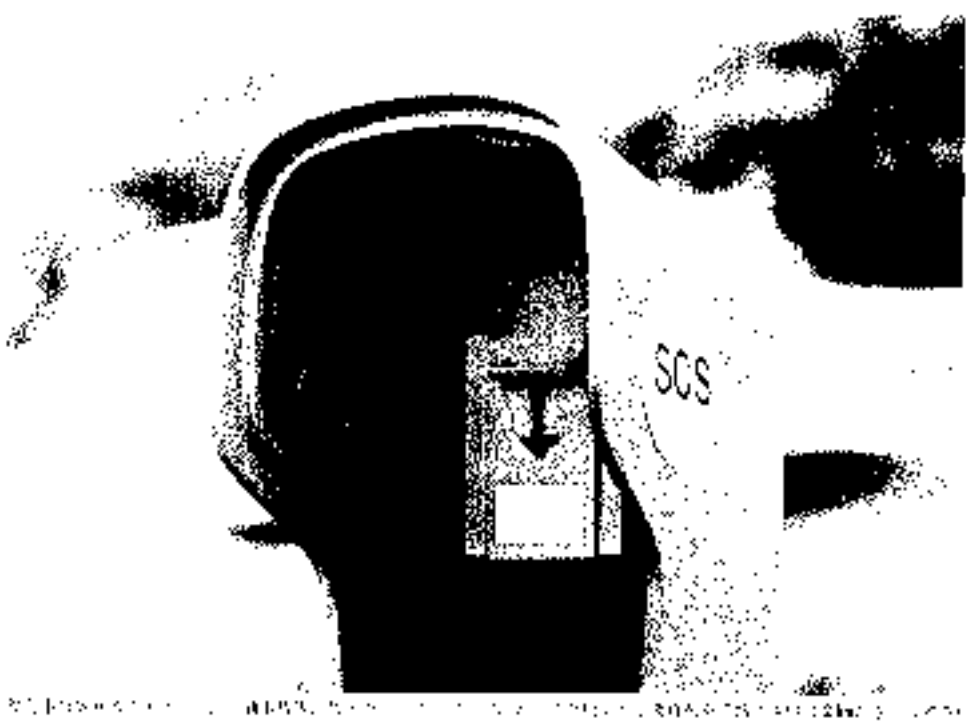

PHILIPS
DOUBLEPLAY
PHILIPS








ANWB
wegomwacht
117


SCS

●1891年，Gerard Philips により，オランダのEindhoven に創設されたフィリップス白熱電球製造株式会社は1892年より，ボルト・フィラメントのランプを製造販売しはじめ，1903年にはヨーロッパでS番目に大きな照明器具メーカーになっている．現在は各種照明器具，ヒゲソリ器，ヘアドライヤーなどの日常小物電化品，ファン，ヒーター，電気掃除機，コーヒーメーカー，アイロン，洗濯機，オーブン，冷蔵庫などの台所・住居用品，各種暖房器具，ラジオ，テレビ，および各種電気器機の部品，付属品，テープレコーダー，電信電話通信機，医療器機，エレクトロニクス器機などきわめて広範囲にわたる製品を生産・販売している．ちなみに創立当時は人口4,600ぐらいのEindhovenはその後の同社の発展によって現在人口185,000の町に発展している．本社(Concern Centre)には，テクニカル・サービス，ジェネラル・サービス，パーソナル・サービスの3部門がおかれ，家庭部門としては照明器具，エレクトロニクス器機，工業用機器，データシステム，ガラス，資材など23の部門がある．この他に調査研究所，貿易振興機関，15の支店が付設されている．

これらは別にベルギー，フランス，ポーランド，イギリスなど世界26ヶ国に支社が置かれており，日本にも1956年に設置された．

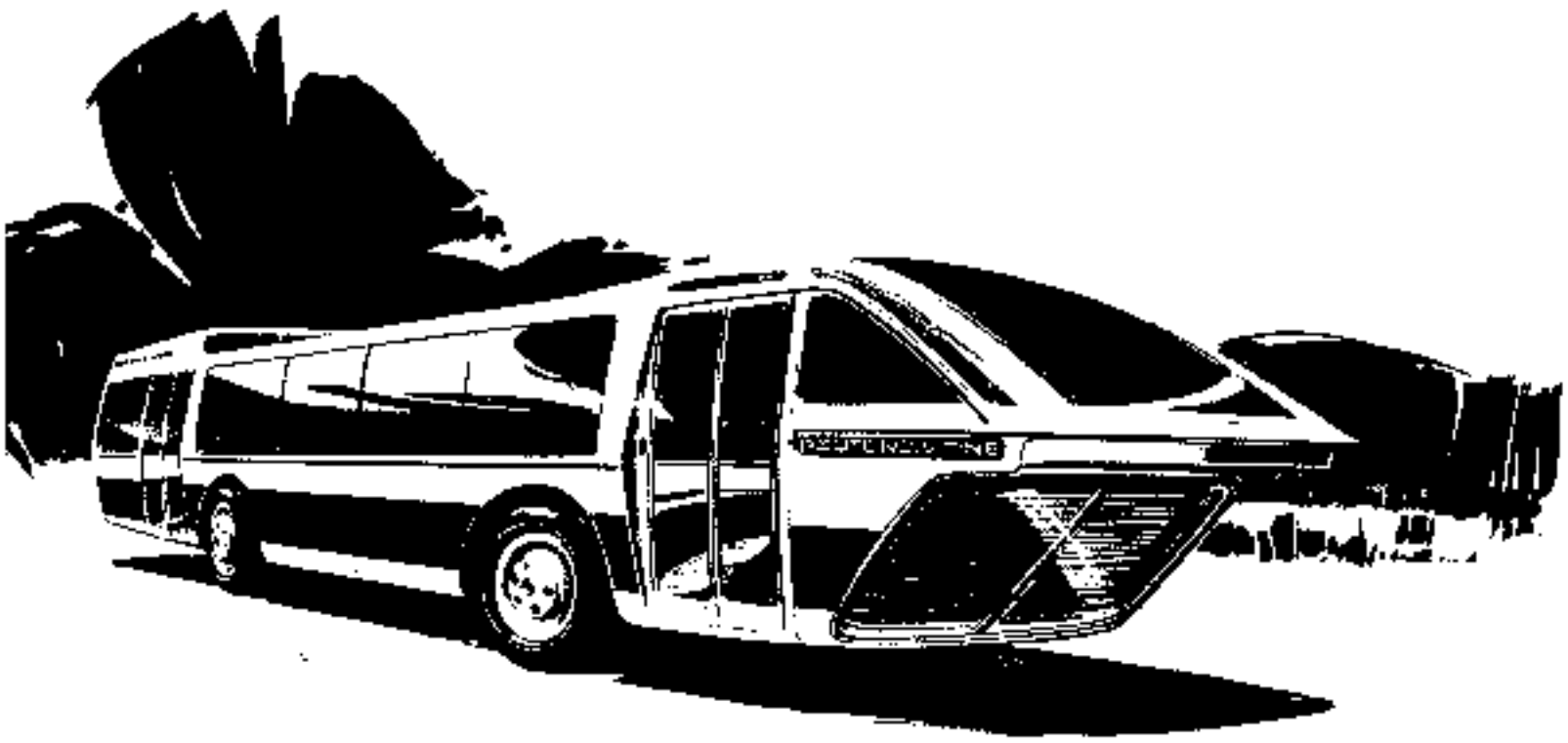
同社のIDを受持っているのは(Concern Centre)のテクニカル・サービス部門の下にあるConcern Industrial Design Centre である．同センターは主にディレクターのKnut Yvon氏が統制しており，彼は13にのぼる生産部門でつくりだされる種々の製品のデザインに対して責任を負っている．また彼は活動を計画し，採用し，管理するために毎週開かれるデザイン・スタッフ・ミーティングを主宰している．

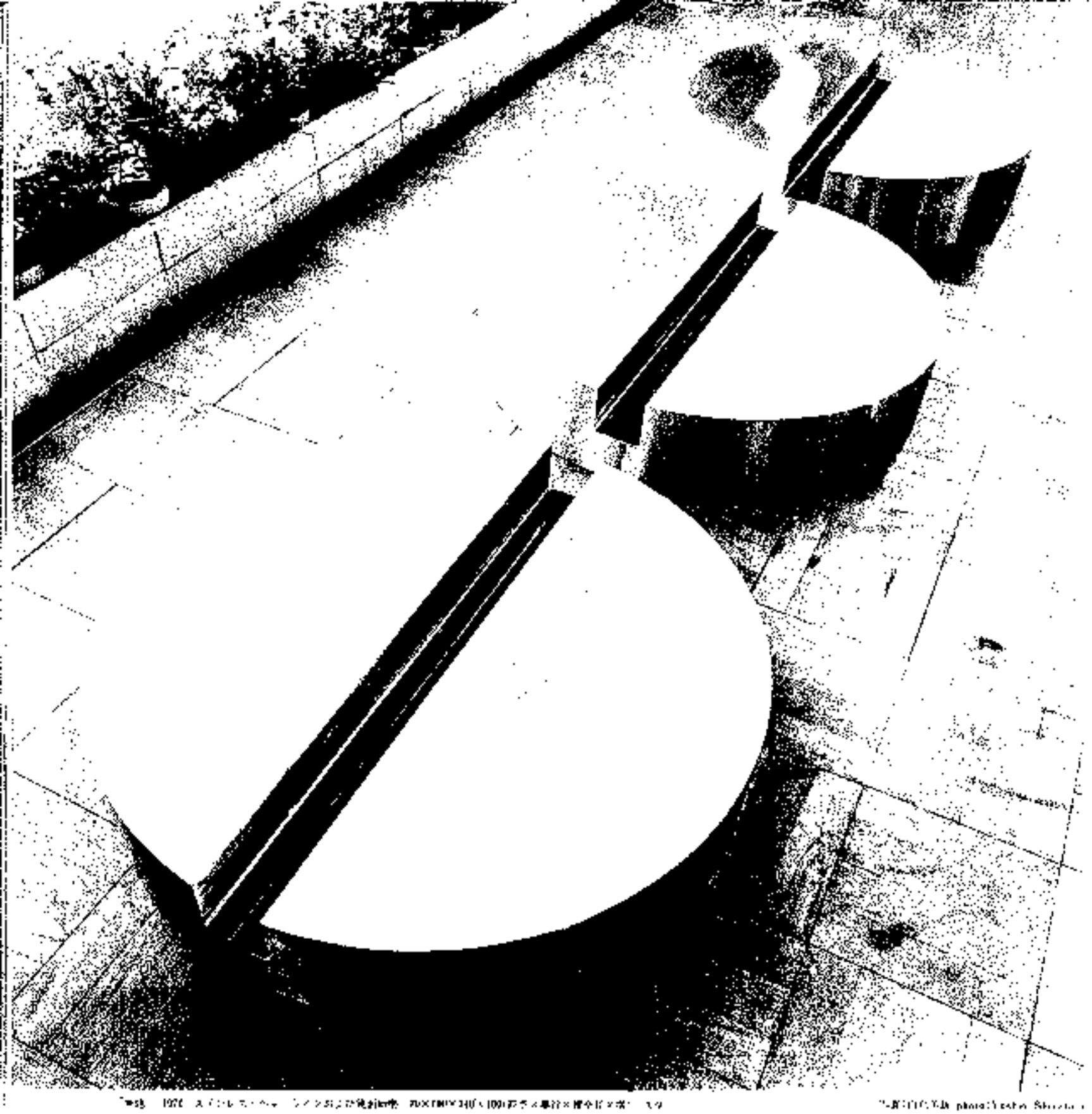
同センターの役割は，フィリップス社の体制のなかで独特な強い輝く，もっとも魅力的な美しさをもつ商品をつくりだすために，テクノロジーを製品に具体化する上でのデザインとスタイリング面での援助をすることである．

ディレクターのKnut Yvon氏はビジネス・プランニングにおけるデザイナーたちに対して次のような意見をもっている．

「今日のデザイナーたちが直面している重要な課題は，大衆が今後どんなものを欲しがるようになるかを予見することであり，さらにその欲求を，人々に愛され信頼される将来性のある立派な商品に実現するための手助けをすることである．今までは人々が必要とするものをつくりだすことが，会社の成功・不成功を決定するもっとも大事な要素だったのだが，今日では，人々が欲するものをつくりだすことが決定的な要因となってきている．

すぐれたID要生のためには，デザイナーが商品の安全性，コスト，会社の目的，インダストリアル・テクニック，全般的なプレゼンテーションその他についてそれらの条件を充すべく，システマティックなアプローチを試みなければならないのだ．また彼は「現代のインダストリアル・デザイナーたちは，まがいトータル・デザインと呼んでいるものに参加すべきだ．つまり大衆は何を買うのか？汗ある私のなかに入っているものだけをかれらは支払いを済ませ，店から受けとったものすべて―製品，包装，保証カード，ラベルなどを買っていることになるのだ．これらのものは，商品を配達するトラックだけでなく，広告用のポスター，紹介パンフレットなどと同じように消費者の試買に影響をあたえる要素となる」と結語をもって述べている．





Tress　1976　スチールにステンレス[illegible]　70×180×340（100）ガラス×蛍光灯×[illegible]　[illegible]

[illegible] photo: Yasuo Shozui

瓦林睦生の作品

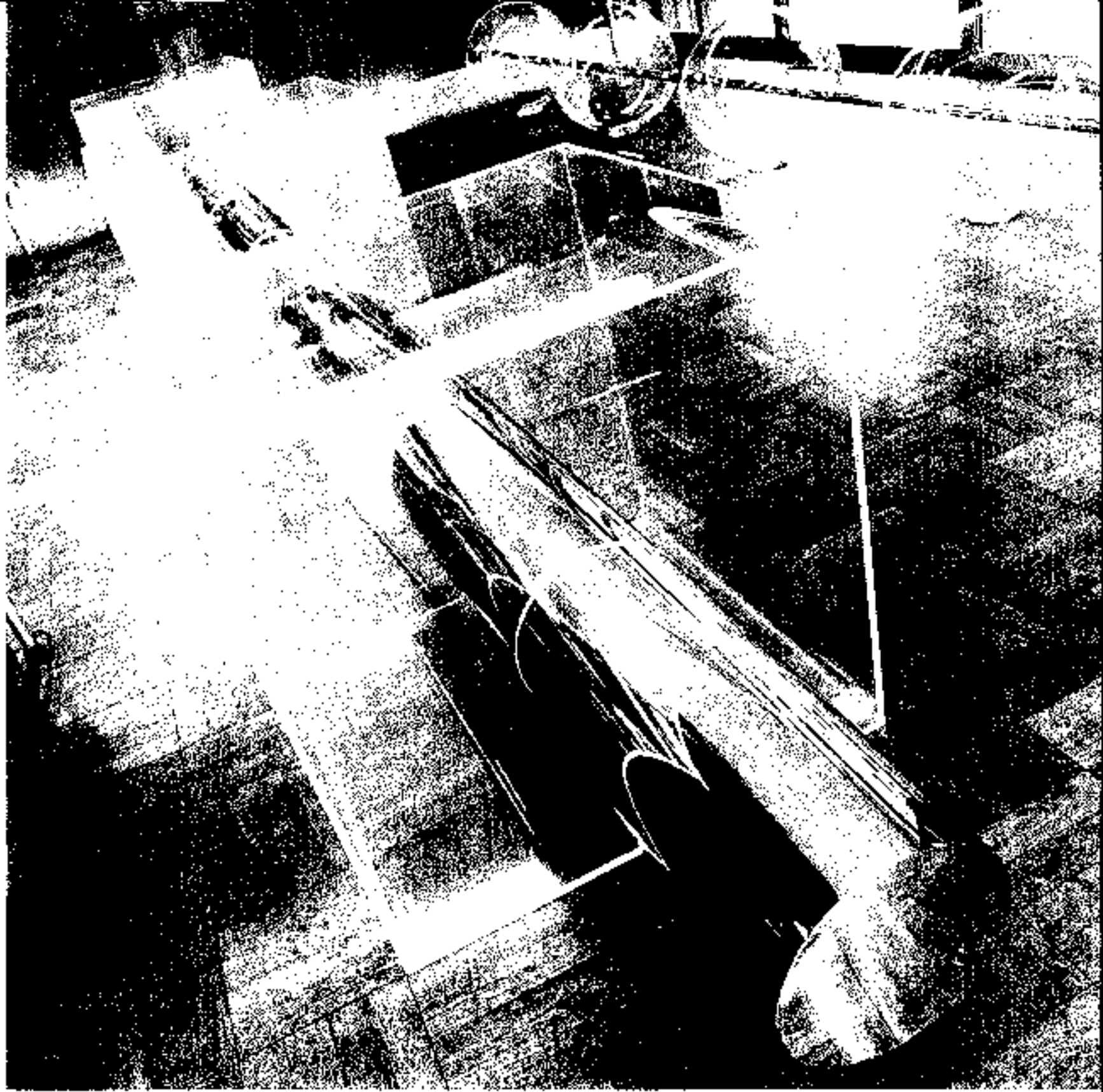
WORKS BY MUTSUO KAWARABAYASHI

繊細なる反復

小倉忠夫

最近では稀にみるさわやかな印象の個展であった。それは瓦林のすっきりと洗練されたシャープな造形と、透明アクリルと鏡面研磨のステンレスという材質から生まれたものだろうが、もう1つは会場全体の環境がなかなか面白かったことにもよろう。この[illegible]は天井が高くて広々としており、ガラス張りで、街中のショールームのあいだに喫茶用の[illegible]りしたテーブルなどが点在している。そんな空間の一角でこの個展は開かれていた。

だから、こんなふうに[illegible]、[illegible]、外国の新聞を[illegible]、[illegible]、瓦林の[illegible]



[illegible] 1975 透明アクリル＋ナイロン×鉄曲線棒 100×160×780×240 [illegible] 「無題」 1970 透明アクリル＋スクリュー＋鉄定規棒 50×30×645×320 [illegible]

[illegible]

現代の平面表現はもはや書くだけ、[illegible]客が[illegible]に対して、[illegible]を[illegible]を通して、[illegible]の作品の[illegible]

アクリルやステンレスの仕事にはっきりと移ったのは、たしか昭和[illegible]人間の歴史とともにあった歴史につきまとう「過去の[illegible]」をふりすてて、現代工業が生みだした冷たい素材を手がけはじめた。様、[illegible]立方体、円筒などの基本形体のくみ合わせから、さらに構成されたユニットをつくり、[illegible]。同一性が反復されると、彼からにそこに展開へのリズムを感じてしまいました。多くの作品にそれが機械的な繰り返しであり、[illegible]相物がもっている。会場で[illegible]を感得した客は、たしかに[illegible]

[illegible]の作家的個性は[illegible]ユニットの[illegible]は[illegible]を[illegible]に極端[illegible]、反面はそれを[illegible]この2つの[illegible]の[illegible]に[illegible]

[illegible]

Untitled 1970 年 Lead 協力:Norwest Trustees

須磨離宮公園第2回現代彫刻展

神戸・須磨離宮公園
主催：神戸市・朝日新聞社・日本美術協会企画委員会

[illegible] Mizuno Tada

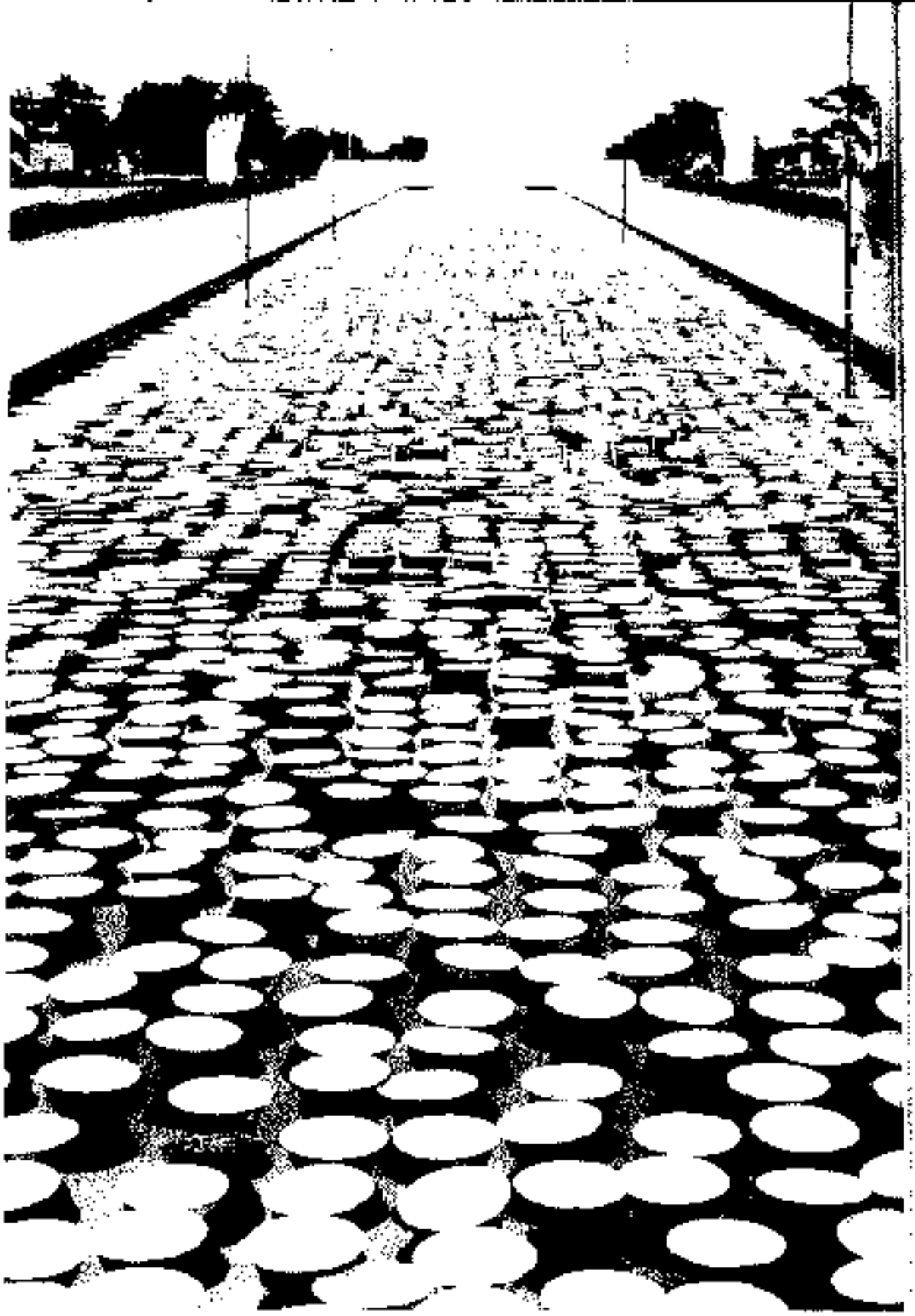
[illegible] photo Kanehara Sakamoto

THE BIENNALE OF KOBE THE 2ND CONTEMPORARY SCULPTURE EXHIBITION

Suma Detouchod Palace Garden, Kobe City

sponsor: Kobe City, The Asahi Shinbun, Japan Museums Planning Council

[illegible] Surface of Water [illegible] Vinyl chloride, Aluminium Mirror [illegible] Hiroaki Tada [illegible]

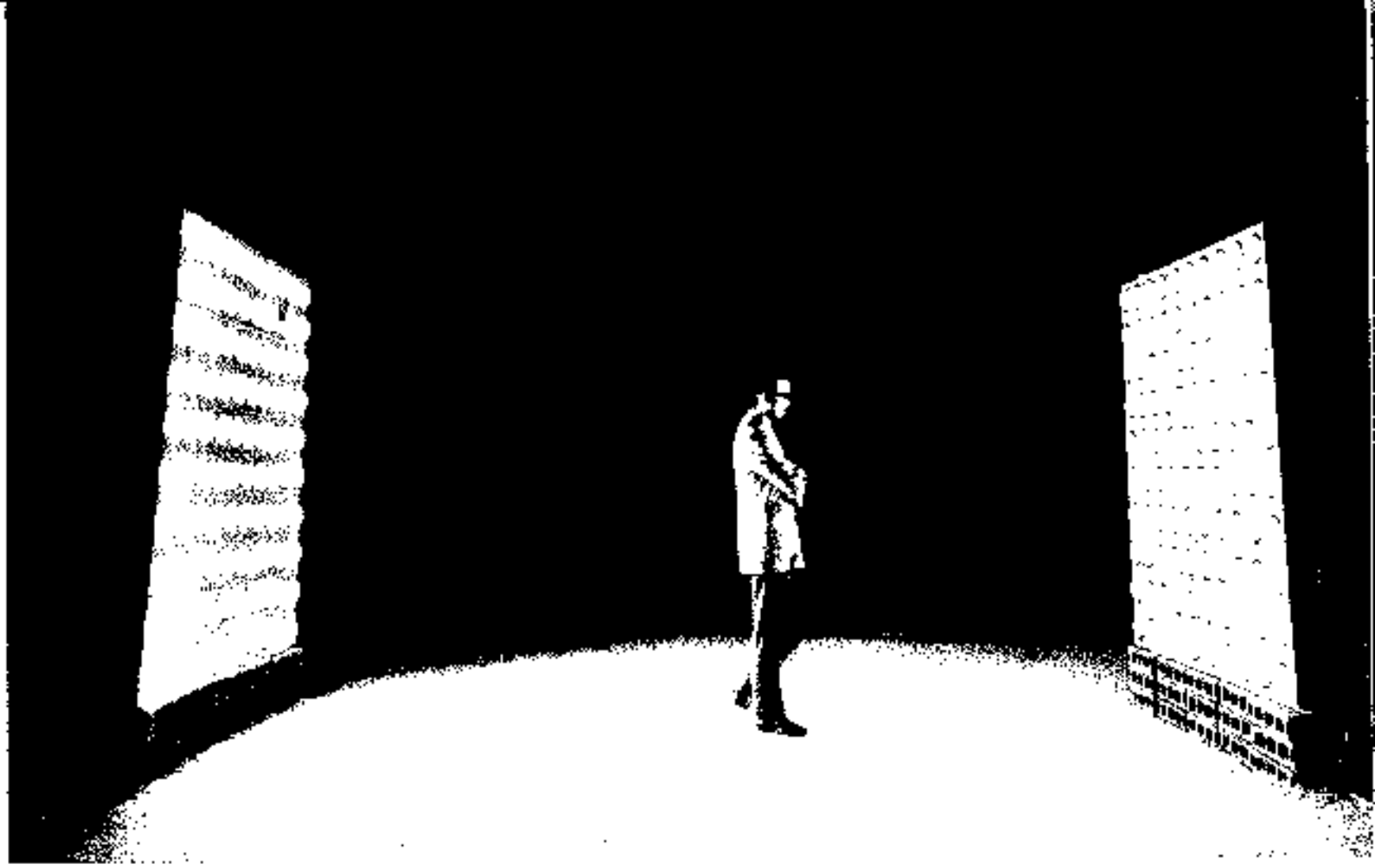


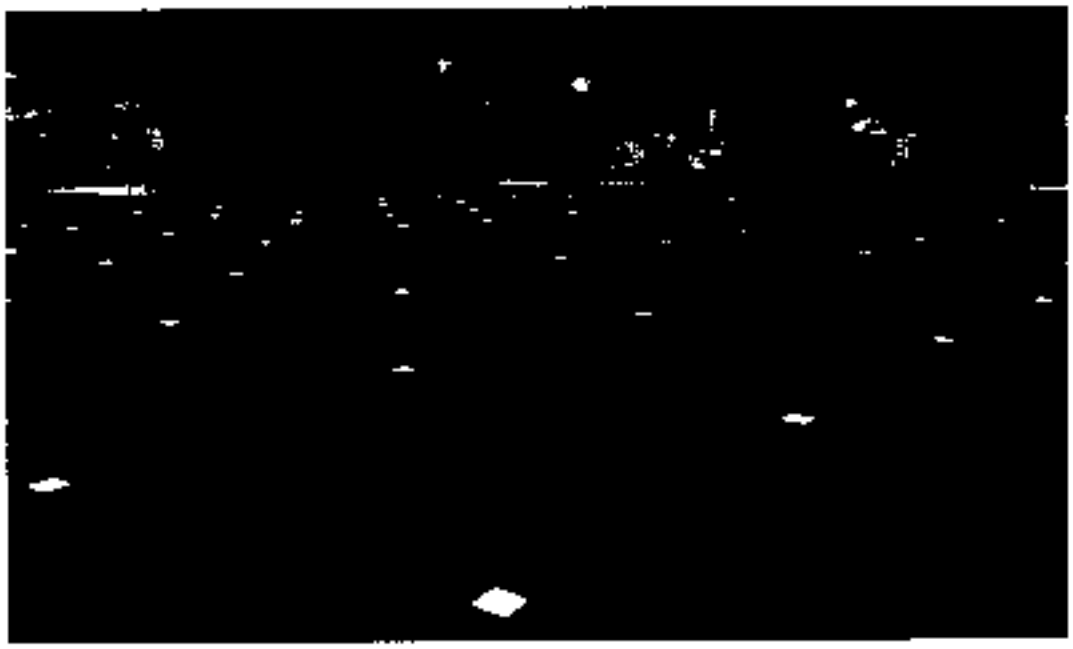
[illegible] Hiroaki Tada

現代彫刻と〈環境〉意識

赤根和生

戦後、彫刻が野外にもたらされるようになった世界的な気運のなかで、初めて陽の目を見たことといえば、まずしげし、そしてキネティック、光彩を放っていた日本の彫刻も、最近は急激に著大な成長を遂げたようである。成長といっても、スケールの大きさや、技法の新しさだけではない、企画上の変革が生じてきたという点においてである。近代美術が確立した造形性という、貴ぶべき特性は、絵画よりも何よりも、彫刻においてもっともモデルな表現を獲得したといえようか。その結果は建築の世界で放棄されつつあるキュビスムの機能を改めて自からの領域のなかにとりこもうとする傾向を生んだことは否定できない。自我意識の崩壊を現代の特徴のひとつとみるならばそれは明らかにアナクロニズムである。しかし、それは流動する時代の現実のなかに存在しえない。ともかく、主潮流となることはないにせよ、彫刻におけるスペシャリティ（専門性）とは、彫刻の初源的な要素であり、つねに空間占有普遍であり、また、明らかな造形性と、ことばにもおきかえられよう。そうしたいわば求心的な性格は、遠心的、拡散的な方向へと切換えられつつあるのが現代である。つまり、環境意識の誕生である。環境とは、空間占有に対する概念であり、造形的秩序によって支えられた完結した自我をいっぱいに包みこんでしまうものである。いわば、永遠は未完結な現実、それが環境であり、さらに端的にいえば、それは物質と人間との相関関係そのものにほかならない。彫刻がそのような意識のもとで、そのような方向をとり得るかはまったく今後の課題だが、その環境意識が普遍化し、特に彫刻の受容の浅い日本においても、というよりも、むしろ、それゆえにこそ、世界的なレベルにおいて新ら





[illegible] Infrared Space 1970 [illegible]
[illegible] Plexiglas, Infrared rays 200×200×20cm 2枚 [illegible]
Masayoshi Yoshimura

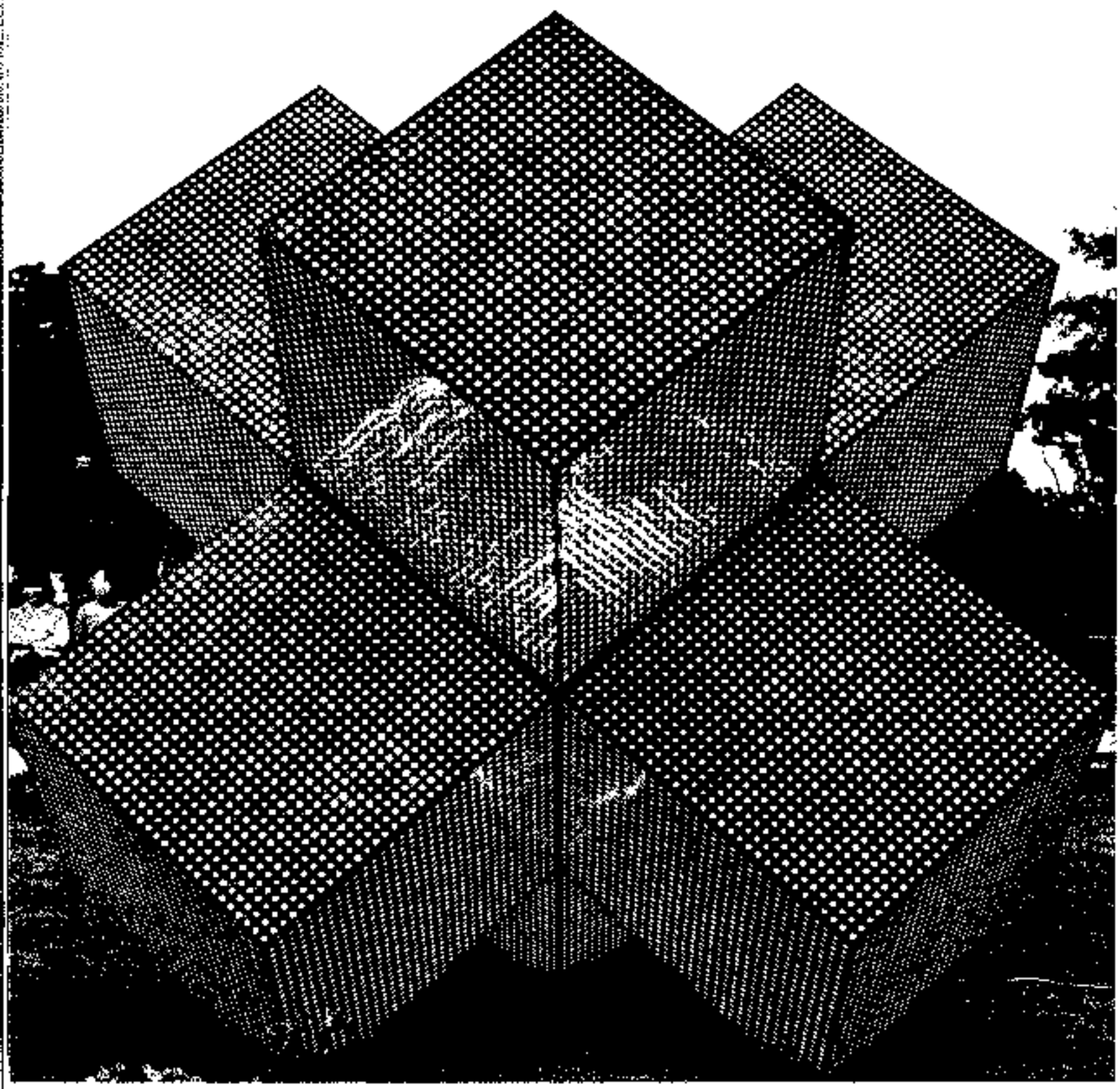
[illegible] Situation 1970 [illegible] Iron, Plastics, Lamp [illegible] Shigeo Matsubara

しい出来が期待されているといえよう。

現代彫刻がおかれる場所として、野外が選ばれなければならないという意識と、野外におかれたという現実の状況の絡みあいがあり、[illegible]さまざまな具体的な展開が予見されるが、これまで聞かれてきた日本の野外彫刻展の行方とか、たとえば平部にしても、和樹にしても、自然色の濃い公園を会場としている。自然空間のなかにおかれた彫刻は、いやが応でも、自然とは対立的な存在方で成り立とうとし、必然的に空間占有性が強調されるのである。自然は人工的の彫刻と等価な環境としてよりも、むしろ彫刻のうしろで壁として存在し、切りとられた自然空間のなかで彫刻自体はその関係的な自律性をふたたび伸長してしまいがちなのである。環境意識の観点からみれば、それは決して最適な空間とはいえない。

地口の展覧会の特異な点は、その展示空間が、公園という閉ざされた場所であることにはかわりないが、その公園が半都市的な性格をもったものであることをまずあげねばなるまい。石垣の建造物と池の噴水とによって構成されたこの人工庭園は緑濃い背後の山、見下す湖の上には飛行機の白煙がゆきかう、といったダイナミックな景観のなかに常駐しているが、都市的性格として欠けているのは、不特定多数の人工車の雑踏という要件だけである。[illegible]環境を問題の作品が対等に受けとめることは難しいことではない。しかし、この展覧会が都市空間との密接な関連において[illegible]問題を解決しようとする試みをもっていることは大きな特色である。

それは、他に見られない「夜」という時間帯を積極的にとり入れていることにも表われている。いうまでもなく、今日の都市環境においては、夜は不可欠な生活の現実を中断する。それは人工の光による夜の時ではなく、もうひとつ別の時空間を意味するものである。第1回のテーマが「水と彫刻・風と彫刻・夜と彫刻」という非現



[illegible] Color and Light [illegible] Sculpture [illegible] Sun, Vinyl Chloride, Fluorescent Lamp [illegible] Fukuoka [illegible]

[illegible]中[illegible]夜[illegible]ように、[illegible]は、自分[illegible]を[illegible]るものであれば、外からのそれで[illegible]効果を生じるものであり、人工の[illegible]の光源が入ってくる余地をなくしている点は見逃せない。[illegible]、外の会場と夜の会場とでは[illegible]ない[illegible]次元の世界が現出するのである。こうした[illegible]環境の2面性はこの展覧会の性格を大きく特色づけているのである。

しかし、今回から主催者の申し出でオブジェの展示作品のうちから買上げたものを会期後、市内に据えつけて欲しいという要望があったことは、彫刻を都市計画という大きな開発形成の一環として、有機的な関連性のうえに存在の目的の一[illegible]

つとする過程として注目される。そして、その点もまた、今日行なわれている野外展のなかでは特殊な性格をもつものと見なされるべきだろう。

このような展覧会が第1回展よりも九だしく活気を欠き、低調の感を与えたのは、招待作家の数が、35名から一挙に25名に減ぜられたことと相まって、同評のような目的から、作品の性格がいわゆる「モニュメンタル」なものの、というような条件づけがなされたことにあるといえよう。展覧会そのものの意義からいえば、今日の現実に通じるものであり、作品自体が全体の関連性より、現実の都市空間のなかに活かされるという具体的な条件づけの、開発過程が発生したことは止むを得ないことであろうが、参加作家のなかには、今日的な環境造成をスローガンにかかげたモニュメンタルなものへの抵抗を示したものもあり、従って興味をそそったが、展覧会そのものの充実度からすれば、第一義的な目的をどこにおくかを明確にし、少くとも[illegible]した問題を十分検討したい。概論すれば、この展覧会は山の空間をかりて、現実の都市そのものの中で行なわれるべきだろう。福岡という都市はそれを可能にするくまなく[illegible]であるからだ。

[illegible]

No.134 MAY 5月号

●特集＝新しい空間の実験　EXPO'70〈竹山　実〉
●スケール・アウトの方法　巨大化の試み
●物質的感覚の実験　無重力の空間――浮遊する空間
　――ホリゾントのない空間
●視覚的実験
　イリュージョン的効果――スーパー・グラフィックの方法
　――ラック・ゾーンの導入
●空間の消去
　非物質化への志向――シェルの透明化と空間の拡散
●東京ブラウス本社＝タカミ・インテリア・デザイン
●コーヒー・ショップ〈2001〉＝安藤忠雄
●レストラン（SPBAR TOW）＝タリータデザイン研究所
●帝国ホテルのインテリア・デザイン
　〈メイン・ロビー〉、〈レインボー・レストラン〉
　＝松前弘デザイン研究所
　〈コーヒー・ショップ〉＝フェルム・インターナショナル
●伊藤邸＝高島建築設計事務所
●世界のLD――4　本田技研工業（日本）
●after-IMAGE from the movie,〈暗殺〉（日活映画）

No.135 JUNE 6月号

●EXPO'70にみる世界のインテリア・デザイン
　〈円田昭彦〉
●スイス館〈レストラン〉
　＝ウィリ・ウェルター＋シャルロッテ・ウェルター・ジュニア
●イギリス館〈インフォメーション・ロビー〉
　＝ゴードン・ボウケー&パートナーズ
●フランス館（レストラン）と〈V.I.P サロン〉
　＝ピエール・ポークン
●カナダ館（V.I.P ルーム）＝フランク・ライヤーズ
●三井グループ館（ラウンジ）＝タリータデザイン事務所
●あるべきパビリオン・デザインの一提示（石井利明）
●横浜市民会館（ルナ・ホール）＝坂倉準三建築研究所
〈円田昭彦〉
●コーヒー・ショップ（レモン）、〈ピノチオ〉＝坂本勇
●クラブ（99/100）＝K. I. D アソシエーツ（浜田晋）
●ジャズミート・リッポロ（アクト）＝内田デザイン研究所
●日民連＝世界政治民主化研究所事務所
●オリビエ・ムルグの作品
●stage-ART〈イヴァンス・レイナーの舞台〉（山口晃）
●after-IMAGE from the movie,（ケルファヴィル）
　（河原温）
●世界のLD－5　ソニー株式会社（日本）
●現代美術の視点－1　見ることから始まること〈原広司〉

No.136 JULY 7月号

●銀座ニューフォーム・インテリア・ショップ
　新しいクリエーション（宮崎浩也、坂本雅規）
●千葉邸＝坂茂建
●K邸＝ヘレ・タリント・インテリア・デザイン・オフィス
●〈ロイヤルクラブ〉、〈ファンタジークラブ〉＝二番館
　＝内田デザイン研究所（内田晋）
●LDヤマギワ研究所（レセプション・ルーム）
　＝伊藤喜雄／K. I. D. アソシエーツ
●ルフトハンザ・ドイツ航空〈チケッティング・オフィス〉
　＝ルフトハンザ本社建築部
●ノースウェスト・オリエント・エアラインズ
　（シティ・チケット・オフィス）＝デザイン・スタジオ
●住友スリーボム〈ビジネス・プロダクツ・センター〉
　＝デザイン・スタジオ
●視覚化の実験（アーバン・デザインとしての二番館ビル）
　＝竹山実／長谷川逸子
●世界の家具……8アルテミデ社（イタリア）
●stage-ART〈セーゼとアロン〉の舞台（初山滋）
●ドロシー・リーブスのテキスタイル・デザイン
●after-IMAGE from the movie,（サテリコン）
　（長崎　勇）
●現代美術の視点－2　第100回現代美術展（赤坂英二）

No.137 AUGUST 8月号

●沖縄＝ニューフォルム・ライト
　（照明器具のデザインはどう変ったか）
●シンポジウム
　＝照明器具のデザインはどのような問題をもつか
●西武百貨店〈サービス・フロア〉
　＝民芸企画スペース／KID アソシエーツ
●カネボウ化粧品のディスプレイ＝タクマタデザイン研究所
●コーヒー・ショップ（ジュン）＝マジマデザイン研究所
●パンの店〈ドーメル〉＝アトリエ・フィー
●ブラックフェースの腕時計〈ブラッキー〉
　＝シチズン商事デザイン室
●東尾修人の作品
●stage-ART〈ホワイト・ボックス〉
　エリシェイクスピア劇場の舞台
　＝ケイス・ファー・モーリー（高田一也）
●after-IMAGE from the movie,〈ウッドストック〉
　（宇佐美明）
●太陽エネルギーによる人工衛星の構想
　人間のためのクロレラ生産と植物のジャイロスコープ式
　構造体（小林芳郎）
●ニュースカイビルの建築計画研究所

No.138 SEPTEMBER 9月号

●特集＝スーパースタジオの造型
●視覚的デザインと深度的デザイン（スーパースタジオ）
●静寂の家のために（アドルフォ・タタリーニ）
●スーパースタジオの思想的背景をさぐる
　（浅沢英・岡山貞人）
●トビア・スカルパのイージー・チェア
●ピエール・ポーランのファニチュア・デザイン
●世界の家具－9　ノル・インターナショナル社〈アメリカ〉
●医科会館によるリビング・ワゴン・デザイン＝安藤光雄
●メンズウェア・ショップ〈MARKET ONE EDWARD'S〉
　＝タクマタデザイン研究所
●2つのハイランド・デザイン'70
　＝ヨーロッパモダン感覚の現代ミリニアンド・ディコ
●ビュー・カメラのための機能デザイン
　＝ジョエC・コロンボ
●レジャー・カプセル〈スペース・ジャック〉
　＝ケース・ジャック
●Stage-ART　金沢能楽劇場舞台（岡田哲）より
　＝金沢ローカルレーション

No. 139 OCTOBER 10月号

●ジョエC. コロンボの新作システム・ファニチュア
　スタッフェ・プラスチック・システム　チェーブ・チェア
　ドゥプリボレット・ベッド　ヒト・リビング
●ブラッテリ・ブランビルケ社のファニチュア・ショールーム
　〈ブンジェロ・マンジャロッティ〉
●日後建設ギャラリー＝大宮建設（河井良介）
●日本オリベッティ横浜支社ショールーム
　（日本オリベッティ広報室）
●スナック〈チエス〉＝内田デザイン研究所
●工芸の店〈むね〉＝安藤光雄・小林正
●ジャズ・ルーム〈The Old Blind Cat〉（伊藤通明）
●カー・カプセルシステムの提案〈現代ホテル〉
●after-IMAGE from the movie
　〈マジック・クリスチャン〉（宇佐美明）
●大山崎ールドビエ美術館（[illegible]）
●鉄山堂五郎行盛河東治一室（[illegible]）
●現代美術の視点（1969年8月号）〈中村信夫〉

バックナンバーをご希望の方は、お近くの書店にお申し込みください

ドムス・カーペット

ドムスカーペット カオス＝パーソナル・ワン

[illegible]

ドムスカーペット バスラ

[illegible]

ドムスカーペット ロンド＝ロールタイプ

[illegible]

ドムスカーペット 天領緞通

[illegible]

ドムス株式会社

[illegible]

プラスチック使いのモダーン・インテリアグッズ ―ローム・ビボ

VIVO

ローム・ビボは、プラスチック材利用の新しい段階を示すものとして注目されているインテリアグッズです。デザインは、あくまでもクール。デコラティブな要素をいっさい削りおとったシャープなラインが身上。色は、レッド、グリーン、ブルー、オフ・ホワイトと明るくさわやかな落着きのあるパステルカラーの十色。種類は、インテリアの新しい用途をもったもの9種類。素材は、耐熱品で、高光沢で美しくできた強度をもつ樹脂。[illegible]。若さあふれるモダンでクールなインテリアにピッタリの現代感覚あふれる製品群です。

R-801・ルームミラー
[illegible]

F-802・マガジンラック
[illegible]

F-803・スツール
[illegible]

F-801・フリーボックス
[illegible]

F-804・傘立て
[illegible]

F-805・傘立て
[illegible]

F-806・スリッパスタンド
[illegible]

F-807・コーナー家具
[illegible]

F-808・テレフォンスタンド
[illegible]

●詳しくは、下記の各営業店にお問い合せください。

常盤商事株式会社　TOKIWA SHOJI CO.,LTD.

HOAM

純毛カーペットの必須条件

ウールマーク品質基準

●カーペットに対するウールマーク品質基準

品種	JASS規格取り分類	純毛含有率	平方メートルのパイルの総重量（パイル糸のみ付）	防虫性	布地の単位面積当りの重量（布地のみ付）	シクロヘキサン可溶物質（油分率）
カーペット	基布中にパイルを含まない織カーペット	パイル糸についてのみ適用	915g/m²以上	IWTO基準		1.5%以内
	基布中にパイル糸を含む織カーペット	半毛織糸以外の繊維含有性混紡：0.3%以内	600g/m²以上（682g/m²以上）			
	タフテッド・カーペット	半毛織糸以外の繊維含有性混紡：5.0%以内	915g/m²以上		ジュートを含んだ裏打ち布地：254g/m²以上 ジュートを含まない裏打ち繊維物又は織立地：119g/m²以上	

※この数値については、測定法のバラツキが大きいために測定法の信頼度をとり5%下し、実際上の基準は630g/m²以上とする。

ウールの良さを最大限に具現しているウールマーク・カーペットは、カーペット・メーカー大変喜ばれています。

●純毛含有率について

ウールマーク品質では、規定として羊毛または仔羊の純毛が99.75%以上と定められています。したがって再生羊毛（ウール製品を細断して再紡績するもの）は、まったく使用できないわけです。再生羊毛を繊維面で見ると、繊度が非常に細くなっています。この繊維繊度は紡績性にとっては良く、羊毛の特性をいちじるしく低下させるため、高級ウール製品には向きません。

この点純毛は柔軟性・耐久性に富み、羊毛の特性を最大限に保ち高級ウール製品としてふさわしい品質のものといえます。

●単位面積当りのパイルの総重量

たて糸1m²当たりに織り込まれた（または植えつけられた）パイル糸の量を意味し製品の種類によって多少数値に差があります。

カーペットはパイル糸の植え込みの密度や長さによって踏み心地が千差万別となります。密度があらすぎたりすると、表面のパイル糸が寝てしまったり、またパイル糸が短かすぎると、使用しているうちに踏まつなどにより切れてしまい、ついには表面に基布が見えてしまって、カーペットとしての機能をまったくなくしてしまうことになりかねません。そのため、カーペットとしての弾力性や耐久性を保つためには、それ相当の密度とパイル長が要求されるわけです。

最高度の品質、ウールマーク製品としてふさわしい目付が何g/m²の程度必要であるかを示しているのがこの数値です。

●防虫性

被害の最も多い害虫として、ヒメカツオブシムシ、イガ、ヒメマルカツオブシムシの3種があげられ、それら害虫は幼虫期にウール、毛、フェルトなどを栄養源として生存します。イガは1日平均で約350倍に成長し一生に食べる羊毛の量は30mgで、100のイガとその子孫が1年間に与える害は羊毛23kgにも達します。

このため家屋内に敷かれた絨毛類をあまり受けない カーペットには、特に防虫性が要求されるわけです。

防虫加工には、樟脳、ナフタリン、パラジクロールベンゼンなどの揮発ガスによる殺虫剤のように密閉容器内においてのみ有効で、かつまた一時的効果しかない方法や、アイルミス、ディルドリン、ディケン、ミッチャンなどの永久的防虫加工法があります。

カーペットの耐久性から、ウールマーク製品では後者の永久的防虫加工が決められています。したがって、ウールマーク・カーペットは害虫による被害の心配はまったくありません。

●布地の単位面積当りの重量

この数値はタフテッド・カーペットのみに規定されています。ウィルトンの場合織りカーペットと異なり、パイル糸を基布に植え込んでいく方法のため、パイル糸の抜けないようにジュートを用いたり、またはジュートの代りになる他の加工をして補強されています。

●シクロヘキサン可溶物質（油分率）

羊毛繊維を紡績する場合、用途に応じて色々の種類を混ぜ合わせて紡績します。その際に油を加え製造するわけですが、油があまり多く残されたままですとゴミやホコリが付着しやすくなってしまいます。逆に油を十分に取り除いてしまうと、縮りにくく（平滑性を程度に低下させてしまいます。

そのため、これらの条件を満足させるための基準が定められているわけです。

以上の4または5項目の品質基準に適合したカーペットだけにウールマークが表示されるので、安心してご使用いただけます。

なお、ウールマークカーペットには、必ずウールマークと共に生産または販売の責任者の所在を併記してありますから、ご不明の点は、直接生産・販売会社へ、または国際羊毛事務局へおたずねください。

●ウールマーク・カーペット ライセンシー一覧

認可会社名	認可番号	認可品種
日本毛織	1	タフテッド・ウィルトン
東洋紡績	41	タフテッド・ウィルトン
東洋紡績	85	タフテッド・ウィルトン
ニッポリー	90	ウィルトン
大建産業	23	タフテッド・ウィルトン
明和織物	249	ウィルトン
東洋江面	256	ウィルトン
亀井産業	459	ウィルトン
宇佐織物	450	タフテッド・ウィルトン アキスミンスター・ダンマット
宇佐織物	479	ウィルトン
大阪毛織	503	ウィルトン
太田織物	506	ウィルトン
新東産業	507	ウィルトン
中止織物	508	ウィルトン
大阪産業	529	ウィルトン
金井産業	532	ウィルトン・タピストリー
東洋インテリア	705	ウィルトン
東洋織物	745	ウィルトン・アキスミンスター
東洋織物	824	ウィルトン
金剛パイル織物	851	ウィルトン
取引織物	952	タフテッド・ウィルトン
オリエンタルカーペット	1303	ウィルトン
東洋毛織	1404	ウィルトン
日本毛織	1408	ウィルトン
宗像産業	1454	ウィルトン
東洋	1534	ウィルトン
大[illegible]	771	ウィルトン
[illegible]	773	ウィルトン
[illegible]	777	ウィルトン

ALL NEW WOOL

羊毛100%使用表示の品質基準に合格したしるしです

国際羊毛事務局

東京都港区赤坂区内

本号の執筆者（アルファベット順）

赤根和生　美術評論家
兵庫県西宮市高木西町7－19

荒木　正
東京都渋谷区北青山3－2－2　A・Yビル2階　アルフレックスジャパン

井上清紀　建築家
東京都渋谷区神宮前4－30－6　セントラルアパート781号　世界光建築研究所

ジョエC. コロンボ
Via Filippo Argelati 30A, 20143 Milano, Italy

加藤邦雄　建築家
東京都港区赤坂9－5－12　東京建築事務所

小倉忠夫　美術評論家
京都市右京区下嵯峨宮ノ元町9　社会同潮荘 216号

スーパースタジオ　建築家グループ
piazza di Beltoguardo, 1 50124 Firenze, Italy

CONTRIBUTORS TO THIS ISSUE

Kazuo Akane, art critic
7-19, Takagi Higashi-cho, Nishinomiya-shi, Hyogo

Tadashi Hoshina,
A. Y bldg. 3-4-2 Kitaaoyama, Minato-ku, Tokyo

Seiki Inoue, architect
No.781 Central apt. Jingumae, Shibuya-ku, Tokyo

Joe C. Colombo
Via Filippo Argelati 30A, 20143 Milano, Italy

Tadao Kato, architect
Sakakura Associates Architect & Engineers 9-5-12 Akasaka, Minato-ku, Tokyo

Tadao Ogura, art critic
No. 216 Kasoso apt. 1-3 Rokuzondo, Shimotsuhayashi, Ukyo-ku, Kyoto

Superstudio
piazza di Beltoguardo, 1 50124 Firenze, Italy

本号広告掲載会社名（アルファベット順）

株式会社アルフレックス・ジャパン
東京都港区北青山3－2－3　409－8361　輸入家具

イメス株式会社
大阪市東区淡路町3－6　大阪251－5031　テキスタイル

一家レイヨン
大阪府中央区京橋2－6　272－4321　合成繊維

松下電器産業株式会社
大阪府門真市大字門真1006　大阪991－1121　照明器具

日フェルプポーン株式会社
東京都港区赤坂9－6－24　東京スタジオセンタービル　402－9442　輸入家具

日新製鋼株式会社
大阪府千代田区丸の内3－4－1　新国際ビル　216－5521　ステンレス加工

日本パーティション株式会社
東京都中央区日本橋江戸橋3－7　272－2011　パーティション

株式会社七彩工業
東京都港区南青山2－24－15　青山タワービル　409－7771　マネキン・家具製造

株式会社榎村製作所
東京都千代田区神田3－2－14－2　山王グランドビル　581－6027　事務用器具

株式会社ヤマ興業
東京都千代田区岩本町1－5－13　862－6161　家具，板部，椅工

ヤマハミュージック株式会社
東京都千代田区大手町1－4　大手町ビル　201－7711　椅子

スカンジナビア社
東京都千代田区有楽町1－2　東京マイングリービル　508－5881　建材

株式会社日高屏三製作所
東京都港区麻布6－2　960－5131　厨房金物

株式会社岩中工務店
東京都千代田区神田錦町1－9　294－2111　建設

彩美商事株式会社
東京都文京区小石川4－10－2　814－4411　テキスタイル

内一商事株式会社
岐阜県岐阜市金宝町8－8　岐阜64－3251　テキスタイル

ヤンマー産業株式会社
東京都千代田区外神田4－1－1　253－2111　医療器具

INTERIOR-NOTE

●9月号（No. 139）の特集（スーパースタジオの造型）は，数多の住宅の1部，インテリア・デザイン関係の作品を，その思想的背景をなす哲学的発想とともに紹介した。今回は，哲学的発想を根拠とされた，具体的なプロジェクトに対する造型理論をもいろいろ，シングルデザインのイデーを前提に構成された，〈マンティニアス・モニュメント〉シリーズについてとりあげた。

彼らは個性としての造型の理論〈シングル・デザイン〉は，極く小さな造型から，ビッグプロジェクトに至る，すべてのデザインを可能にする，造型に対する最も，プライマルな理論であると思う。今回取上げた，〈マンティニアス・モニュメント〉は，その最終的なプロジェクトに位置づけられ，すでに注目されることは，おそらく実現しない造型，その建築的イメージの世界を，論理的にしかしすぐれたテクニックによって視覚的にうみだすことに徹底していることであろう。

編集部に届いた資料の中で，彼らは「何よりわれはその過程において人々に提供できるプロジェクトの形成と，その行為を通して論理を深めることを同時に行いたいと考えている，そしておそらくは独創しなければならず，それは同等の視覚的影響力をもち得る〈非物理的建築〉の可能性を想定する」と述べている。

私たちデザイナーが社会に対して，また企業に対して，それぞれの資質を通じて自らの思想を伝達するのに言うまでもないことだが，現実ベースを通して芸術家の精神を完全な形で提示する際，それ不可能なことであろう。

スーパースタジオは，何ものにも制約されず自らの論理と感覚に忠実に活動しうる唯一の方法をわれわれに示してくれた，しかもそれはきわめて力ある表現力と説得力を持ってである。

インテリア　No.140　定価 [illegible] 円（〒 45円）
1970年11月1日発行　毎月1回発行
発行所　株式会社美術出版社／東京都渋谷区代々木1－36　第3西中ビル　〒 150
発行人　真継　伸
編集人　森山雅夫
印刷所　東洋印刷株式会社／日本グラビア株式会社／小宮山印刷株式会社
　　富士美術印刷株式会社
製本所　新日製本株式会社

インテリア 第148号／昭和45年11月1日発行／隔月1回1日発行／昭和42年6月13日第3種郵便物認可／昭和45年1月21日国鉄関東支社承認雑誌第203号／発行所 株式会社文化出版局 東京都新宿区片町1-36 第2袋中ビル／電話(341)7611／振替[東京]108170

くつろぎプラス空間のシンホニーです

現代はすべてが動く。行動の中身も変化する。くつろぎの時間も長くはない。だからこそくつろぎはほんものでなくては……

ドムス・カーペットはあなたのまわりにゆたかな空間を作ります。それはあなたの想像以上に室内に何かをあたえます。色彩、感触、量感、それらがミックスされて新しい感覚の世界を作ります。

ドムス株式会社

大阪 TEL (251)9091
東京 TEL (502)0851
福岡 TEL (28)5436
北九州 TEL 小倉 (57)2531
札幌 TEL (63)3271

雑誌コード1621 Printed in Japan

定価 880円(〒45)